福井県埋蔵文化財調査報告　第36集

福　井　城　跡

－国際交流会館建設に伴う発掲調査－

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告　第三六集

福　井　城　跡（国際交流会館地点）

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告　第36集

福　井　城　跡

－国際交流会館建設に伴う発掘調査－

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序　　文

福井城は、徳川家康の次男　結城秀康が越前を治める中心として1601年から約6年の歳月をかけ造営した典型的な近世城郭です。近年まで石垣等城郭の名残を随所に残していましたが、市街地の開発に伴い福井城の縁(よすが)をしのぶものは本丸のみとなりました。

この度、知事公舎の旧地に国際交流の拠点として国際交流会館が建設されることになりました。ところが建設場所は周知の遺跡である福井城内にあたります。このため地下室の建設等による破壊を免れないことから、記録保存すべく発掘調査を実施いたしました。

調査では近世福井城の武家屋敷に関わるゴミ穴等遺構群の他、質の高い多数の陶磁器群、漆器椀や箸・下駄、さらに木簡等多量の木製品の出土が目を引きます。特に木簡は当時の武士の生活を知るうえで貴重な文字資料といえるでしょう。

さらに下層より中世の遺構も確認されました。特に南北溝や砂利敷道路道路等街区を想定させる遺構の他、南北溝から１６世紀後半に特定される多量の遺物群も見逃せません。これら遺構・遺物は、文献でもあまり知られていない福井城以前の福井市街地の歴史を考える上で重要な重要な手掛かりとなりました。

今後福井市街地では大きな再開発に伴い大規模な発掘調査がおこなわれると思いますが、本書がその際の一助となれば幸いです。

最後になりましたが発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、多大なご支援をいただいた関係諸機関をはじめ、地元関係者の皆様方に、厚くお礼申しあげます。

平成20年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本書は、福井県国際交流会館の建設工事に伴い、平成６年に発掘調査した福井県福井市宝永３丁目に所在する福井城跡の調査報告書である。

2　福井城跡の調査は、福井県県民生活部国際交流課の依頼を受け、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、埋文センター）が実施した。

3　発掘調査は、平成６年６月３日から９月６日まで埋文センター文化財調査員本多達哉、河村健史が行い、当センター主査富山正明、文化財調査員中川佳三の協力を得た。
遺物整理作業は、平成７年４月１日から平成９年３月31日まで、埋文センターで実施した。

4　本書の執筆は、本多と河村が分担した。執筆分担は、目次の末尾に記した。本書の編集は、河村が行った。

5　出土遺物の図化・図版作成・写真撮影は、埋文センター作業員の協力のもと、上記担当者を中心として行った。

6　調査関係資料は、埋文センターで保管している。

凡　　例

1　本遺跡の名称は「福井城跡」とし、地点名を「国際交流会館地点」とした。また、略号を「FKJ 94－1」とした。

2　報告順序は周知の遺跡として登録される「福井城跡」を主として先に報告し、中世編の報告はその後とした。

3　遺構番号は遺構の種別に関わりなく通し番号とした。但し、調査後、遺構番号を見直し、本書では新たに付け直した番号で記載している。第２～６・21表では旧番号も備考として記載する。

4　本報告書の実測図縮尺はそれぞれの図版に記す。ただし陶磁器実測図では原則１/３とするが、大型品（甕・擂鉢等）は１/４以下とした。１/３以下の図について個別に実測番号前に「▲」を付けて区別した。

5　遺物観察表の法量はcm単位である。又、法量カッコ内の数値は、口・底径では復元値を、器高では現状値を示す。

6　陶磁器遺物観察表中、産地の項目のうち、「瀬・美」は瀬戸美濃。「京・信」は京・信楽を示す。また、肥前磁器は「伊万里」とし、肥前陶器は「唐津」とした。

7　木製品遺物観察表第13・16表中、実測図番号のないものは観察表のみの紹介である。

8　写真図版九～十四中、遺物の集合写真内に番号の附されていないものは実測図がない参考品である。

この報告は、本来ならば平成８年度に刊行する予定でしたが、諸般の事情により遅延し、今日に至りました。

なお、報告書原稿は、既に執筆されている部分もあることから、混乱を避けるため当時の内容で執筆を進めました。そのため、現在の見解とは一致しない部分があります。

目　　次

第１章　調査に至る経緯と経過　頁

第１節　調査に至る経緯 ……（本多達哉）　1

第２節　調査の経過 ……（本多）　1

第２章　遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境 ……　3

第１節　地理・歴史的環境 ……（本多）　3

第２節　画期の設定 ……（河村健史）　6

第３章　近世（福井城期）の遺構と遺物

第１節　福井城期の遺構 ……（河村）　7

第２節　福井城期の遺物 ……　32

第１項　土・陶磁器 ……（河村）　32

第２項　木製品 ……（本多）　67

第３項　金属製品 ……（河村）　92

第４項　石製品 ……（河村）　96

第４章　中世（北庄城期）の遺構と遺物

第１節　北庄城期の遺構 ……（河村）　102

第２節　北庄城期の遺物 ……　110

第１項　土・陶磁器 ……（河村）　110

第２項　木製品（16 世紀末）……（本多）　115

第３項　金属製品 ……（河村）　118

第４項　石製品 ……（河村）　119

第５章　まとめ ……（河村）　120

附章　福井城跡出土木製品の樹種 ……（パレオ・ラボ　植田弥生）　122

図 版 目 次

図版第一　遺　　跡　(1) 遠景（西より）　(2) 全景
図版第二　近世遺構　(1) 屋敷B　柱穴群（北より）　(2) 屋敷C　全景
図版第三　近世遺構　(1) 柱穴遺構 50　(2) 柱穴遺構 45　(3) 柱穴遺構 53　(4) 柱穴遺構 15
(5) 柱穴遺構 17　(6) 柱穴遺構 10
図版第四　近世遺構　(1) 池状遺構 232 導水部（西より）　(2) 池状遺構 232（南より）
図版第五　近世遺構　(1) 上水道施設遺構 304（北より）　(2) 上水道施設井戸遺構 301（東より）
図版第六　近世遺構　(1) 上水道施設溜枡遺構 303（南西より）　(2) 木樋遺構 306（南より）
図版第七　近世遺構　(1) 上水道施設竹管継手（部分）　(2) 上水道施設井戸遺構 205（北東より）
図版第八　遺　　構　(1) 土坑遺構 92（北西より）　(2) 土坑遺構 133
(3) 中世遺構 540 漆器出土状況　(4) 中世遺構 540 編籠出土状況
図版第九　近世陶磁器一（遺構 6・28・29・30・37・44・59）
図版第十　近世陶磁器二（遺構62･65･70･72･73･76･78･82）
図版第十一　近世陶磁器三（遺構83･86･88･89･91～96･99）
図版第十二　近世陶磁器四（遺構100･102･109･110･112･116）
図版第十三　近世陶磁器五（遺構122･127･129･145･154･156･179･182）
図版第十四　近世陶磁器六（遺構187･200･201･225･230･232～234･242･302）
図版第十五　近世木製品一　漆器
図版第十六　近世木製品二　漆器
図版第十七　近世木製品三
図版第十八　近世木製品四
図版第十九　近世木製品五　下駄
図版第二十　近世木製品六
図版第二十一　近世木製品七　木簡
図版第二十二　中世遺構　(1) 溝遺構540　全景（南より）　(2) 土坑群（西より）
図版第二十三　中世遺構　(1) 溝遺構540　石積部（南より）　(2) 舗装道路（東より）
図版第二十四　中世陶磁器（遺構502･517･518･524･540）
図版第二十五　中世木製品一　漆器
図版第二十六　中世木製品二
図版第二十七　中・近世金属製品
図版第二十八　中・近世石製品

挿図目次

頁

第１図　調査区グリッド・試掘位置図（S＝１／500）…… 2
第２図　周辺の遺跡分布図（S＝１／50,000）…… 5
第３図　調査区位置図（S＝１／5,000））…… 7
第４図　17 世紀遺構配置図（S＝１／500）…… 8
第５図　19 世紀遺構配置図（S＝１／500）…… 9
第６図　近世福井城期遺構配置図（S＝１／200）…… 17・18
第７図　柱穴１（S＝１／50）…… 19
第８図　柱穴２（S＝１／30）…… 20
第９図　柱穴３（S＝１／30）…… 21
第10図　土坑１（S＝１／60）…… 22
第11図　土坑２・池状遺構１（S＝１／20・１／60）…… 23
第12図　池状遺構２（S＝１／80）…… 24
第13図　池状遺構３（S＝１／60・１／80）…… 25
第14図　池状遺構４（S＝１／80）…… 26
第15図　池状遺構５・溝遺構（S＝１／60）…… 27・28
第16図　上水道関係遺構配置図（S＝１／500）…… 29
第17図　上水道関係遺構図１（S＝１／40）…… 30
第18図　上水道関係遺構図２（S＝１／75・１／150）…… 31
第19図　近世陶磁器（遺構１・６・26）実測図（S＝１／３・１／４）…… 33
第20図　近世陶磁器（遺構28－１）実測図（S＝１／３）…… 34
第21図　近世陶磁器（遺構28－２）実測図（S＝１／３）…… 35
第22図　近世陶磁器（遺構28－３）実測図（S＝１／４）…… 36
第23図　近世陶磁器（遺構29－１）実測図（S＝１／３）…… 37
第24図　近世陶磁器（遺構29－２）実測図（S＝１／３）…… 38
第25図　近世陶磁器（遺構29－３）実測図（S＝１／４）…… 39
第26図　近世陶磁器（遺構30・32・34・37・40・44・59・62－１）実測図（S＝１／３）…… 40
第27図　近世陶磁器（遺構62－２・63・65）実測図（S＝１／３・１／４）…… 41
第28図　近世陶磁器（遺構70・72・73－１）実測図（S＝１／３・１／４）…… 42
第29図　近世陶磁器（遺構73－２・76・82－１）実測図（S＝１／３）…… 43
第30図　近世陶磁器（遺構82－２）実測図（S＝１／３）…… 44
第31図　近世陶磁器（遺構82－３・83・86－１）実測図（S＝１／３・１／４）…… 45
第32図　近世陶磁器（遺構86－２・88）実測図（S＝１／３）…… 46
第33図　近世陶磁器（遺構89・91）実測図（S＝１／３・１／４）…… 47
第34図　近世陶磁器（遺構92・93・94・95－１）実測図（S＝１／３・１／４）…… 48
第35図　近世陶磁器（遺構95－２・96－１）実測図（S＝１／３・１／４）…… 49

第36図　近世陶磁器（遺構96－２・99・100・102・109）実測図（S＝１／３・１／４）…… 50
第37図　近世陶磁器（遺構110・112－１）実測図（S＝１／３・１／４）…… 51
第38図　近世陶磁器（遺構112－２）実測図（S＝１／３）…… 52
第39図　近世陶磁器（遺構112－３・116－１）実測図（S＝１／３・１／４）…… 53
第40図　近世陶磁器（遺構116－２・117・118・122）実測図（S＝１／３・１／４）…… 54
第41図　近世陶磁器（遺構127・129・133・138・145・154－１）実測図（S＝１／３・１／４）…… 55
第42図　近世陶磁器（遺構154－２・156・157・179－１）実測図（S＝１／３・１／４）…… 56
第43図　近世陶磁器（遺構179－２・182・186）実測図（S＝１／３・１／４）…… 57
第44図　近世陶磁器（遺構187・200・201）実測図（S＝１／３・１／４）…… 58
第45図　近世陶磁器（遺構225・227・230）実測図（S＝１／３・１／４）…… 59
第46図　近世陶磁器（遺構232－１）実測図（S＝１／３・１／４・１／８）…… 60
第47図　近世陶磁器（遺構232－２・233・234・242・302）実測図（S＝１／３・１／４）…… 61
第48図　近世漆器実測図１（S＝１／３）…… 68
第49図　近世漆器実測図２（S＝１／３）…… 69
第50図　近世漆器実測図３（S＝１／３）…… 70
第51図　近世木製品（箸）実測図１（S＝１／３）…… 72
第52図　近世木製品（箸）実測図２（S＝１／３）…… 73
第53図　近世木製品（食事具・木簡）実測図３（S＝１／３）…… 75
第54図　近世木製品（木簡）実測図４（S＝１／３）…… 76
第55図　近世木製品（木簡）実測図５（S＝１／３）…… 77
第56図　近世木製品（容器類）実測図６（S＝１／４）…… 80
第57図　近世木製品（容器類）実測図７（S＝１／４）…… 81
第58図　近世木製品（容器類）実測図８（S＝１／４）…… 82
第59図　近世木製品（容器類・鍬など）実測図９（S＝１／４）…… 83
第60図　近世木製品（人形・櫛など）実測図10（S＝１／３）…… 84
第61図　近世木製品（下駄）実測図11（S＝１／６）…… 85
第62図　近世木製品（下駄）実測図12（S＝１／６）…… 86
第63図　近世木製品（下駄）実測図13（S＝１／６）…… 87
第64図　近世木製品（水道継手）実測図14（S＝１／６）…… 88
第65図　近世木製品（水道継手・柱）実測図15（S＝１／10・１／６）…… 89
第66図　近世木製品（加工木）実測図16（S＝１／３）…… 90
第67図　近世金属製品（銭貨）拓本図１（S＝１／２）…… 93
第68図　近世金属製品実測図２（S＝１／２・１／３）…… 94
第69図　近世金属製品実測図３（S＝１／３）…… 95
第70図　近世石製品（その他の石材）実測図１（S＝１／３）…… 97
第71図　近世石製品（笏谷石瓦）実測図２（S＝１／６）…… 98
第72図　近世石製品（笏谷石瓦）実測図３（S＝１／６）…… 99
第73図　近世石製品（笏谷石）実測図４（S＝１／３・１／６）…… 100

第74図　近世石製品（笏谷石）実測図５（Ｓ＝１／３）…… 101
第75図　中世北庄城期遺構配置図（Ｓ＝１／200・１／50）…… 105・106
第76図　溝遺構540石積部分（Ｓ＝１／60）…… 107
第77図　道路・建物（Ｓ＝１／50・１／100・１／120）…… 108
第78図　土坑（Ｓ＝１／50）…… 109
第79図　中世陶磁器（遺構540－１）実測図１（Ｓ＝１／３・１／４）…… 111
第80図　中世陶磁器（遺構540－２）実測図２（Ｓ＝１／４）…… 112
第81図　中世陶磁器（遺構その他）実測図３（Ｓ＝１／３・１／４）…… 113
第82図　中世漆器実測図（Ｓ＝１／３）…… 116
第83図　中世木製品実測図（Ｓ＝１／３・１／４）…… 117
第84図　中世金属製品実測・拓本図（Ｓ＝１／２・１／３）…… 118
第85図　中世石製品実測図（Ｓ＝１／３・１／４）…… 119
第86図　古代・中世・近世別調査区周辺図（Ｓ＝１／2,000・Ｓ＝１／20,000）…… 121
第87図　福井城跡出土木製品の樹種（1）…… 125
第88図　福井城跡出土木製品の樹種（2）…… 126

表　目　次

頁
第１表　周辺の遺跡一覧表 …… 4
第２表　近世遺構一覧１ …… 12
第３表　近世遺構一覧２ …… 13
第４表　近世遺構一覧３ …… 14
第５表　近世遺構一覧４ …… 15
第６表　近世遺構一覧５ …… 16
第７表　近世陶磁器観察表１ …… 62
第８表　近世陶磁器観察表２ …… 63
第９表　近世陶磁器観察表３ …… 64
第10表　近世陶磁器観察表４ …… 65
第11表　近世陶磁器観察表５ …… 66
第12表　漆器上塗り一覧表 …… 70
第13表　近世漆器観察表 …… 71
第14表　木簡観察表 …… 74
第15表　下駄分類表 …… 78
第16表　下駄観察表 …… 79
第17表　近世木製品観察表 …… 91

第18表　近世銭貨観察表 …… 93
第19表　近世金属製品観察表 …… 95
第20表　近世石製品観察表 …… 96
第21表　中世遺構一覧…… 104
第22表　中世陶磁器観察表…… 114
第23表　中世漆器観察表…… 115
第24表　中世木製品観察表…… 115
第25表　中世金属製品観察表…… 118
第26表　中世石製品観察表…… 119
第27表　福井城跡出土木製品の樹種…… 124

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

調査地区は、越前福井藩主松平氏17代の居城であった福井城の、北三の丸門の北側にあたり、歴代藩主の別邸である「御泉水屋敷」に近接している。また、複数残っている「福井城下絵図」では、代々武家屋敷地であった事がわかる。近代になり、知事公舎などが建てられ現在に至っていたが、それらが移転新築され、代わりに福井県国際交流会館が建てられる事となった。戦災・震災後の復旧活動により大きく破壊されている事も考えられたが、市街地における武家屋敷の広範囲の発掘調査に期待が持たれた。

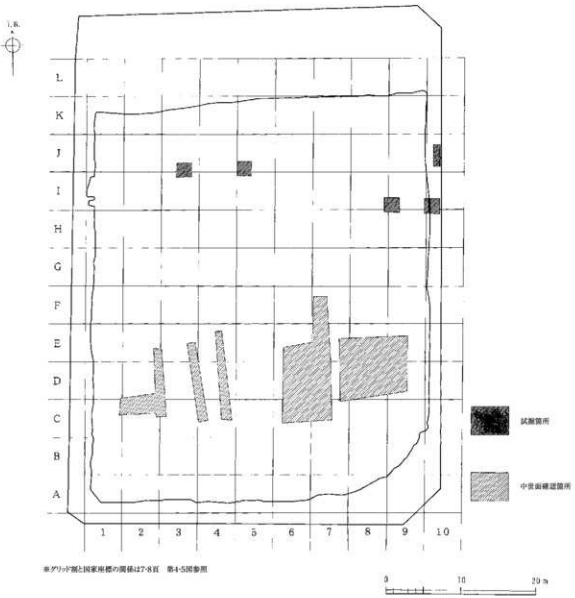
試掘調査は、平成５年７月26日～28日、30日の４日間行い19㎡を調査した。既存の建物（副知事公舎・秘書課長公舎）があるために、非常に狭い範囲に限られ、しかも知事公舎の敷地では試掘調査も行えず、遺跡の全体像を掴むことができなかった。この事が後の本調査にも大きく影響を及ぼすこととなった。検出した遺構は、溜枡状の遺構のみであり遺物は、灯明皿などの18世紀代の遺物が出土した。この結果を受け、国際交流課と協議し調査時期と期間を決定した。この後、平成６年５月から６月にかけて既存建物の撤去に伴い、立会調査を行った。この結果、遺構は検出されなかったが、遺物として18世紀代の陶磁器だけではなく、16世紀から17世紀代のものも出土し、遺構面が２面ある可能性が出てきた。しかし、本調査は目前に迫っておりそのまま本調査となった。

第２節　調査の経過

調査は、北西側より包含層の掘削、遺構掘削を行った。しかし、包含層が思いのほか厚く、遺構精査するまでに時間を要してしまった。これと併行して既存建物の撤去に伴い行った、立会調査時に予想された下層遺構を確認するためのトレンチを入れ、北東側で下層が確認された。

北東側柱穴群の下層調査と併行して、19世紀代の大きなゴミ穴が少なく、下層遺構の残りが良いと考えられる調査区南側を重機により30㎝掘削し、遺構の精査・掘削を行った。この面の調査の過程で中央部に中世末の南北に走る溝とこれに直行する砂利敷の道路を確認し調査を行う。この溝は排土置場と調査期間の問題から、調査区中央部までしか調査できなかった。さらに、この溝の調査の課程で直行する溝が確認され、溝の東西に、さらに下層調査のためのトレンチを入れ、検出された南東側の遺構を中心に調査を行った。以下、調査の概要を略述する。

６月３日～	重機による表土剥ぎ
７日	包含層の掘削・遺構精査開始
９日	調査区南西側で導水管を確認
16日	測量杭の設定
29日	包含層の掘削終了、西側より遺構の掘削を開始
７月18日	遺構のセクション図実測開始
８月５日	写真測量
８月８日	調査区南側を重機により30cm 程掘削
16日～	調査区北東側の柱穴群の調査
18日～	中央部の大溝掘削
30日	写真測量
31日	調査区南東側を中心に重機により掘削し遺構精査
９月５日	下層遺構の写真撮影・実測
６日	器材の撤収、現場作業終了



第１図　調査区グリッド・試掘位置図（Ｓ＝１/500）

第２章　遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

第１節　地理的・歴史的環境

福井県は、日本海側の本州中央部に位置する。敦賀市東部の木ノ芽山地を境に嶺北地域と嶺南地域に区分している。嶺北地域の山地は、西側に丹生山地、東側に加越山地・越美山地・越前中央山地がある。嶺北の西側には、これらの山地に囲まれた平野が存在する。この平野は福井平野と呼称されるが、九頭竜川以北を坂井平野と別称する場合もある。ここでは、坂井平野を分けた狭義の福井平野を用いる。

福井平野は、九頭竜川・日野川・足羽川の沖積により形成された。福井平野を横断する足羽川は、福井平野の西側で山地沿いを北へ流れる日野川と合流し、北西部で西に流れる九頭竜川と合流する。この後、九頭竜川は北へ流れを変え、三国から日本海に流れる。嶺北地方の主要河川は総て九頭竜川に合流することで１つの河川路となることから、重要な水上交通路として機能していたのであろう。

福井市街地付近までは縄文時代前期の海進により入江であったため、当該期の遺跡は福井平野の周縁部に展開する。後期以降は、徐々に平野部河川の自然堤防上や扇状地に進出したようである。この時期に、平野部に立地する遺跡として、曽万布遺跡・上莇生田遺跡・高柳遺跡・糞置遺跡・開発遺跡・新保遺跡・林藤島遺跡・今市遺跡・下莇生田遺跡がある。

弥生時代中期には、自然堤防上に多くの遺跡が立地する。集落遺跡では木田遺跡・荒木遺跡・今市岩畑遺跡がある。また、糞置遺跡の土坑墓群や上莇生田遺跡・中角遺跡・上河北遺跡の墳丘墓群がある。上莇生田遺跡・中角遺跡・荒木遺跡は後期にも継続する。林藤島遺跡では住居址が検出されている。

古墳時代にはさらに遺跡数が増加する。住居址が検出された遺跡は、寮横枕遺跡・曽万布遺跡・林藤島遺跡・東郷遺跡・和田防町遺跡である。小稲津遺跡・今市遺跡・中角遺跡からは平野に位置する古墳が検出されている。

奈良・平安時代は、文献史学から東大寺領荘園として開発されたことがわかる。調査された荘園遺跡として道守荘がある。和田防町遺跡・上莇生田遺跡では、方形掘方の大型建物址が検出されている。上莇生田遺跡は、東大寺領栗川庄の推定範囲内であるため、荘園関連施設の可能性もある。集落遺跡として、今市岩畑遺跡・河増遺跡がある。平安中期の遺跡として、中角遺跡・糞置遺跡・下六条遺跡・和田防町遺跡・和田神明遺跡がある。

鎌倉・室町時代、集落の様相がわかる遺跡には、中角遺跡・林藤島遺跡・曽万布遺跡がある。福井平野の南に位置する南越盆地の間には、城山と文殊山が位置するため地峡部となる。これらの山には、北陸道に近接することもあり、多くの山城が展開する。西側、城山には江守城・南居城・冬野城、東側文殊山には、文殊山城・北茶臼山城・南茶臼山城・南山城・牛若城である。

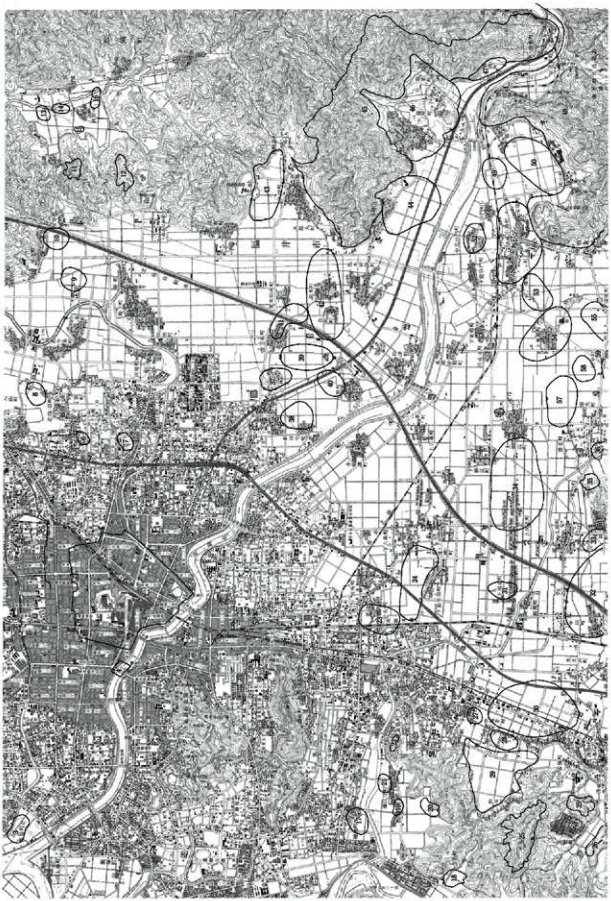
福井城は、福井平野の中央に位置し、北陸道と足羽川の交点北東側に築造された。福井城跡で近世遺跡として指定されているのは城郭内のみのため、町屋等城下の総てが調査対象とはならず都市としての考古学的調査の機会がない。又、現市街城では遺跡範囲確認が困難なため中世以前遺跡の様相が全く掴めていない。安土桃山時代の北庄城や戦国期北庄の町場・館等遺跡の重複が想像される。現状、福井市街城の遺跡は不明な点が多いが、今後の福井城跡調査を契機にその様相が判明してくるだろう。

第１表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代	調査歴
1	福井城跡	城跡	中世～近世	
2	養浩館（旧御泉水屋敷）庭園	庭園	近世	1990･91年市教委
3	菅谷西野遺跡	散布地	古墳～中世	
4	九十九橋遺跡	城跡	近世	1984年県教委
5	福井城加賀口御門	城跡	近世	
6	円山遺跡	散布地	弥生～中世	
7	南四ツ屋遺跡	散布地	古墳～中世	
8	北四ツ屋遺跡	散布地	古墳～中世	
9	東今泉遺跡	散布地	中世	
10	坂下遺跡	散布地	弥生・奈良～中世	1972年県教委
11	戸倉城跡	城跡	中世	
12	寮城跡	城跡	中世	
13	中々田遺跡	散布地	古墳・中世	
14	杉ノ木遺跡	散布地	古墳・中世	
15	西野中谷口遺跡	散布地	奈良～中世	
16	猪谷田畑遺跡	散布地	縄文・奈良～近世	
17	樣池遺跡	散布地	奈良～中世	
18	合谷遺跡	散布地	奈良～中世	
19	南江守田嶋遺跡	集落跡	中世	
20	南江守若宮遺跡	散布地	奈良～中世	
21	南江守六ヶ元遺跡	散布地	弥生～平安・中世	
22	江守城跡	城跡	中世	
23	下筋生田杉縄手遺跡	散布地	古墳～中世	
24	下筋生田遺跡	集落跡	弥生～中世	1981年県埋文（畑田・筆付・高畔）、1981年県埋文（畑田）
25	南居城跡	城跡	中世	
26	冬野城跡	城跡	中世	
27	中荒井堤下遺跡	散布地	奈良～中世	
28	中荒井高畑遺跡	散布地	弥生・奈良～中世	
29	杉谷遺跡	散布地	縄文～中世	
30	今市遺跡	集落跡	弥生～中世	1993年県埋文（今市岩畑）、1994･95年市教委
31	下河北遺跡	散布地	奈良・平安・中世	
32	貴寶遺跡	集落跡	縄文・弥生	1973･74年県教委
33	帆谷遺跡	散布地	奈良～中世	
34	上河北江原町遺跡	散布地	弥生～中世	
35	牛若城跡	城跡	中世	
36	北山入道町遺跡	散布地	奈良～中世	
37	和田神明遺跡	集落跡	古墳～平安・中世	1980年県埋文、1996年市教委
38	和田中遺跡	集落跡	古墳～平安・中世	1980年県埋文
39	和田防町遺跡	集落跡	弥生～近世	1981･84･85年県埋文
40	視野遺跡	散布地	古墳～中世	
41	宮万布遺跡	集落跡	縄文～古墳・中世	1973･74年県教委
42	荒木遺跡	集落跡	弥生・古墳	1995年市教委
43	大畑遺跡	散布地	奈良～中世	
44	成願寺遺跡	散布地	奈良～中世	
45	酒生古墳群	古墳・城跡	古墳・中世	1976～79･86･87･92年市教委
46	篠尾遺跡	散布地	縄文～中世	
47	釣波遺跡	散布地	中世	
48	一乗谷朝倉氏遺跡	城館跡	中世	1968年～県教委
49	上毘沙門遺跡	散布地	奈良～中世	1992年市教委
50	南山遺跡	散布地	奈良～中世	
51	東郷遺跡	集落跡	弥生～中世	1996年市教委
52	中毘沙門遺跡	散布地	中世	
53	板泉御所垣内遺跡	散布地	弥生・奈良～中世	
54	上東郷遺跡	散布地	古墳～中世	
55	深見遺跡	散布地	弥生・平安・中世	
56	上細江遺跡	散布地	弥生～平安・中世	
57	徳光遺跡	散布地	弥生・平安・中世	
58	田中遺跡	散布地	弥生・平安・中世	
59	田治嶋遺跡	散布地	弥生・古墳・中世	

参考文献

福井県教育委員会　1975年『北陸自動車道関係遺跡調査報告　第6集』
福井県教育委員会　1976年『福井県埋蔵文化財調査報告　第1集』
福井県　1986年『福井県史』資料編13　考古
福井県教育委員会　1987年『福井県の中・近世城館跡』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1987年『昭和62年度　発掘調査報告会資料』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1987年『六条・和田地区遺跡群』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1988年『埋文センター　年報－2－　昭和61年度』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1989年『埋文センター　年報－3－　昭和62年度』
福井市　1990年『福井市史』資料編1　考古
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1991年『平成2年度　発掘調査報告会』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1991年『埋文センター　年報－5－　平成元年度』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1993年『埋文センター　年報－7－　平成3年度』
福井県陶芸館　1993年『九十九橋遺跡調査報告』『福井県陶芸館調査報告　第3集』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1994年『第9回　発掘調査報告会資料』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1994年『埋文センター　年報－8－　平成4年度』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1995年『埋文センター　年報－9－　平成5年度』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館　1996年『特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡環境整備報告　Ⅲ』



第２図　周辺の遺跡分布図（S＝1/50,000）

第２節　画期の設定

今回の調査では周知の遺跡としての福井城跡（江戸時代・17～19世紀）のみならず、室町～安土桃山時代（15～16世紀後半）・鎌倉時代（13世紀）・古墳～平安時代（～9世紀）等様々な時代の複合遺跡であることがわかった。そのための画期の設定について記しておく。

福井城期；　関ヶ原の戦い後、結城秀康が越前68万石に封ぜられ、築城を開始した1601年から廃藩置県頃までを画期とする。一般的な歴史区分に照らせば桃山時代後期から江戸時代いっぱいと言うことになろう。出土遺物でいえば、福井城の創建期は、美濃焼の志野、少し遅れて織部、あるいは肥前陶器（唐津）が出現する時期に当たる。したがってこれらの遺物の有無を福井城期と前時期を区分する指標とする。なお、町および城の名称について、江戸時代初め頃は前代に引き続き「北庄（城）」と呼ばれていたが、17世紀中頃「福居→福井（城）」と改名されたようである。しかし織豊期との区分を明確にするため、越前松平家（結城家）が治めるこの期間を「福井城期」と通称する。

北庄城期；　柴田勝家が北国攻略の拠点として築城を開始した1575年から1601年結城秀康の福井城（北庄城）築城までを画期とする。一般的な歴史区分に照らせば室町時代末期から桃山時代前期、いわゆる織豊期にあたる。「北庄城」といえば「＝柴田勝家」と一般的には考えられがちだが、実際には柴田勝家の北庄城は1583年、羽柴秀吉に攻められ落城して以後、豊臣系の武将が数年単位で交代してゆく。しかし柴田氏北庄城が落城したと言っても、一乗谷と違い「都市」としての「北庄」が滅亡したり、重要度が下がったわけではない。むしろ北国街道上に位置する北庄は、越前における交通・経済の中心、北からの攻撃に対する防衛線としてその価値は高く、全国統一政権＝豊臣政権の北陸経営の要衝として特別視されたと思われる。したがって柴田氏北庄城落城後直ちに再興・改築がなされたと考えられる。今後の調査の進展次第で柴田氏北庄城と豊臣期北庄城の遺構が検出され、1583年を境としたより詳細な時期設定も可能と思われる。しかし、現在のところ調査例が少なく考古学的に区分が不可能なため柴田期・豊臣期合わせて「北庄城期」としておく。

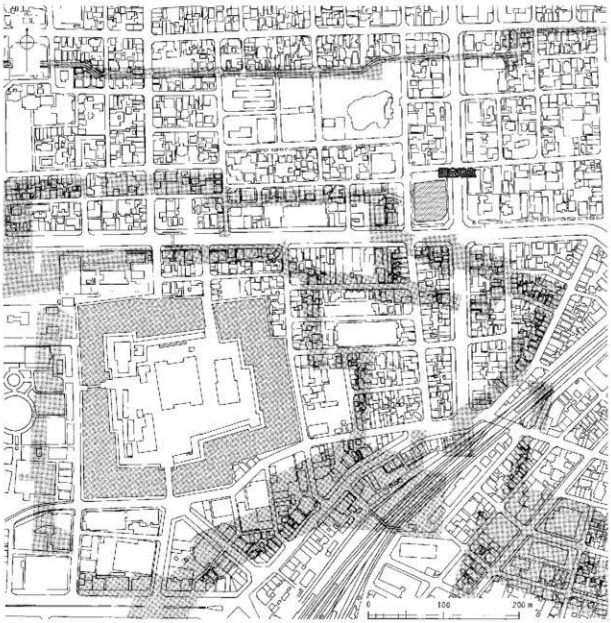
（朝倉）北庄期；　15世紀以来越前を治める朝倉氏が、15世紀後半一族の朝倉土佐守（北庄氏）に館を置かせ統治に努めた。1573年朝倉氏滅亡後一向衆が支配したが、1575年織田軍柴田勝家が一向宗を駆逐し、北庄城建設を始めた。朝倉一族が統治した15世紀後半から北庄城築城（1575年）までの「町場」としての時期を画期とするが、考古学的確認は今後の調査を待ちたい。一般的な歴史区分に照らせ室町時代後期（戦国時代）にあたる。

足羽御厨設置頃から「北庄」の名があらわれる南北朝期頃、交通の要衝・神明神社の門前として発展した中世前半（平安後期から鎌倉・室町時代頃）やそれ以前の古代律令制時代、さらに古墳・弥生・縄文時代等遺跡範囲や画期を細分できるはずだが、福井市街地はこれまで充分な調査がなされておらず、これらの時期の遺跡の拡がりは全くわかっていないのが現状である。ただし今回の調査でも断片的に各時代の遺跡の存在が確認されている。今後市街地全体での調査が進めば個別集落等別遺跡として認識され、現代へと至る都市の歴史の復元の中で画期が設定されていくだろう。

第３章　近世（福井城期）の遺構と遺物

第１節　福井城期の遺構

福井城期の平面的空間情報は、数多く残る「福井城下絵図」(以下絵図）により大凡のことは知る事ができる。「絵図」によると、今回の調査地は、全期を通じ 200 石クラスの武家屋敷地であり、時期により居住者は変化するが、４軒の屋敷地割は福井城期を通じて殆ど変化がない。遺構の依存状況は良好といえなかった。福井城期から現在まで何度も平面的に削平を受け、明確な「生活面」を把握できなかった。従って深く掘削された柱穴・土坑等は確認できたが、建物の礎石等については不明である。また、各時期毎に生活面が上へ上へと積み上がる状態ではないため、ほぼ１つの確認面で様々な時期の遺構が同時に確認された。主な遺構は、街区に関わる遺構として屋敷境溝がある。屋敷施設関係として建物ま



第３図　調査区位置図　（S＝1/5,000）

たは塀等の柱穴、ゴミ廃棄土坑（ゴミ穴）、上水道施設、石組み施設、池状遺構等がある。

なお、絵図による調査地点の屋敷地割から屋敷Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄと仮称する。（第４・５図参照）

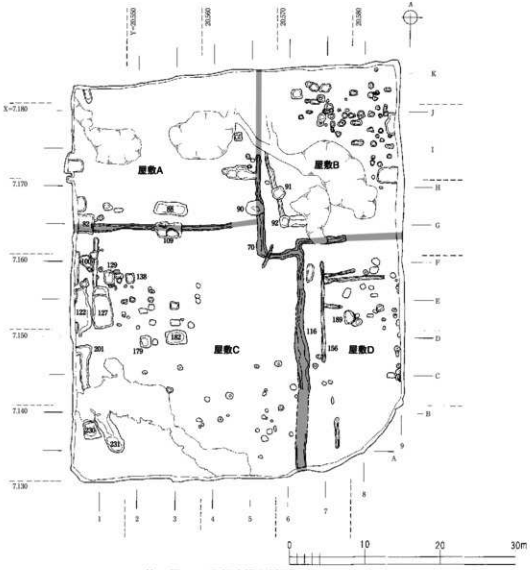
17 世紀の遺構

遺構の時期は、主に切り合いや出土遺物から大きく２時期に分けられる。

[17 世紀初～前期]　唐津や最初期の伊万里等肥前陶磁器、志野や織部等美濃焼、越前焼等を指標とする。遺構は、Ｃ屋敷地と考えられる調査区北東部に集中する。又、調査区外、北端のトレンチでは 17 世紀初期の遺構面が確認され、このトレンチの遺物と本調査時の遺物が接合した。

主な遺構は、遺構面から 0.6m 下げた底に板状の笏谷石を敷き、柱を立てた掘立礎石柱穴といえる柱穴群である。他にはこの時期と確定できる遺構は確認されなかった。

[17 世紀後半]　伊万里や呉器手碗等肥前陶磁器、越前焼等を指標とする。遺構は調査区西半、Ｂ屋敷地に集中する。主な遺構は、ピット、小溝等の他、陶磁器・木製品等をまとめて投棄されたゴミ廃棄土坑である。同じゴミ群を遺構 82 と 230 に分割した例もあり廃棄状態を考える上で興味深い。遺物群は質・



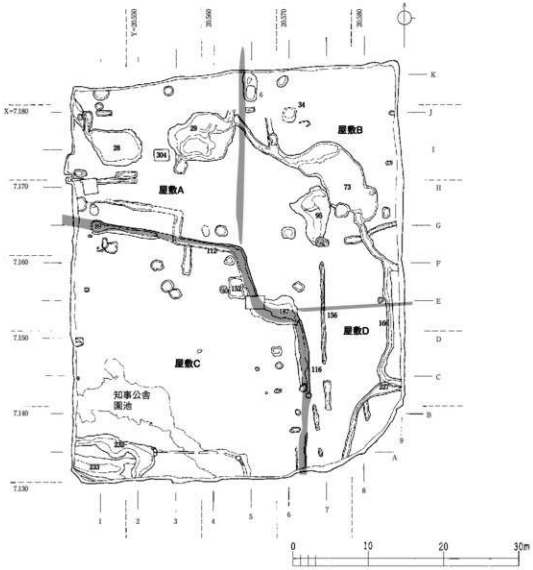
第４図　17 世紀遺構配置図　（S＝1/500）

量とともに資料性も高いが、絶対年代の決める根拠はなかった。

18 ～ 19 世紀の遺構

[18 世紀]　先述の調査区西半部の 17 世紀後半層を覆う盛土層から、この時期に相当する多量の遺物が検出されたが、遺構面が確認できなかった。調査区南西端の石組溝（233, 234）は時期差はあるが、概ねこの時期に廃棄・埋め立てられたものと考えられる。

[18 世紀末～ 19 世紀（幕末～明治）]　この時期の遺構は、上水道施設・曲水池・大型土坑・屋敷地の区画と考えられる溝等である。このうち上水道施設の遺構は、パイプとなる竹管（一部木樋）、これをつなぐジョイント（まくら）、そして水を汲む井筒が主な構成要素である。今回出土した上水道施設は総て同一時期とは考え難く、一部明治期に降るものもあるとおもわれる。18 世紀の遺構面が残らない理由として幕末～明治頃に全面、若しくは部分的に掘削・土取りをおこない、再び土器等廃棄物を大量に含んだ土砂で埋め戻したためと考えられる。また、この層出土遺物は屋敷境とは無関係に複数接合するため、埋め立て土砂を他所から搬入する等かなり大規模な造成のようすが伺われる。



第５図　19 世紀遺構配置図　（S ＝ 1 /500）

１）屋敷境溝

絵図にみられる屋敷地割を証明する状態で確認された。溝 116 は屋敷Ｂ・Ｃ・Ｄを区分する溝である。約 30 m北へ進み、東へ直角に曲がり約６mの部分で終わる。上部は後世の削平を受けたとも考えられるが、非常に浅い。溝 112 は遺構 187 に切られ、116 との接続部の様子はわからなかった。遺物から 19 世紀に埋められたと考えられる。屋敷Ｃに少し入り込み、溝 70・89 に比べ屋敷Ｃの面積が狭くなっている。溝 81・110 は溝 112 に直交して北へ延び、さらに溝 112 に平行して西へ延びる。絵図には溝 81・110 のような区画溝は認められないが、埋土内出土遺物の時期は 19 世紀代で溝 112 とほぼ同じであるため直接関わると思われる。溝 70 は屋敷ＡとＢを区分する。埋土内遺物は 17 世紀中期が中心である。溝 116 に直交し、約６m西方向へ進んだ後、北へ約 13 m進み、行き止まりとなる。溝 89 は屋敷ＡとＣを区分する。溝 70 に対しほぼ直角に西へ延びるが、溝 70 との取り付き部分は確認されず、約４m間が開く。西半は遺構 109・110・等に切られる。埋土遺物は 17 世紀中期である。溝 72 は溝 70 とほぼ並行する。埋土内出土遺物の時期もほぼ同じであるため溝 70 と対になる可能性もある。

２）柱列（建物）　小型の穴で特に礎石・柱根の残ったものについて取り上げる。

①掘立礎石柱穴（10、15、17、45、50、52、53、54、74）　柱穴底に上部の平らな自然あるいは板状にノミ調整・加工した笏谷石を据える。板石は礎石としての利用の他、柱の傾きを調整するため挟み込んだと考えられるもの（15）もある。柱根の残るものが多い。

②掘立柱穴（13、24、36、44、47、170、178）　礎石はなく、柱根のみ残るものである。柱根は、丸･角･面取りされたものに分けられる。また、直径（一辺）20 ㎝前後と 14 ㎝前後のものに分けられる。さらに詳細にみると、牽引索を通したと考えられる穴が穿たれたもの（15）、貫穴を穿たれたもの（36、50）がある。貫穴は沈下防止用の横木を挿したものか。

３）土坑

①ゴミ穴　主として調査区西側に集中する。遺構 82 は方形で直に近い壁を持つ。調査区外に延びるため実際の大きさは不明である。埋土中に炭を多く含むが、被熱した遺物はなかった。出土遺物は完形に近いものが多く、また優品が多い。なお、82 出土遺物の多くが遺構 230 と接合することから、同じゴミ群を分割して廃棄･埋め立てたと一連の遺構と考えられる。遺構 127 も、方形で直に近い壁を持つ。土層堆積状況は、いずれの層もほぼ水平に重なり、一気に埋め立てた状況ではなく丁寧に整地した様相である。遺構 129 や 179･182 も平面プラン方形だが､127 等に比べ小さい。いずれも荒い土砂や木製品（多くは木っ端）等ゴミで一気に埋め立てた様相を呈する。なお、このような土坑をゴミ穴ではなく火災等の後、家を再建する際壁土を採掘し、その後ゴミで埋め立てたという見方もある。特に 17 世紀後半の遺物で占められることから「寛文の大火」（1669 年）後の再建と結びつけられる向きもある。遺構 99、100 は非常に浅い。これは上部が削られたと考えるが、他方整地土の一部の可能性もある。いずれも 17 世紀後半の遺物を多く含む。

②土師質皿埋納土坑　土坑 133 は長軸 880 ㎜短軸 390 ㎜のほぼ長方形である。土師質皿は土坑の一方に片寄る。土師質皿は、丁寧に重ねて納置された状態で確認された。総ての土師質皿には灯芯油痕がなく、灯明皿以外の使用を想定させるが、使用目的を示す痕跡はなかった。地鎮等祭祀に関連するとも考えられる。土坑 92 は､133 と違い、平面楕円形をで底部も不正形である。土師質皿が完形に近いものが多いが、乱雑な状態で出土したことから投棄されたと考えられる。唐津皿が１点ふくまれる。

遺構 76 は、調査区外に延びるため全容は不明だが、平面方形に約 0.3 m（残存深）掘り下げ、周囲

を笏谷石の板石または割石で1～2段に積む。北西角は破壊されたと考えられる。底面は平らに整形されているが、貼り床等の痕跡は確認されなかった。その形状から水利施設、特に浅い深度から園池とも考えられるが、用途は不明である。

4）池状遺構　大形で不正形な土坑のうち、給・排水用溝を伴ったものについて取り上げる。

遺構28は平面平行四辺形状で、最大6.4×5mを測り、深さは約0.64mである。遺構南側の遺構肩が確定しづらいことは、西面断面図に見るとおり様々な土砂で整地されているでもわかる。遺構北側は直径5cm前後の木杭で護岸される。東・西面には笏谷石が散在するが、本来護岸のため列べられていたと思われる。遺構26に切られるが、北西方向に溝1が延びる。調査区西側の芝原用水と同方向に水は向かうと思われることから遺構28の排水溝と考えられる。なお、調査では明確にはならなかったが、南側には給水溝があり、芝原用水から取水し、再び用水に帰したと思われる。埋土出土遺物から幕末～明治初期には埋め立てられたようである。遺構28はその形状や屋敷内での位置関係から園池とも考えられる。遺構29は平面不正形で、最大8.7×6.2m、深さ0.92mを測る。底より0.4mほど自然堆積した後、埋め立てたようである。遺物による埋没時期差はみられない。西断面をみると切り合うようにみえるが、平面では充分に確認できなかった。遺構北側に小規模な石室状の掘り込みがある。内寸1.1×0.2mで、三方は笏谷石の板石や割石で組む。二段程度石を積むが、東面のみ石はなかった。石積みが崩れないように木杭で石を留める。用途は不明である。北東の溝が排水用と考えられるが、遺構28同様給水溝は明確に確認できなかった。出土遺物から幕末～明治初期には埋め立てられたと考えられる。遺構28と29は並存していたか、一方が埋め立てられて後掘削されたかについて、出土遺物から時期差は大きな感じなかった。遺構73は平面不正形で、最大12.4×5.4m深さ1.2mを測る。今回の調査における最大規模である。溝118から給水し、溝31・32に排水すると考えられる。19世紀中～後期の遺物を含む土砂で埋め立てられる。また、給排水路が屋敷地区画とは無関係に跨ぐことから明治時代以降の可能性もある。

遺構232は石積みで護岸された曲水状の池・流路である。石積みの状況から数回にわたり改修されたことがわかる。遺構232が造られた当初（1期）は、おそらく調査地南面を流れる芝原上水より取水し、暗渠石樋→溜枡桶→暗渠木樋を通じ遺構232に給水される。暗渠給水期の曲水池本体はおよび排水に関しては不明である。次（2期）に暗渠水門を石積みで塞ぎ、芝原上水より石積み開渠溝を通じ、大きく広がった曲水池を経て、石積み開渠溝を通り、芝原上水に排水される。遺構の全体プランは2期に形成されたものに手を加えていったと考えられる。その後曲水の広がった池部分が3期4期と経るに従い東岸から幅を狭められ、4期には曲水のまま水路的な細さになる。石積みについてみてゆくと、2期のC・Dは石の大きさを厳選し、布積み状に丁寧に積む。3（B）・4（A）期と進むに従い積みが粗雑になる。特に4期のAは乱雑に積まれた石の上に丸石瓦を積む。石積Eも暗渠石の転用・細かい石が無造作に積まれ木杭で留める方法は、3・4期、特に石積Aに類似性を見いだす。なお、越前焼大甕を横に寝かせ、池内に開口した状態で石積みに組み込まれている。池の魚の溜まりとしてこのように作られることがある。遺構の構造・屋敷地内での位置関係から遺構232は園池と考えられる。覆土内で遺物はほとんど確認できなかった。僅かに（池底）床面から達磨窯の施釉瓦（赤瓦）が出土している。また石積Eの大甕は19世紀、天保期のものである。以上から遺構232は最初に作られた1期の年代は不明ながら、最終改修の4期は19世紀前～中と考えられる。

第２表　近世遺構一覧１

遺構番号	種　別	地　点	時　期	特色・備考	主な遺物	図番号
1	溝	1～J・K	19C中～近代	遺構28への導水路か。17C遺物混じる。	(伊)碗・鬢碗・くらわんか皿・小皿。瀬戸)染付付碗・灰釉菊形皿。唐)砂目碗・絵唐津皿・段皿・刷毛目皿・朝鮮唐津壺瓦・片口・鳥器手碗。中)釉裏紅小皿。越)壺・甕・擂鉢。土)灯明皿。金)針金編みカゴ・キセル。石)目(熊谷石)。	79'
2	土坑(ゴミ穴)	1～K	17C中		(伊)碗・天目形鐔碗・菊形皿。瀬)織部。唐)碗・彫唐津茶碗。越)皿？。土)灯明皿。瓦)丸瓦。	80'
3	土坑	1・2～K				
4	土坑(ゴミ穴)	1・2～K	19C		(伊)碗・鉢・小皿。瀬)煎じ碗・染付皿。越)擂鉢。土)灯明皿・瓦質火入。	82
5	土坑	1・2～J・K				
6	土坑(ゴミ穴)	5・6～K	19C	17C～18C遺物混じる。	(伊)碗・鬢碗・皿・菊形皿・紅皿・白磁端反小皿・青磁花瓶。瀬)志野釉丸碗・灰釉皿・志野皿・灰釉大盤・緑釉火鉢・緑釉木鉢。唐)刷毛目碗・二彩大盤・呉器手碗。京信)壺・白泥鉄釉土瓶。信)壺？。他)壺・白釉緑釉かけ流し火鉢。中国)染付碗・青磁。越)鉄釉壺・擂鉢・小形擂鉢・鉄釉足付大盤。土)灯明皿・瓦質火入れ・凍炉。石)硯・火入。	48
7	土坑	5・6～J・K	18C後～19C		越)壺・擂鉢。土)灯明皿。	
8	柱穴	7～K				50
9	柱穴	7～K	17C後～18C前		土)灯明皿。	114
10	柱穴	7～K		掘立底に礎石。柱根残存。		78'
11	柱穴	7～K				
12	柱穴	7～K				306
13	柱穴	7・8～K		柱根残存。		98
14	柱穴	7～K				
15	柱穴	8～J・K		掘立底に礎石。柱根残存。		106
16	柱穴	8～K				109
17	柱穴	8～K		掘立底に礎石。柱根残存。		107
18	柱穴	9～K		掘立底に礎石。		
19	柱穴	9～K				
20	柱穴	9～K				
21	柱穴	9～K				
22	柱穴	9～K				
23	柱穴	9～K				
24	柱穴	9～J		柱根残存。		311
25	土坑	9～J・K			須)坏。	300
26	土坑(ゴミ穴)	1～J	19C中～近代		(伊)半球碗・広東碗・陽物皿・皿・花瓶？・合子蓋・陽神酒徳利・天目形鐔碗。瀬)染付碗・天目碗・鬢手碗・急須・白絵鉢植木鉢唐)絵唐津皿・刷毛目碗。越)壺・甕・擂鉢。土)灯明皿・七厘・赤彩火入れ・瓦質火入れ・碁石？。瓦)施釉軒瓦。石)パンドコ蓋？。	81
27	柱穴	9～J	19C中		(伊)碗・皿。瀬)灰釉皿。唐)碗。越)鉢鞴愛。他)鎖？。土)灯明皿。金)蓋・釘。	60
28	池状遺構	1～3～I・J	19C中		(伊)碗・くらわんか碗・広東碗・皿・大皿・金襴手角皿・紅皿。瀬)染付碗・鉢鞴碗・染付皿・灰釉皿・小壺？・染付陶胎小壺・緑釉火鉢。唐)青緑釉皿・砂目皿・絵唐津大皿・擂鉢。京)水滴・鉢？。京信)急須・土鈴。三)青磁碗。他)碗・鉄釉壺・鉄釉擂鉢・朱泥急須蓋。越)壺・鉢・擂鉢。土)灯明皿・おもちゃ碗。金)針金・釘・キセル。石)硯。瓦)平瓦。	47
29	池状遺構	3～5～I・J	19C中		(伊)碗・鬢碗・くらわんか碗・大皿・皿・紅皿・青磁香炉・陽神酒徳利・鬢茶碗口・蓋。瀬)碗・天目碗・染付広東碗・大皿・青磁花瓶・緑釉火鉢(鬢壺)。唐)碗・刷毛目碗・皿・段皿・大皿・二彩壺・灯明台・呉器手碗・京風鉢(墨書)・京風皿。京信)碗・層手碗・皿・蓋・土瓶・土鈴。他)合子蓋。越)鉢鞴壺・小壺・擂鉢。土)灯明皿・人形・火鉢。瓦)平瓦・施釉瓦(丸・平)。金)キセル。	42
30	土坑	5～J	17C後		(伊)碗・皿。唐)段皿。土)灯明皿	36
31	溝	5・6～I・J	18C後	遺構73の排水路か。遺物17C後混じる。	(伊)碗・菊形皿・壺。瀬)碗。唐)砂引碗・アメ釉小皿・刷毛目壺・呉器手碗。京信)色絵丸碗・皿。越)壺・擂鉢。土)灯明皿	35
32	溝	6～I・J	19C	17C後混じる。	(伊)碗・皿。瀬)天目碗。唐)刷毛目鬢碗・鉄釉壺。三)青磁皿。土)灯明	40
33	土坑(ゴミ穴)	6～J	19C		(伊)広東碗・碗・皿。唐)胎土目碗・呉器手碗・砂目皿・皿。京)壺。京信)手付き片口鉢・鉢。他)鉢鞴壺・徳利。越)壺。土)灯明皿・パンドコ蓋	40(底
34	土坑(ゴミ穴)	6・7～J・K	19C～近代		(伊)碗・くらわんか碗・陽碗・皿・八角皿。瀬)碗・骨骨碗・掛分碗・鐘鐘碗・煎じ碗・志野皿・染付急須。唐)刷毛目碗・灯明皿。京)碗。京信)小碗・壺。他)青緑釉急須・貫茶徳利。越)壺・甕？・擂鉢。土)灯明皿・凍炉。石)パンドコ。	49
35	土坑	7～J	19C			304
36	柱穴	7～J	17C初～前	掘立底に礎石。柱根残存。	瀬)灰釉皿。中国)白磁皿。土)灯明皿。須)壺。	108
37	柱穴	7・8～J	17C前	掘立底に礎石。	瀬)鉄釉大皿？。土)灯明皿。	79
38	柱穴	7・8～J		掘立底に礎石。	土)灯明皿。	312
39	柱穴	8～J				
40	柱穴	8～J	17C前		土)灯明皿。	99
41	柱穴	8～J				
42	土坑	8～J				
43	柱穴	8～J				307
44	柱穴	8～J	17C初	柱根残存。	瀬)鉄釉皿。唐)絵唐津皿。土)灯明皿。	100
45	柱穴	8～J		掘立底に礎石。柱根残存。		101
46	柱穴	8～J				102
47	柱穴	8～J		掘立底に礎石。柱根残存。		310
48	柱穴	8～J				
49	柱穴	8～J		掘立底に礎石。	須)坏。	220
50	柱穴	8～J		掘立底に礎石。柱根残存。		119
51	土坑	8～J				83
52	柱穴	9～J		掘立底に礎石。		301
53	柱穴	9～J		掘立底に礎石。柱根残存。		302

第3表　近世遺構一覧2

54	柱穴	9－J		掘立底に礎石。		
55	柱穴	9－J･K				
56	柱穴	9－J				
57	柱穴	9－J				
58	柱穴	9－J				
59	土坑	9－J	17C前～中		伊)碗。唐)碗・大皿。土)灯明皿。	84
60	柱穴	9－I･J				
61	土坑	1－I				
62	土坑(ゴミ穴)	1－I	19C		伊)碗・筒碗・白磁小盃・小鉢・赤絵？・彩物。瀬)染付広東碗・天目碗・灰釉皿？・皿・鉄釉盃・緑釉火鉢・鉄釉鍋。唐)碗・二彩大皿・具器手碗。京信)色絵瓶じ碗。越)麦・徳鉢。土)灯明皿。須)麦。石)硯のミニチュア。	122
63	土坑(ゴミ穴)	2－I	19C前		伊)碗・白磁小碗・広東碗・青磁皿。瀬)染付碗・青磁碗。京信)色絵碗。越)麦・鉢・鍋鉢。土)灯明皿。石)硯。	116
64	溝	1･2－I	19C		伊)碗・外鉄釉壺？。瀬)染付広東碗。唐)碗。他)土瓶。越)麦。土)灯明皿。	121
65	土坑	4－I	19C中		伊)碗・筒碗・皿・色絵鉢・八角鉢。瀬)瑞反碗・拳骨碗・志野皿・灰釉皿・灰釉大鉢・織部向け。唐)刷毛目碗。京)小丸碗・色絵丸碗。他)鉢釉碗・灰釉土鍋・麦・朱泥・浄土土器。越)鍋鉢麦・鉢釉麦・燈鉢。土)灯明皿・施釉塔。金)銭。石)砥石。瓦)施釉瓦。	58
66	土坑	5･6－I	17C前		伊)碗・壺。唐)皿・大皿。倩)麦？越)麦。	41
67	柱穴	5･6－I				
68	柱穴	5･6－I				
69	柱穴	6－I				
70	溝	6･7－G～I	17C後	屋敷境溝	伊)碗・くらわんか碗・青磁大皿。瀬)鉄釉小壺・灰釉皿。唐)鉢釉碗・二彩大皿。越)小壺・壺・燈鉢。中国)盃。土)灯明皿	37
71	柱穴	6－I				105
72	溝	6－H･I	17C後	遺構70溝に併行する。	伊)碗・皿。倩)麦。越)燈鉢。土)灯明皿。金)銭	45
73	池状遺構	6･9－H～J	19C	31･118は導・排水口か。	伊)碗・広東碗・広東碗蓋・くらわんか碗・筒碗・青磁菊形大皿・皿・仏教器・花瓶。瀬)染付碗・煎じ碗・鉢手碗・灰釉碗・天目碗・灰釉皿・皿・鉄釉茶入。唐)碗・鉢釉碗・刷毛目碗・清綺皿・大皿・皮鮨手火入。京信)色絵丸碗・白釉碗・皿・盃　他)赤絵碗・鉄釉手付鍋・灰釉壺・。越)麦・小壺・壺・足付灰釉壺・燈鉢。土)人形・灯明皿。高杯。金)簪	39･70
74	柱穴	9－I		柱根残存。		303
75	柱穴	9－I				
76	池？	9－I	18C前	周囲に1段積み護岸をおこなう。	伊)赤絵碗・赤絵皿・皿・香炉？。唐)刷毛目碗・高脚皿・具器手碗。土)灯明皿。	76
77	柱穴	9－I				
78	柱穴	9－I	19C～近代		伊)碗・皿・水滴。京)煎茶急須。京信)落し蓋。土)灯明皿・軟質緑釉蓋	82
79	柱穴	9－I			越)鉢釉壺。	305
80	土坑	1－H				
81	溝	1～3－H	19C	屋敷境溝か。	京信)皿。越)燈鉢。土)灯明皿。	99
82	土坑(ゴミ穴)	1－G･H	17C後	遺物に優品多い。遺構230と接合。墨書灯明皿出土。	伊)色絵碗・碗・菊形皿・猪口。瀬)鉄釉燈鉢。唐)絵唐津・碗・鉢釉徳利。京)仁清瓶。倩)壺。越)燈鉢。土)灯明皿	19
83	土坑	1－H	18C後～19C		伊)碗・くらわんか碗・小丸碗・青磁。瀬)煎じ碗・鉢釉小壺。唐)刷毛目碗・刷毛目皿・具器手碗。越)燈鉢。土)灯明皿	1
84	土坑	1･2－H	17C後		伊)碗・色絵碗。瀬？)壺。唐)鉄釉人形、燈鉢、白釉？越)燈鉢。土)灯明皿。	25
85	土坑	2－H	17C後		伊)碗。唐)砂目皿・大皿？。	26
86	溝	1～3－G･I	19C	屋敷境溝。遺構89を切る112の一部。	伊)碗・丸碗・外青磁筒碗・皿・菊形皿・足付皿・鉄釉皿・色絵彩物水滴。瀬)鉄釉碗・拳骨碗・小壺。唐)刷毛目碗・鉢釉碗・段皿・胎土目皿・鉄釉壺・二彩大皿。京)碗。倩)壺。越)燈鉢・鉄釉壺・壺。他)鉄釉鍋・片口鉢。土)耳付火鉢？灯明皿。	18
87	土坑	2－H		17C後多く混じる。		
88	土坑(ゴミ穴)	3･4－H	17C後～18C前		伊)碗・青磁碗・小盃・碗形鉢・火入。唐)具器手碗・清綺皿。土)灯明皿。	52
89	溝	4･5－G	17C後	屋敷境溝。	伊)碗・大皿。瀬)天目碗。唐)皿？倩)壺。越)鉄釉壺・燈鉢。土)灯明皿。	115
90	土坑	5･6－H	17C前～中		伊)碗？。唐)胎土目皿。越)燈鉢。土)灯明皿。	44
91	土坑	6－H	17C後～18C前		伊)碗・皿・青磁皿・壺・小盃。瀬)天目碗・茶入・灰釉菊形足付皿。唐)二彩壺・具器手碗。倩)壺。京信)盃・土鍋。中国)青磁碗。越)燈鉢・片口鉢。	38
92	土坑	6･7－G･H	17C前	土師皿埋納土坑？施釉土師皿で占める。	唐)清綺皿・絵唐津大皿。越)燈鉢。土)灯明皿。	90
93	土坑(ゴミ穴)	6･7－G	19C		伊)碗・皿・瓶。瀬)志野皿。唐)段皿・大皿？具器手碗？。倩)壺？。他)煮・壺・軟質鉢？。越)壺・小壺・燈鉢。	103
94	溝	7－G･H	17C後		伊)碗。瀬)鉄釉水注。唐)具器手碗。越)壺。土)灯明皿。	111
95	大型土坑	7･8－G･H	19C		伊)碗・外青磁筒碗・皿・壺。瀬)鉢手碗・瑞反碗・志野皿・灰釉大皿・緑釉徳？。唐)刷毛目碗・砂目皿・大皿。京)色絵碗・煎じ碗・皿。他)鉄釉土鍋。越)壺・大壺・燈鉢。土)灯明皿。	75
96	土坑(ゴミ穴)	8－H	18C後	遺構73に切られる。	土)灯明皿	113
97	柱穴	9－H				
98	土坑	9－H	18C後～19C		伊)小盃。瀬)鉄釉？。他)貧乏徳利。土)灯明皿。金)銭(寛永)	77
99	土坑	1－F･G	17C後	非常に浅い。	伊)染付碗・猪口。唐)碗。他)筒碗	4
100	土坑	1－F･G	17C後		伊)碗。瀬)織部皿。唐)具器手碗。土)灯明皿	3
101	柱穴	1－G				
102	溝	1－F･G	17C中		伊)天目形碗。金)キセル	2
103	柱穴	1－G				
104	柱穴	1－G				
105	土坑	1－G	17C？		唐？)口縁碗？。土)灯明皿	14
106	土坑	2－G	18C後～19C			25
107	土坑	2－G	18C後～19C		伊)碗。瀬)灰釉皿。唐)刷毛目碗・皿。越)鉄釉壺・鉢。土)灯明皿。	24
108	柱穴	2－G				
109	土坑(ゴミ穴)	3～G･H	17C後～18C前	屋敷境溝遺構110に切られる。	伊)碗。瀬)煎じ碗・菊形皿。唐)碗・鉢釉碗・胎土目皿・皿・鉄釉壺・具器手碗。越)鉄釉燈鉢。土)灯明皿	34

第４表　近世遺構一覧３

110	溝	4ｰG･H	19C	屋敷境溝。遺構112･81とつながるか？	(伊)碗･筒碗･皿・小盃。瀬)灰釉皿･灰釉鉢形皿･鉄釉壷。唐)大皿･白釉碗。他)碗･盃。越)小要･擂鉢。土)灯明皿。金)キセル。石)砥石。植)くるみ	51
111	土坑	4ｰG				
112	溝	4ｰ～6ｰF･G	19C		(伊)碗･赤絵丸碗･大皿･青磁碗付大鉢。瀬)染付碗･拳骨碗･煎じ碗･皿･鉄釉猪口。唐)鉢釉碗･皿･鉄釉壷･片口･具器手碗。京信)土鉢･鉢皿･鉄絵徳利。越)鉄釉壷･擂鉢。土)灯明皿･凍炉･七厘･入形。瓦)施釉瓦。金)鈴･銭。植)くるみ	33
113	土坑	5ｰF･G	19C		(伊)碗･壺？。瀬)天目碗？･染付半球碗。越)要。土)灯明皿。瓦)施釉瓦	46
114		5ｰG	17C中		唐)砂目皿。	208
115	溝	6ｰ～7ｰG	17C後		唐)砂目皿･碗。土)灯明皿	91
116	溝	7ｰ9ｰA～G	17C前～19C	屋敷境溝。近代の地籍図まで残る溝	(伊)碗･色絵碗･半球碗･瑞反碗･くらわんか碗･筒碗･皿･形物小皿･鉢･瓶素焼口･小盃。瀬)染付碗･天目碗･拳骨碗･鍋手碗･茶入･灰釉蓋。唐)刷毛目碗･段皿･皿･二彩大皿･片口？･具器手碗･京風碗･青釉鉢皿･刷毛目大皿･灰釉大鉢。信)壺。京信)半球碗･行平鍋蓋･急須。越)要･擂鉢･壺･小要･擂鉢。土)灯明皿･高杯足･鉢犬。金)鐘。瓦)丸瓦･赤瓦。	53･69
117	土坑	7･8ｰG	19C	遺構116を切る。	(伊)碗･皿。唐)二彩大皿。京信)色絵半球碗。越)壺？･擂鉢。土)灯明皿	74
118	溝	8･9ｰG･H	19C	遺構73の導水路か。	(伊)碗･筒碗･くらわんか碗･大皿。瀬)灰釉皿。唐)刷毛目。他)擂鉢。越)要･壺･擂鉢。土)灯明皿。瓦)丸瓦。	68
119	土坑	9ｰF･G		屋敷境溝遺構110に切られ	土)灯明皿。	211
120	柱穴	1ｰF				23
121	土坑	1ｰF	17C後		唐)皿。土)灯明皿	22
122	土坑	1ｰE･F	17C後		(伊)外質内白磁･碗･瑞反碗･青磁碗･白磁碗･手塩皿･鉢形皿･皿･赤絵梅麦猪口。瀬)染付皿･御深井釉足付菊皿･擂鉢碗。唐)鉢釉碗･刷毛目碗･二彩壺･朝鮮唐津関鉢･具器手碗。備)徳利。越)鉄釉壷？･擂鉢･足付盤。土)灯明皿。中国)粕裏紅小碗	9
123	土坑	1ｰF				
124	柱穴	1ｰF	18C？		(伊)皿？	13
125	柱穴	1ｰF			備)壺？越)壺？土)灯明皿	16
127	土坑(ゴミ穴)	1･2ｰE･F	17C後		(伊)くらわんか碗･皿。瀬)天目碗。唐)段皿･猪口･絵唐津皿･具器手碗。備)壺。中国)染付皿。越)鉄釉壺･壺･擂鉢。土)灯明皿。	20
128	柱穴	1･2ｰF				
129	土坑	2ｰF	17C後		(伊)碗。瀬)灰釉皿･鉄釉皿。唐)鉢釉碗･灰釉碗･鉄釉皿	5
130	土坑	2ｰF	17C後		唐)皿。土)灯明皿。中国)白磁皿	11
131	柱穴	2ｰF				
132	柱穴	2ｰF				
133	土坑	2ｰF	17C後～18C前	土師皿理納土坑。土師皿を重ねて納置した状態で出土	土)灯明皿	12
134	土坑	2ｰF	17C後		越)擂鉢。土)灯明皿	7
135	土坑	2ｰF				
136	柱穴	2ｰE･F	17C			8
137	柱穴	2ｰF				
138	土坑	2ｰF	17C前		瀬)灰釉皿･鉄釉片。唐)鉢釉徳利。越)擂鉢。土)灯明皿	6
139	柱穴	2ｰF				
140	柱穴	2ｰE･F				
141	土坑	3ｰF･G	19C		(伊)小壺？。唐)二彩壺？。越)擂鉢。土)灯明皿。	59
142	柱穴	3ｰF				
143	柱穴	3ｰF				
144	柱穴	3ｰE･F				27
145	土坑	3ｰF	19C		(伊)碗･筒碗･色絵碗･八角鉢。瀬)拳骨碗･鉢釉火入？･鉄釉蓋。唐)砂目碗･二彩大皿。京風碗。京信)灯明皿。越)要･擂鉢。土)凍炉･入形･灯明皿。	32
146	ゴミ穴	3･4ｰF	19C		(伊)皿。唐)大皿。越)鉄釉壷。土)灯明皿。瓦)施釉平	31
147	ゴミ穴	4ｰF･G	19C		(伊)碗･外青磁筒碗。唐)砂目皿。中国)青磁碗。越)鉄釉壷･擂鉢。土)灯明皿。石)火鉢(旁谷石)	209
148	柱穴	4ｰF				97
149	柱穴	4ｰF				
150	ピット	9ｰF				
151	柱穴	5ｰF	18C			92
152	ゴミ穴	5ｰF			(伊)青磁。土)灯明皿。	33･B
153	土坑	7ｰF	18C後		(伊)碗。瀬)天目碗･腰錆碗。越)壷･擂鉢。土)灯明皿。	86
154	土坑	7ｰF	17C後～18C前		(伊)碗･花形小皿･盃･青磁。唐)二彩大壺･具器手碗。他)長石釉筒碗･大皿。土)灯明皿。瓦質脚付皿火舎。	61
155	土坑	8ｰE				
156	溝	7ｰD～F	18C後		(伊)皿。越)擂鉢。土)灯明皿。	65
157	溝	7･8ｰF	18C前		唐)刷毛目皿。土)灯明皿。	66
158	溝	7～9ｰF	17C後		(伊)筒碗･青磁皿･皿。瀬)鉄釉。唐)砂目皿。越)鉄釉壷･擂鉢。土)灯明皿(農書)。金)波来銭。植)桃種	
159	土坑	8ｰF				
160	柱穴	8ｰF				
161	柱穴	8･9ｰF			土)灯明皿。	63
162	土坑	1･2ｰE･F			土)灯明皿。	64
163	柱穴	1･2ｰE･F			須)壺･坏。金)銭。	212
164	土坑	1･2ｰE･F				
165	柱穴	9ｰE･F	19C		須)高杯･？土)灯明皿。瓦)施釉瓦。	210
166	溝	9ｰC～F	19C		(伊)碗。瀬)鉄釉火鉢。他)土鍋蓋。越)擂鉢。土)灯明皿。	58
167	柱穴	9ｰF			金)波来銭。	215
168	柱穴	9ｰF				
169	柱穴	9ｰF				
170	土坑	1･2ｰE		柱根残存。		313
171	ピット	2ｰE				
172	柱穴	2ｰE				17

第5表　近世遺構一覧4

173	ピット	2－E				
174	ピット	2－E				
175	柱穴	2・3－E				204
176	柱穴	3－E				73
177	柱穴	3－E				72
178	柱穴	3－E		柱根残存。		95
179	土坑(ゴミ穴)	3－D・E	17C後		(伊)碗・菊彫皿・白磁皿・染付壷・青磁大皿。唐)勉釉碗・三島唐津大皿・朝鮮唐津。他)壺。越)甕。土)灯明皿。	28
180	柱穴	3・4－E				71
181	柱穴	3・4－E				30
182	ゴミ穴	3・4－D・E	17C後		(伊)碗・皿・青磁大皿。瀬)志野鉢皿・鉄釉筒碗・茶入？。唐)絵唐津。京風碗(清水印)。越)擂鉢。土)灯明皿。	29
183	ピット	4－E				
184	柱穴	4－E				96
185	柱穴	4－E				
186	柱穴	9－F			唐)砂目皿。	206
187	大型土坑	6・7－E・F	19C～近代		(伊)半球碗・赤絵筒碗・陶胎碗・角皿・紅皿・大皿・皿・壺・青磁香炉？。瀬)煎じ碗・皿・染付徳利？他)行平鍋・手付き卸皿。唐)皿。信)壺。越)壺・甕？・擂鉢。土)灯明皿・七厘。生)動物の歯・くるみ(穴開き)	89
188	溝	7・8－E				
189	土坑	8－E	17C		(伊)碗・青磁。唐)大皿。越)擂鉢。土)灯明皿。	67
190	柱穴	8－E				
191	柱穴	9－E	9C		須)壷。	214
192	柱穴	9－E				100
193	土坑	9－E			土)灯明皿。	213
194	柱穴	9－E				
195	柱穴	9－E				
196	柱穴	9－E			土)灯明皿。	223
197	柱穴	9－E				220
198	柱穴	9－E				
199	柱穴	9－D・E			土)灯明皿。須)坏。	222
200	土坑	1－D・E	19C		(伊)くらわんか碗。瀬)染付皿・緑釉火鉢・灰釉大皿。唐)二彩。信)壷。土)灯明皿(穿孔)・人形。	21
201	溝	1－C・D	17C後		(伊)碗・御神酒徳利・白磁小皿。唐)青緑釉鉢・呉器手碗。京)色絵。土)灯明皿・土錘	10
202	柱穴	3－D				
203	柱穴	3－D				
204	柱穴	4－D				
205	井戸	4－D	19C～近代		土)灯明皿。瓦)施釉瓦。他)近代染付	216
206	土坑	6－D	19C		(伊)碗・筒碗。瀬)勉釉碗？。越)勉釉壷・鉄釉壷・大甕。土)灯明皿。	118
207	ピット	7－D				
208	ピット	7－D				
209	柱穴	9－D				
210	柱穴	9－D				
211	柱穴	9－C・D				
212	柱穴	9－C				
213	柱穴	9－D				
214	ピット	1－C			土)灯明皿	15
215	柱穴	3－C	9C			203
216	柱穴	4－C				218
217	柱穴	5－C			土)灯明皿。	201
218	柱穴	6－C	19C		唐)呉器手碗	202
219	柱穴	6－B・C				
220	柱穴	6－C			土)灯明皿。	217
221	柱穴	7－C			唐)碗。	87
222	柱穴	7－C				
223	柱穴	7－C	19C		他)鉄釉土鍋。	224
224	柱穴	8－K	17C後～18C前		(伊)瑞反小皿。唐)呉器手碗。越)擂鉢。土)灯明皿	110
225	溝	7・8－C	17C後～18C		(伊)碗・白磁皿・彫物皿。皿。瀬)鉄釉皿？京)色絵半球碗。越)甕。土)灯明皿。	57
226	土坑	8－C				
227	溝	8・9－A～C	19C中		(伊)碗・中皿・赤絵盃？・御神酒徳利。瀬)灰釉皿・天目碗。唐)刷毛目碗。京信)碗・壷。越)擂鉢・鉢。土)灯明皿。瓦)施釉平瓦・丸瓦。	55
228	土坑	9－C			瀬)灰釉皿。越)擂鉢。土)灯明皿。須)甕。	219
229	柱穴	9－C				
230	土坑(ゴミ穴)	1－B	17C後	多くの遺物が遺構62と接合。両者密接な関係あり。	(伊)碗・菊彫天皿・皿・白磁小皿。瀬)天目碗。唐)絵唐津皿・鉄釉中皿・呉器手碗・京風碗。越)壷・甕。土)灯明皿。須)甕。金)火箸？。石)パンドコ	94
231	溝	1・2－B・C				
232	曲水池	1～3－A・B	19C	17C後多く混じる。	(伊)小皿・半球碗・瑠璃釉大皿。瀬)志野皿。唐)皿(胎土目・砂目・青緑釉)・勉釉(京・徳利)。京信)灯明皿。越)擂鉢・壷。土)灯明皿	
233	溝	1・2－A	18C～19C	旧上水道？	(伊)碗・皿。瀬)志野鉢上絵角皿。唐)刷毛目碗・二彩大皿・呉器手碗。京信)色絵碗。越)鉢・壷・鉢。土)灯明皿	
234	溝廻方	1・2－A	17C後～18C	遺構233石積廻方	(伊)大皿。瀬)皿・掛分碗。唐)貴釉皿。越)壷・擂鉢。土)灯明皿。須恵器	
235	ピット	4－B				
236	ピット	4－B				
237	ピット	5－B				
238	柱穴	6－B				
239	柱穴	6－B				
240	柱穴	7－B				
242	土坑	7－B	17C後～18C		(伊)碗。唐)刷毛目碗・刷毛目片口？・呉器手碗。越)壷。土)灯明皿。	88
243	柱穴	7－B・C				
244	溝	7－B・C	18後～		(伊)皿・青磁香炉？。京)色絵半球碗。越)壷・擂鉢。	54
245	溝	8－B	16C末		瀬)鉄釉皿。越？)擂鉢。土)灯明皿。	117
246	溝	8・9－B・C				
247	ピット	6－A	17C後		唐)呉器手碗。	125

第６表　近世遺構一覧５

248	柱穴	7－J				
249	土坑	7－J				
250	柱穴	8－J				
251	柱穴	9－J				
252	柱穴	9－J				
253	柱穴	9－I				
254	柱穴	6－D				
255	柱穴	6－D				
256	土坑	4－B				
257	柱穴	5－B				
258	柱穴	6－B				
259	ピット	6－B				
260	ピット	6－B				
261	ピット	6－B				
262	土坑	6－B				
263	土坑	6－B				
264	柱穴	6－C				
265	柱穴	6－C				
266	柱穴	7－C				
267	柱穴	8－C				
268	柱穴	9－K･L				
269	土坑	7－A･B				
301	上水道施設	1－J	19C	井戸桶底		78
302	上水道施設	3－K	19C	井戸桶底	(伊)碗・合子蓋。瀬)碗・染付皿・蓋・黄瀬戸向付。唐)刷毛目碗。他)碗・土鍋・近代猪口。越)灰釉壺・耳付き壺・甕・擂鉢・鉢。土)灯明皿。	93
303	上水道施設	6－K	19C	ジョイント桶		124
304	上水道施設	3－I･J	19C	厚板。周に玉石を敷き詰め、木枠で囲う	(伊)半球碗・赤絵小壺・青磁八角皿・人形。瀬)碗・天目碗？・錆手碗・志野。唐)内緑釉皿・二彩壺・刷毛目猪口・呉器手碗。越)鎬釉甕・擂鉢。土)灯明皿。金)蓋？。	123
305	上水道施設	7－C	19C	井戸桶底		
309	木樋(側方)				(伊)小瓶。瀬？)鉄釉壺？越)壺・擂鉢。土)灯明皿。	

凡　例

(伊) 伊万里焼（肥前磁器）

(唐) 唐津焼（肥前陶器）

(瀬) 瀬戸美濃焼（磁・陶器）

(越) 越前焼

(京信) 京・信楽焼

(京) 京焼

(三) 三田焼

(土) 土師質製品

(他) 在地窯・不明

(中国) 中国製品

(須) 須恵器

(瓦) 焼物瓦（石製除く）

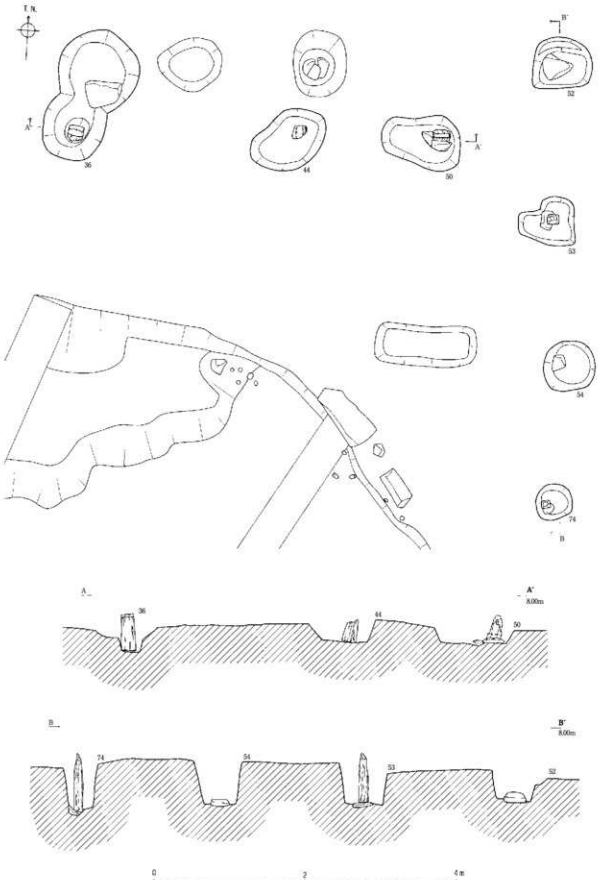
(金) 金属製品

(石) 石製品

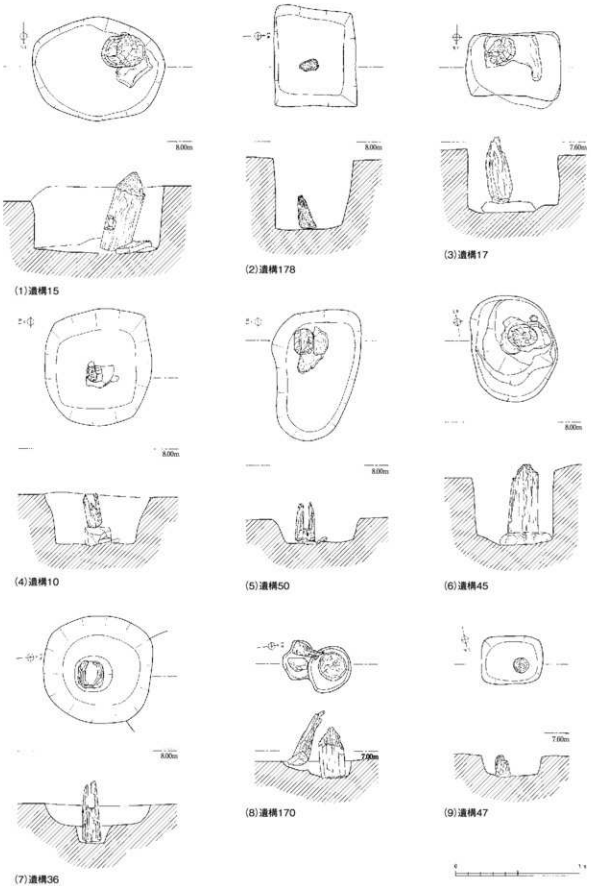
(生) 動・植物

(植) 植物

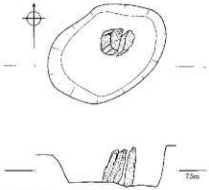
第６図　近世福井城期遺構配置図（Ｓ＝１／200）


T.N.
A
A'
36
44
50
B'
52
53
54
74
B
A
A'
8.00m
36
44
50
B
B'
8.00m
74
54
53
52
0
2
4m

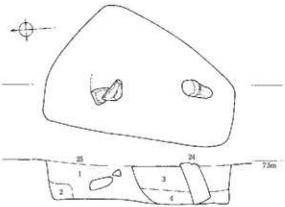
第７図　柱穴１　（Ｓ＝１/50）


8.00m
8.00m
7.60m
(1)遺構15
(2)遺構178
(3)遺構17
8.00m
8.00m
8.00m
(4)遺構10
(5)遺構50
(6)遺構45
8.00m
7.00m
7.60m
(7)遺構36
(8)遺構170
(9)遺構47

第８図　柱穴２　（Ｓ＝１/30）



(1)遺構44



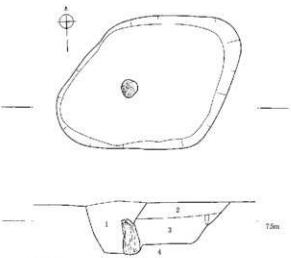
(2)遺構25・24

遺構25

1. 暗褐色土。黄褐色土混じる。黒炭を含む。
2. 暗褐色土。黒炭を含む。

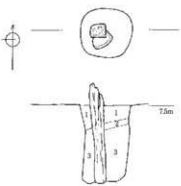
遺構24

3. 暗褐色土。黄褐色土・暗黄褐色土・黒炭を多く含む。
4. 暗褐色土。暗黄褐色土・黒炭を含む。



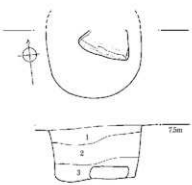
(3)遺構13

1. 黄褐色土。砂粒状で硬く締まる。黒炭・小石含む。
2. 茶褐色土。黄褐色土・小石含む。
3. 茶褐色土。硬く締まる。黒炭をわずかに含む。
4. 茶灰色粘質土。黄褐色土が混じる。



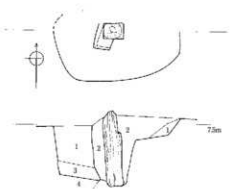
(4)遺構74

1. 茶褐色粘質土。黄褐色砂質土が混じる。黒炭わずかに混じる。
2. 黄褐色砂質土。
3. 茶褐色砂質土。黒炭わずかに混じる。



(5)遺構52

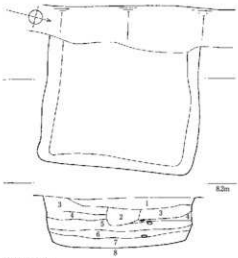
1. 黄褐色土。暗褐色土混じる。黒炭・1cm以下の小石を含む。
2. 黄褐色土。黒炭。1cm以下の小石を含む。
3. 暗褐色粘質土。暗黄褐色土混じる。黒炭を含む。



(6)遺構53

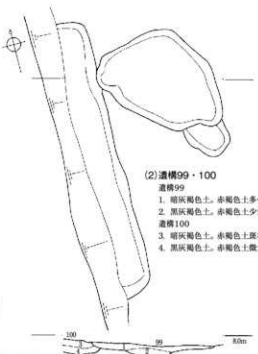
1. 暗茶灰色粘質土。硬く締まる。黒炭をわずかに含む。
2. 茶褐色砂質土。黄褐色土・灰色土混じる。黒炭を少量含む。
3. 暗灰色粘質土。黄褐色土わずかに混じる。
4. 黄褐色砂質土。灰色土塊混じる。

第9図　柱穴3　（S＝1/30）



(1)遺構82

1. 橙灰色土。砂混じる。1～3㎝の炭化物をわずかに含む。
2. 灰色土。やや粘性あり。小石を含む。1が混じる。
3. 黄灰色粘質土。2付近は灰色土が多い。3～5㎝の炭化物を含む。
4. 暗灰色砂質土。礫・小石・木片を含む。炭化物をわずかに含む。
5. 黒灰色土。やや粘性がある。木片・小石を含む。
6. 暗黒灰色土。礫・小石・木片・炭化物を多く含む。
7. 暗茶褐色土。粘性ややあり。明茶褐色土混じる。木片を含む。
8. 灰色+暗黄褐色土。砂にちかい性質。ブロック状の暗灰色土がわずかに混じる。



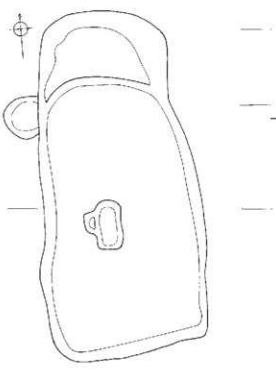
(2)遺構99・100

遺構99

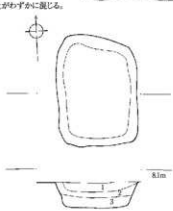
1. 暗灰褐色土。赤褐色土多く含む。炭化物少量含む。
2. 黒灰褐色土。赤褐色土少量含む。

遺構100

3. 暗灰褐色土。赤褐色土斑状に含む。炭化物少量含む。
4. 黒灰褐色土。赤褐色土微量含む。炭化物多く含む。

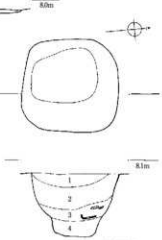


(3)遺構127



(4)遺構129

1. 淡黄褐色土
2. 茶褐色土+炭化物混じる
3. 暗灰褐色粘質土+炭化物混じる



(5)遺構179

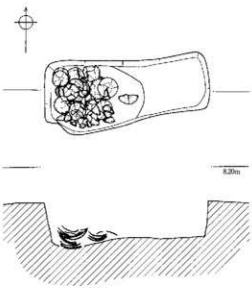
(5)遺構179

1. 茶褐色土。黄褐色土混じる。黒炭塊多く含む。約3cmの小石混じる。
2. 暗茶褐色土。黒炭塊多く含む。約3cm の小石・黄褐色土粒混じる。
3. 暗茶褐色土。木製品含む。黒炭粒・約3cmの小石混じる。
4. 黒褐色土。黒炭粒・約3cmの小石混じる。

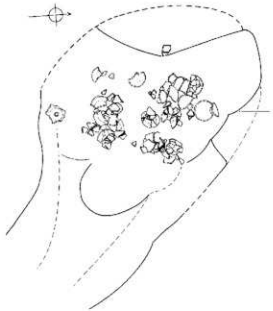
(3)遺構127

1. 暗黄褐色土。粘性の弱い灰色土が混じる。3㎝程度の炭化物を少量含む。
2. 茶褐色土。3～5mm程度の炭化物を含む。
3. 黒褐色土。炭化物・小石を多量に含む。
4. 暗灰色+黄褐色土。粘性がある。炭化物黒炭を少量含む。
5. 暗茶褐色土。やや粘性がある。炭化物をわずかに含む。
6. 暗黒灰色土。やや粘性がある。炭化物・木片・植物の根を含む。
7. 暗黒灰色+暗黄褐色土。やや粘性がある。炭化物、木片、植物の根を含む。
8. 暗灰色粘質土。暗黒灰色土が混じる。砂を含む。

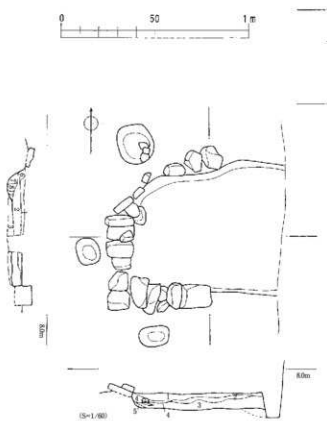
第10図　土坑1　（S＝1/60）



(1)遺構133　(S=1/20)



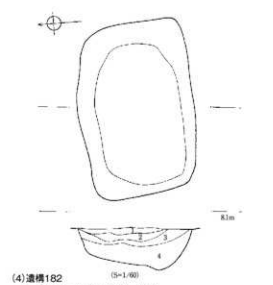
(2)遺構92　(S=1/20)



(S=1/60)

(3)遺構76

1. 明灰色砂質土。しまり強。粘性弱。炭化物少量含む。
2. 灰褐色砂質粘土。しまり強。粘性やや弱。木片、炭化物粒をわずかに含む。明灰色砂質土粒多く含む。
3. 暗灰褐色砂質粘土。しまり強。粘性やや弱。炭化物粒を多く含む。砂質土粒・暗灰色粘質土ブロックを含む。
4. 黄茶褐色砂質土。しまりやや強。粘性弱。砂主体の崩落土。炭化物含む。
5. 暗灰色粘質土。しまり強。粘性やや強。炭化物含む。
6. 灰白色砂質土。しまり強。粘性弱。
7. 灰褐色砂質粘土。しまり強。粘性やや弱。炭化物含む。
8. 暗灰色粘質土-しまり強。粘性やや強。灰色シルト塊・炭化物粒多く含む。

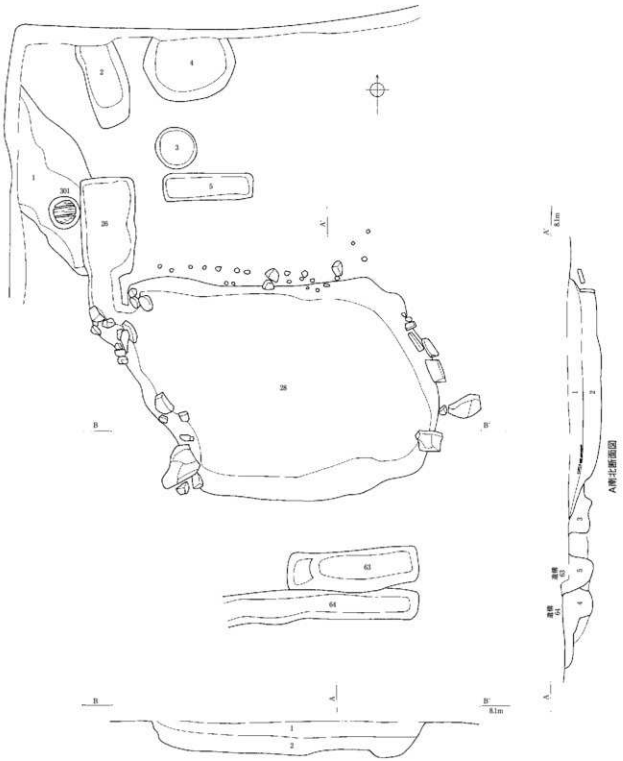


(S=1/60)

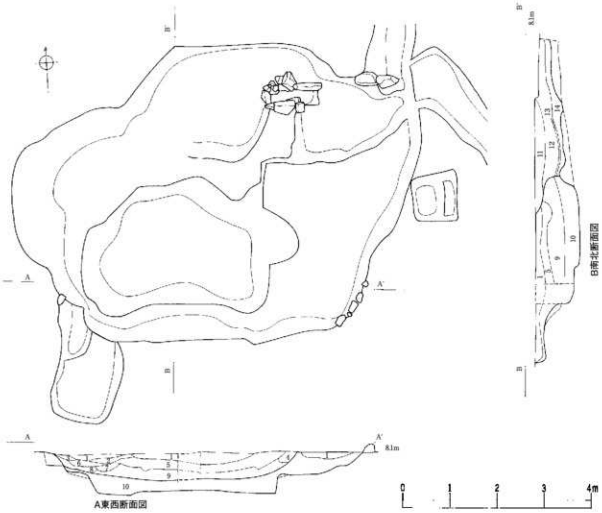
(4)遺構182

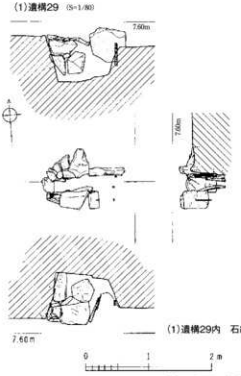
1. 茶褐色土。黄褐色土混じる。炭含む。
2. 暗茶褐色土。5mm以下の黒炭・木片多く含む。黄褐色土・3cm程度の石混じる。
3. 黄褐色土。5mm以下の黒炭含む。
4. 黒褐色土。木材及び黒炭多く含む。3cm程度の小石混じる。

第11図　土坑2・池状遺構1　（S＝1/20・1/60）



第１２図　池状遺構２　（Ｓ＝１/80）





遺構29
(A東西・B南北断面共通)

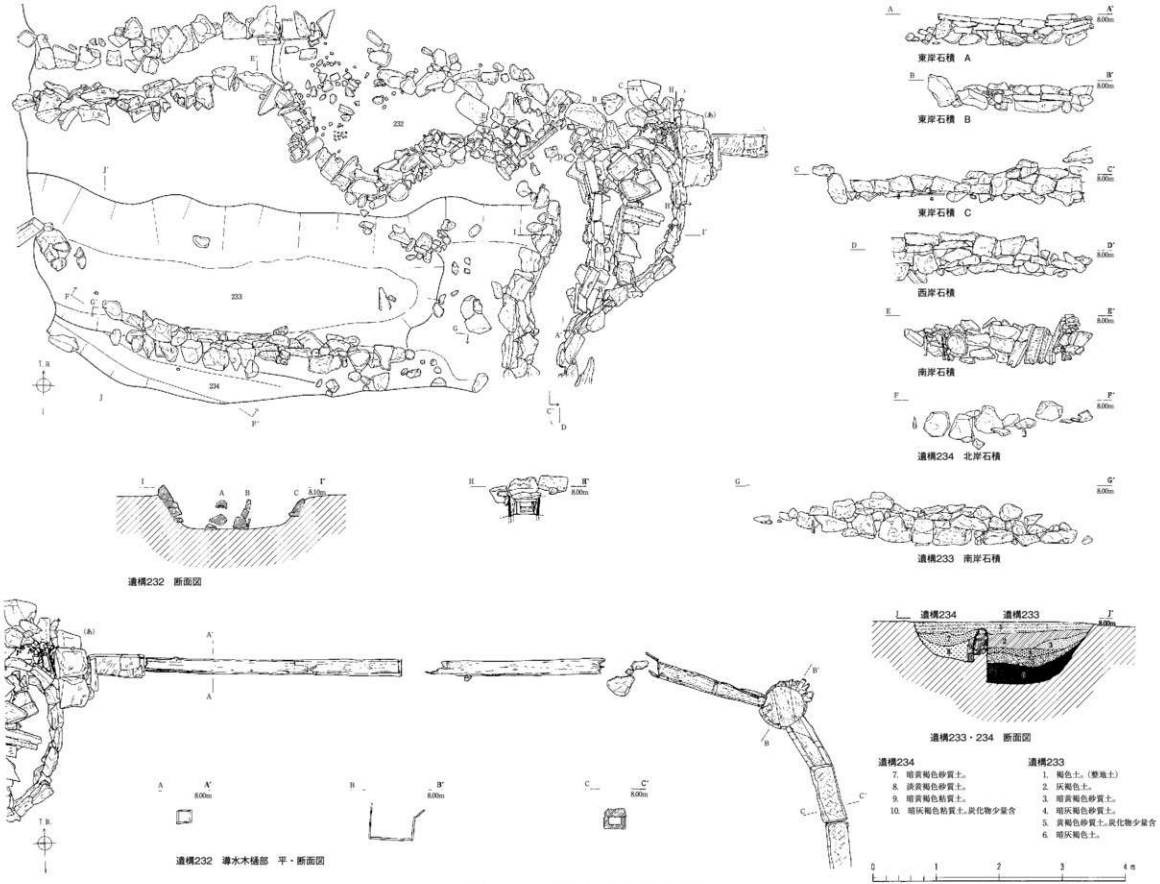
1. 淡白褐色土。砂含む。層下には、木片が多量に沈殿する。
2. 暗茶褐色土。礫多量に含む。
3. 淡白褐色土。
4. 暗黄褐色砂。
5. 黄褐色土。灰色粘土少量混じる。粘土ブロック・礫含む。
6. 暗灰色粘質土。砂含む。
7. 黄褐色粘質土。小石多量に含む。
8. 灰褐色粘質土。灰色土が混じる。
9. 暗灰褐色。粘土と砂が3すく交互に堆積する。水脈層の可能性有。
10. 暗灰褐色粘質土。

遺構29
(B南北断面)

11. 淡白褐色土。木片多量に含む。
12. 暗茶褐色粘質土。砂少量含む。木片を含む。
13. 黒褐色土。炭化物を多量に含む。
14. 暗茶褐色土。礫多量に含む。

第13図　池状遺構3　(S＝1/60・1/80)

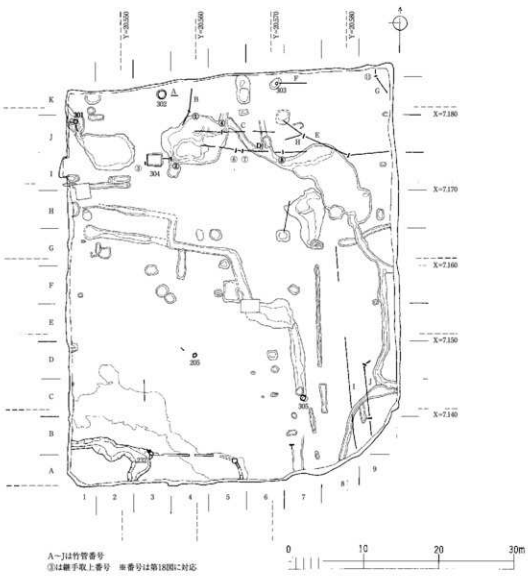
第14図　池状道構４　（Ｓ＝１/80）



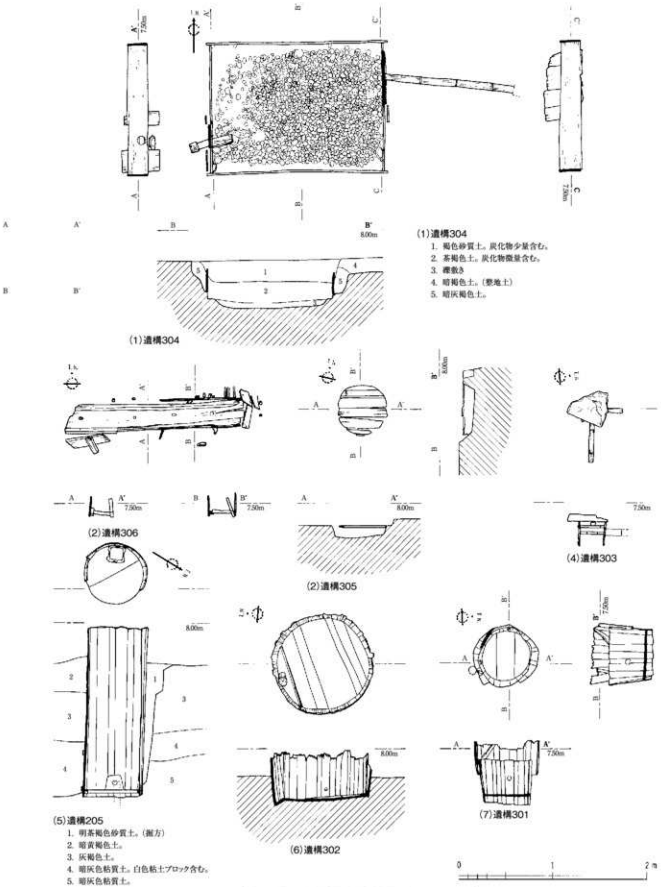
第15図　池状遺構5・溝遺構　(S＝1/60)

5）水道施設

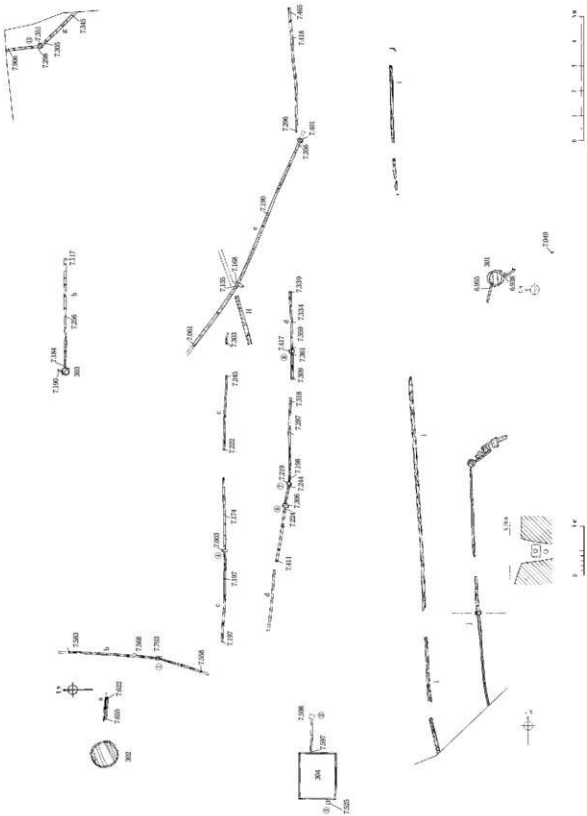
福井城下の湧水には多量の鉄分を含むため飲用水には不適であった。このため福井城（北庄城）築城と同時に上水道が開削されたようであり、福井城最古期に属する「北ノ庄城郭図」（慶長年間）にもすでに描かれている。調査区の南側および西側を流れる芝原上水もその1つである。今回の調査で出土した遺構は、各屋敷への給水に関わるものである。現代の塩ビ管に相当する「竹管」、桶製の「枡」、汲み上げ井戸等が検出された。竹管が非常に腐朽しやすい材質のため各屋敷等への給水状態等の全容を掴めなかった。遺存箇所は攪乱等の少ない調査区の北・東側に集中した。汲み上げ井戸（第17図（3），（5），（7））の井筒は、総て桶側で総て直径は0.6mを測る。（3）は底板のみ残ったもの。枡（4）は木製蓋の上に板石で蓋をする。木樋（2）は本来暗渠だが蓋を失う。またどこに繋がっていたか不明である。（1）は四方を木枠で囲い、底面に玉砂利を敷き詰める。東西の竹管は0.1mの高差があり、東側竹管が高いことから東側竹管から給水し、西側竹管へ排水をおこなったと考えられる。



第16図　上水道関係遺構配置図　（S＝1/500）



第17図　上水道関係遺構図１（S＝1/40）



第18図　上水道関係遺構図２　（S＝1/75・1/150）

第２節　福井城期の遺物

第１項　土・陶磁器

唐津焼（肥前陶器）；　17 世紀前半には絵唐津碗や皿・大皿、砂目皿等の他、彫唐津茶碗（116-8）がみられる。17 世紀後半以降は呉器手碗、京焼風碗、刷毛目碗や片口鉢・大皿、二彩唐津大皿等多様である。呉器手碗はその白さから磁器碗代用としたのか非常に多い。また、大きいサイズで赤褐色を呈したもの（82-19）もある。96-3 は上絵付けを施された珍しい例である。李朝茶碗をよく写し、薄い器壁や高台など丁寧な作りの（呉器手・82-17、91-4）（熊川手・127-2）は雑器とは一線を画し、茶の湯用と思われる。『隔蓂記』にみえる「李朝写し」とはこのようなものか。

伊万里焼（肥前磁器）；　17 世紀代は天目形鎬碗（73-3、102-1）他、碗・皿等食器類が中心である。18 世紀以降は量的、器種とも増加する。くらわんか碗（95-2・3）、外青磁内染付碗（112-5、10）、広東碗（28-2、29-4・5、112-2）等碗類や、中・大皿（28-9、29-7、112-14）も多い。鉢類（112-15）の他、紅皿（26-1、73-7）、油壺（73-5）、香炉（232-2）水滴（78-2）等多岐にわたる。

瀬戸美濃焼；　17 世紀初期には志野、織部、御深井向付や天目茶碗等茶陶関係中心である。以降灰釉碗等細々と、しかし一定してみられる。しかし 19 世紀、瀬戸系産地で磁器が作られると出土数が増加する。端反碗や半球碗、また鉢類（73-11、200-1）等見られる。これに合わせ瀬戸系陶器類も増加する。緑釉や灰釉の瓶掛や水鉢等大物の他、腰錆碗（34-3）や鐘手碗（95-6、7）など食器類も見られる。

京・信楽焼；　17 世紀後半の色絵碗として 82-20 が特筆される。外面に青・緑・金彩等により上絵付で鉄線花を描く。高台内には「岩倉」印を捺す。同じ鉄線の図柄は他の京焼（京都府立総合資料館蔵　水差）でも見られ、一種のデザインとして確立していたようである。18 世紀以降錆絵・色絵等華やかさが好まれたためか多く出土する。胴締碗（62-7、112-18）、半球碗（225-2）等碗・鉢類が多い。

近郊窯；　19 世紀前後から各地で窯業が盛んとなり、越前でも同様に生産された。土瓶（34-1、62-9、116-15）土鍋・行平鍋（112-21、116-10・11）等調理具中心に多く出土している。ただし 19 世紀窯業遺跡の調査がほとんどおこなわれていないため生産窯は特定できなかった。

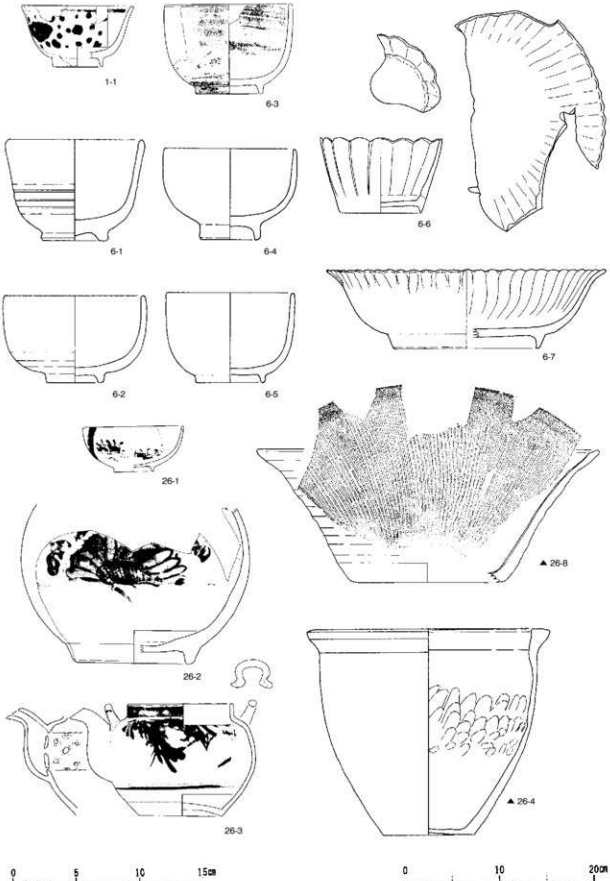
三田系窯；　青磁稜花鉢（28-8）は型作りで、青磁釉が厚く中国風のデザインは三田青磁の特色を示す。

越前焼；　擂鉢、甕、鉢等の器種は全時期を通じほぼ独占する。擂鉢は口縁部が 17 世紀代の鋭角なものから 18 世紀代に丸くなり、19 世紀には外反する。体部には 18 世紀前後から櫛幟目を強く付ける。19 世紀には外へ張り出した高台を付ける。鉢類は 18 世紀後半から大量に出土する。器形的には①逆台形と②甕を浅くした形式の２種類あり、おのおのＡ浅鉢とＢ深鉢があり、口径的に数種類ある。

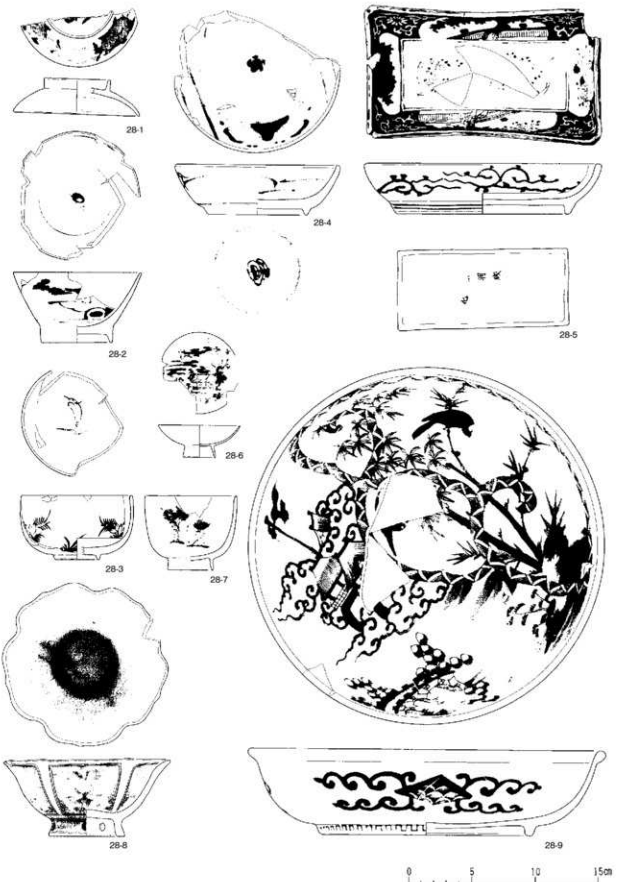
土師質；　皿はほとんどが手捏ねだが 17 世紀後半に一時的に櫛幟製（82-25・26）がみられる。七厘・焜炉も多い。187-5 は軟質で黄釉を掛ける。十能であろうか。土人形（112-22）や施釉された箱庭用品（65-4）、囲碁の白石（62-13）等遊戯具も多い。

貿易陶磁；　中国製染付が少量出土する。器種は皿・坏に限定される。37-1 は花部分が辰砂彩である。

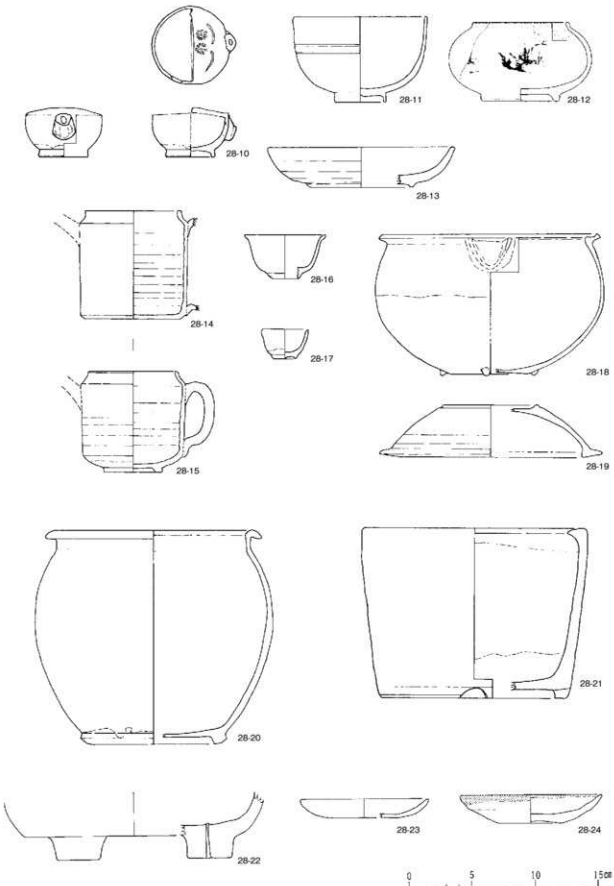
遺構遺物群の様相：　遺構 82・230 擂鉢・甕等が少なく、伊万里の菊絵皿（82-8）や組み物の狐絵皿（82-11 ～ 13）や色絵碗（82-3・4）、京焼鉄線色絵碗（82-20）等、200 石クラスの武士にしては優品が多く、豊かさを感じる。17 世紀後半頃と考えられる。遺構 28・29 は、碗・皿類をはじめ擂鉢・甕・鉢類等多岐にわたる。遺構 112 碗・皿類が主体で、19 世紀の様々な磁器碗類がみられる。いずれの遺構も 19 世紀中頃と考えられるが、白玉手盃が出土する遺構 28 は少し降るか。



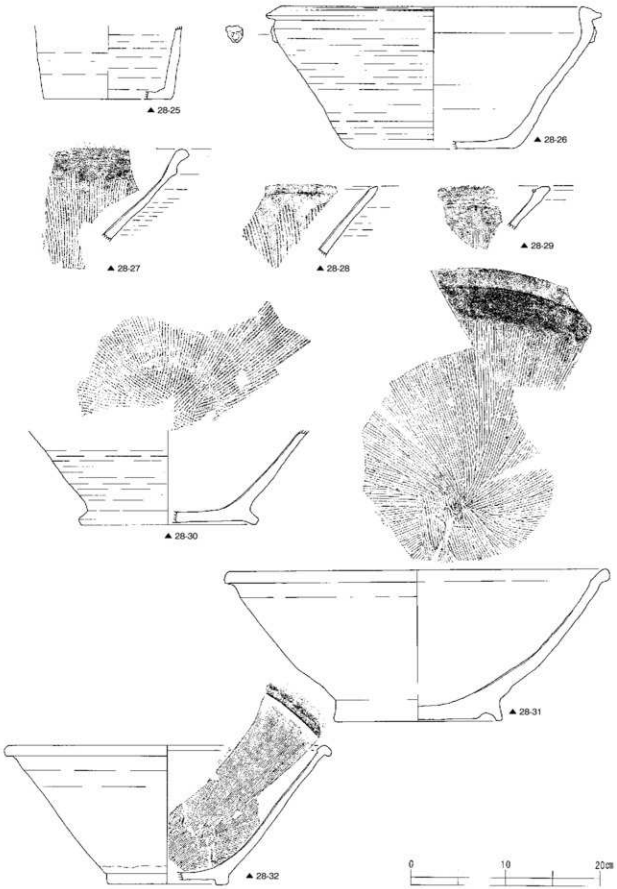
第19図　近世陶磁器（遺構1・6・26）実測図　（S＝1／3・▲は1／4）



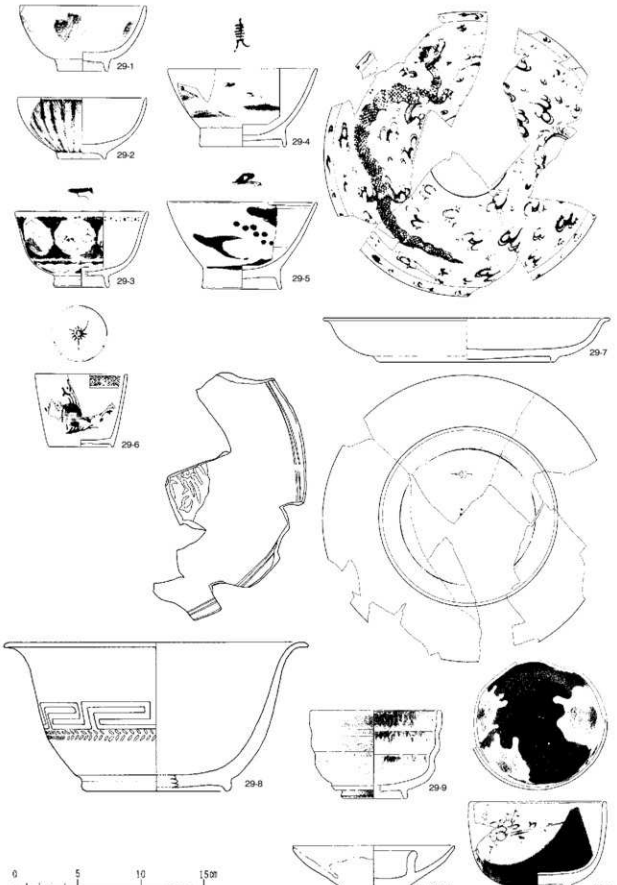
第20図　近世陶磁器（遺構28-1）実測図　（S＝1／3）



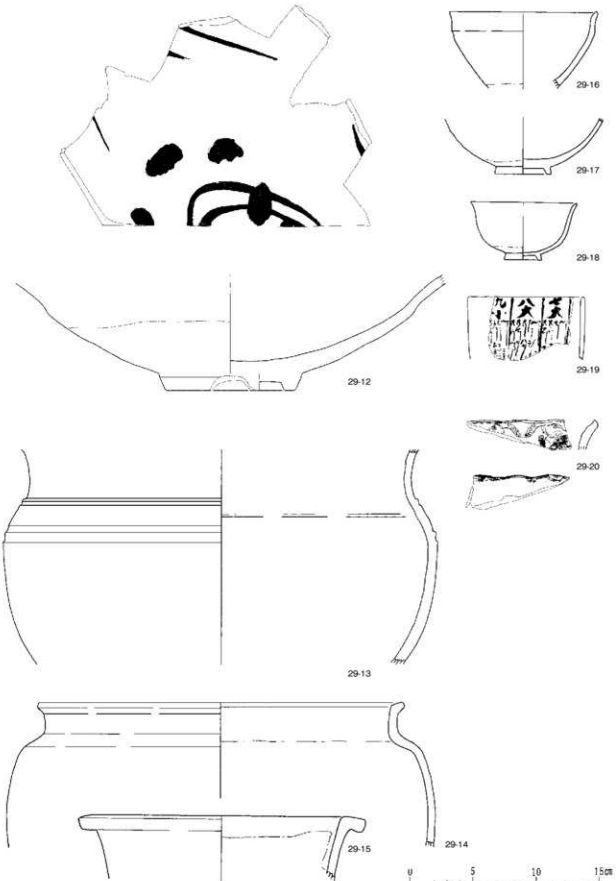
第21図　近世陶磁器（遺構28-2）実測図　（S＝1／3）



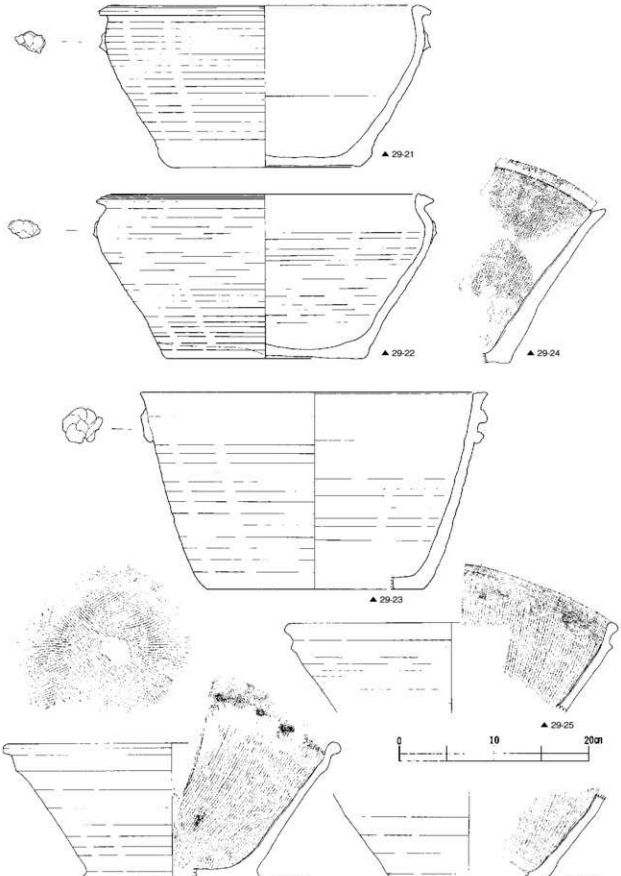
第22図　近世陶磁器（遺構28-3）実測図　（▲S＝1／4）



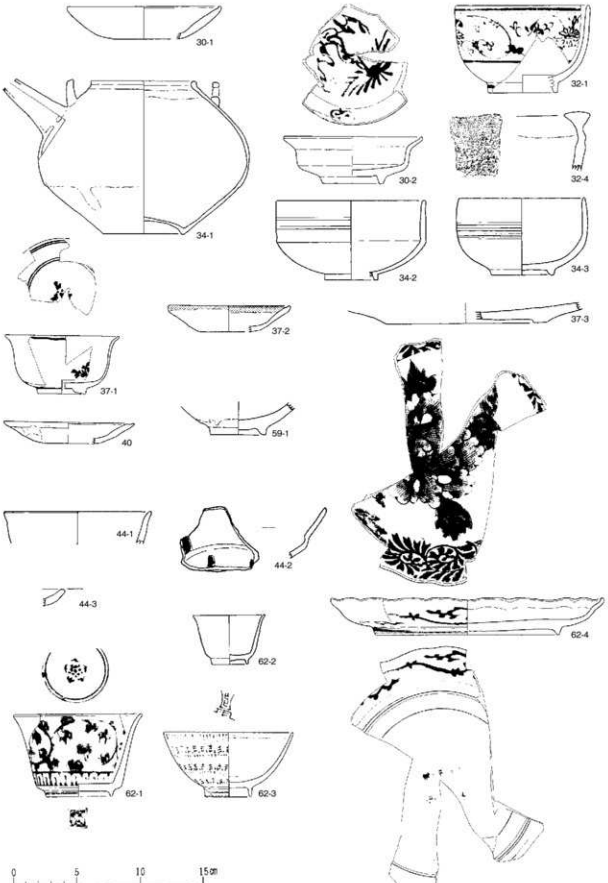
第23図　近世陶磁器（遺構29-1）実測図　（S＝1／3）



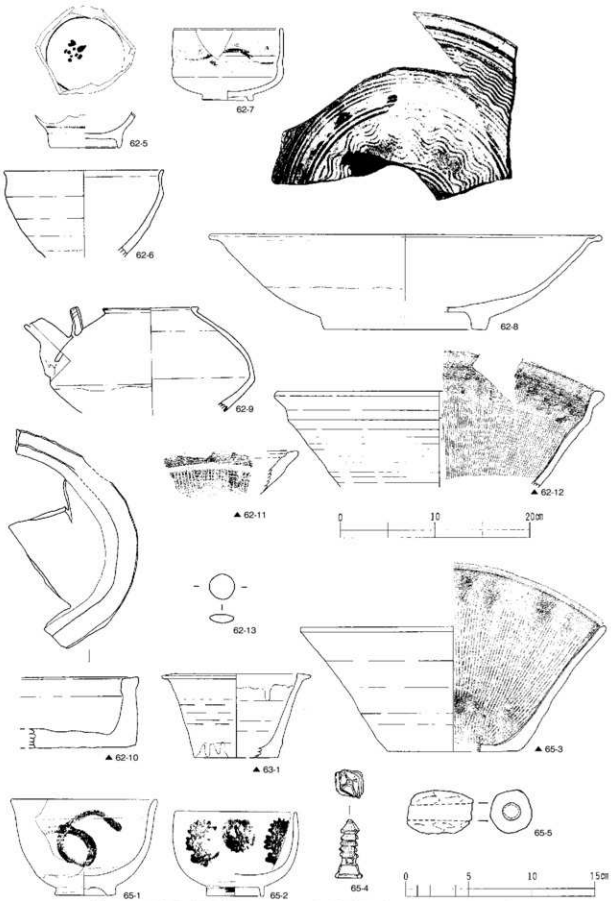
第24図　近世陶磁器（遺構29-2）実測図　（S＝1／3）



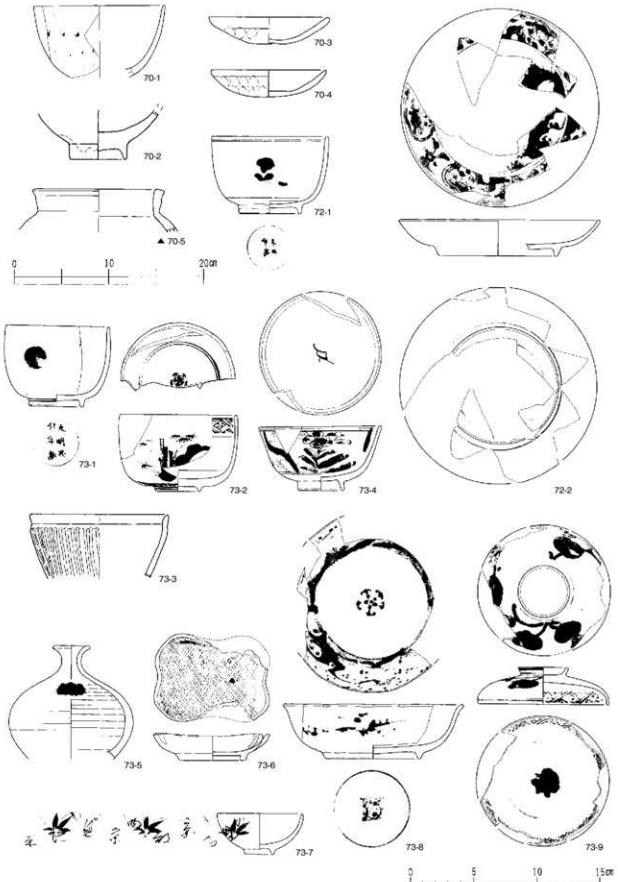
第25図　近世陶磁器（遺構29-3）実測図　（▲S＝1／4）



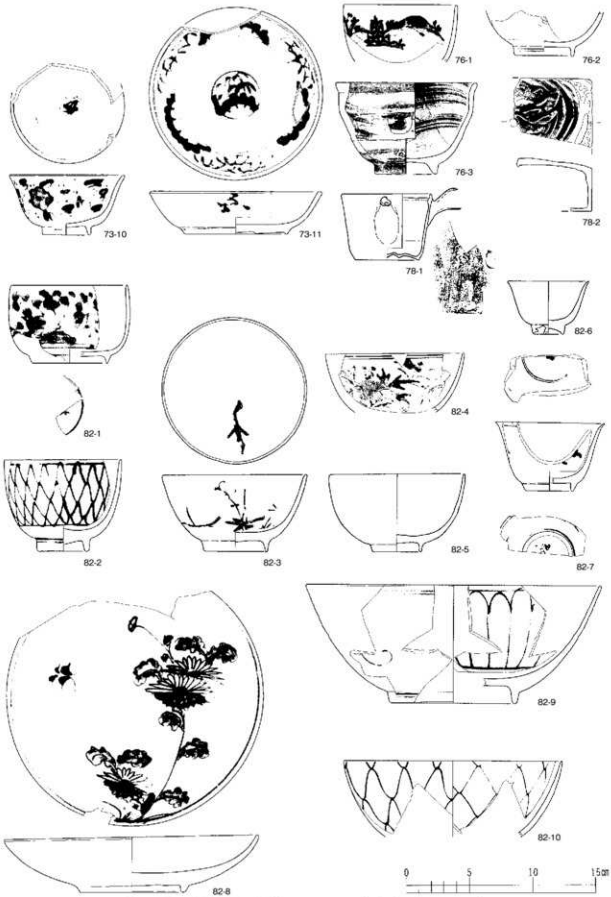
第26図　近世陶磁器（遺構30・32・34・37・40・44・59・62-1）実測図　（S＝1／3）



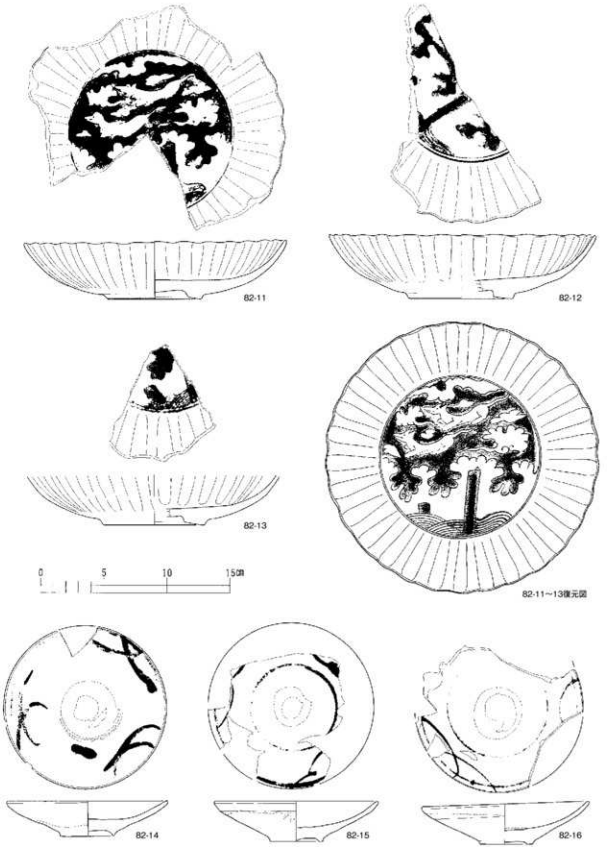
第27図　近世陶磁器（遺構62-2・63・65）実測図　（S＝1／3・▲は1／4）



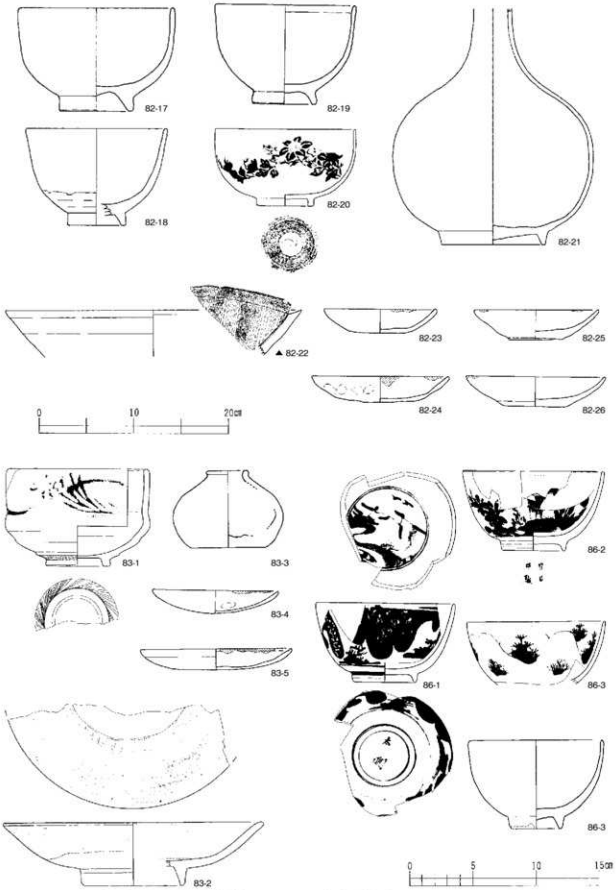
第 28 図　近世陶磁器（遺構 70・72・73-1）実測図（S＝1／3・▲は1／4）



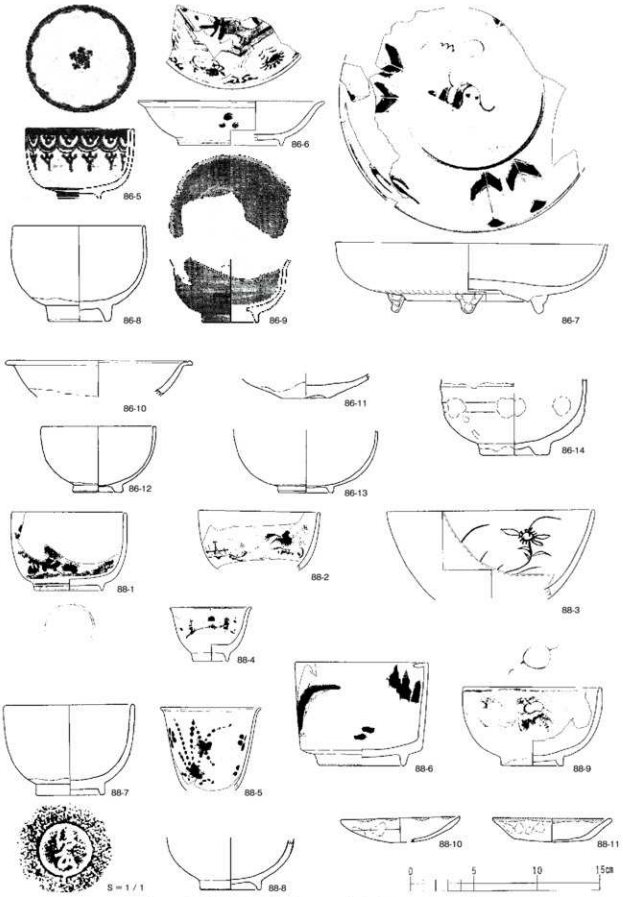
第29図　近世陶磁器（遺構73-2・76・82-1）実測図（S＝1／3）



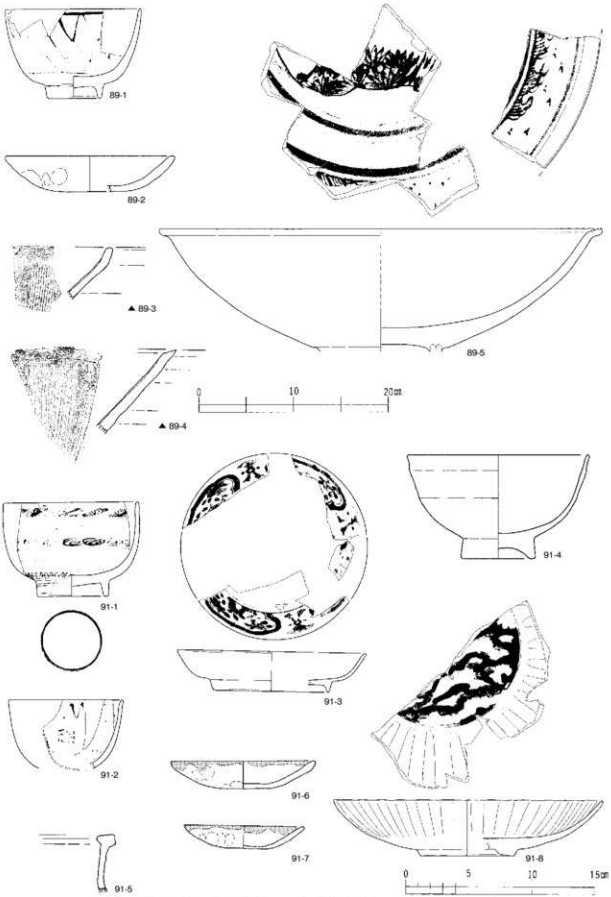
第30図　近世陶磁器（遺構82-2）実測図　（S＝1／3）



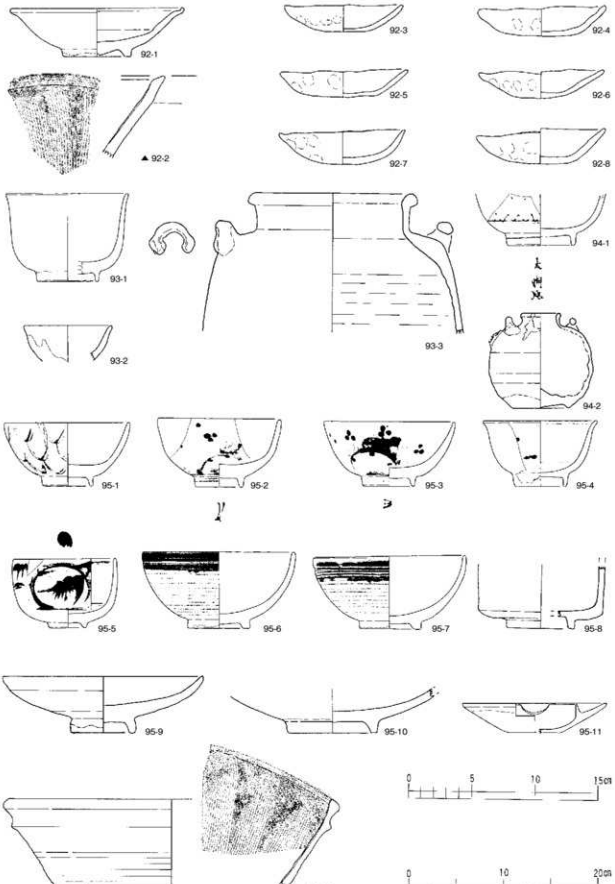
第31図　近世陶磁器（遺構82-3・83・86-1）実測図（S＝1／3・▲は1／4）



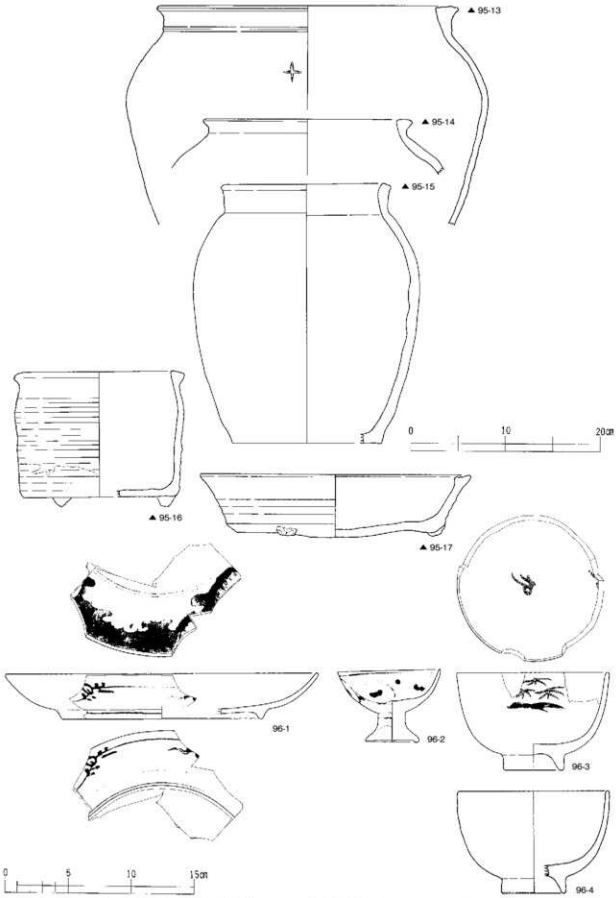
第32図　近世陶磁器（遺構86-2・88）実測図　（S＝1／3）



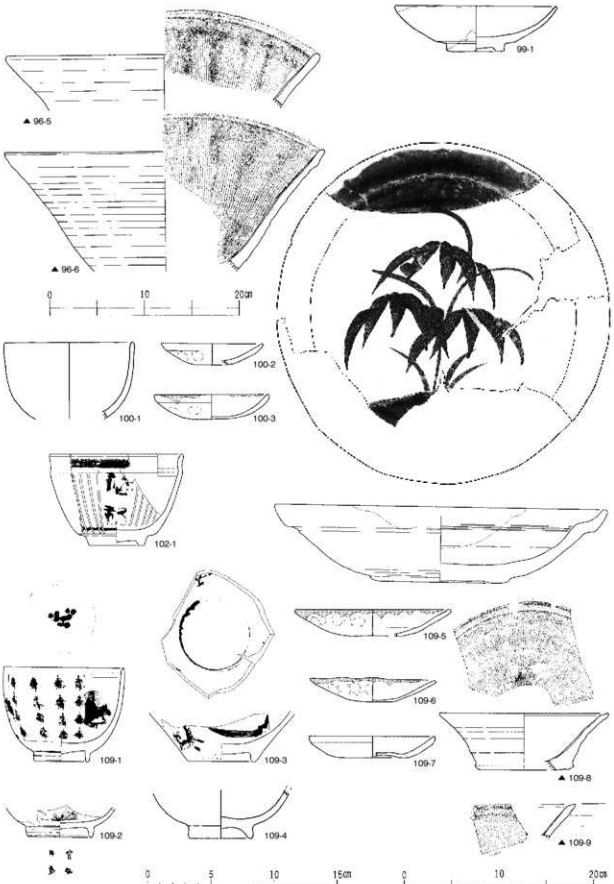
第33図　近世陶磁器（遺構89・91）実測図　（S＝1／3・▲は1／4）



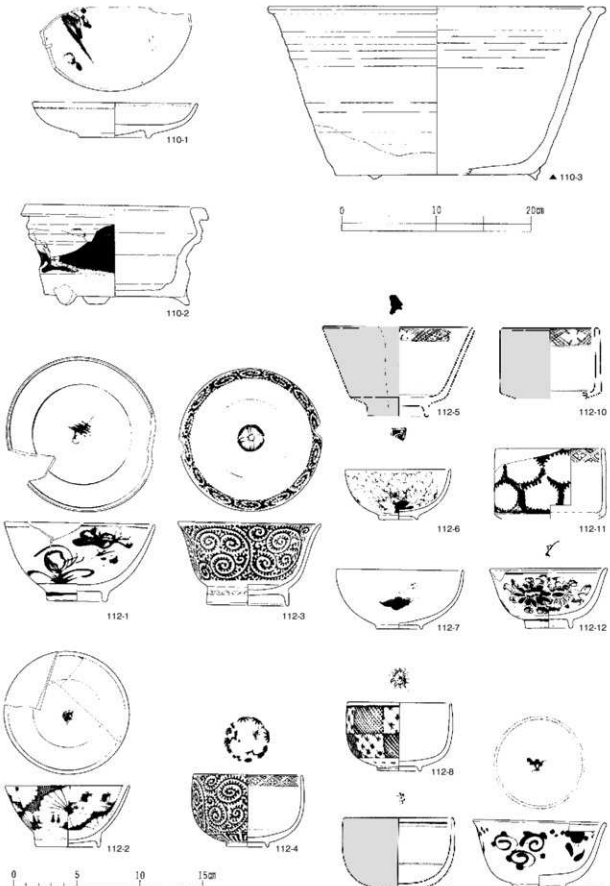
第34図　近世陶磁器（遺構92・93・94・95-1）実測図　（S＝1／3・▲は1／4）



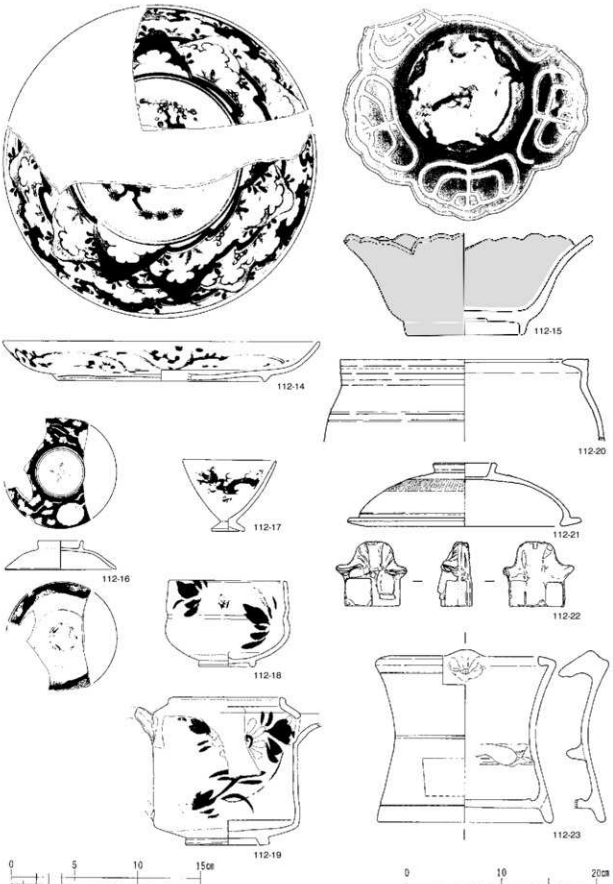
第35図　近世陶磁器（遺構95-2・96-1）実測図　（S＝1／3・▲は1／4）



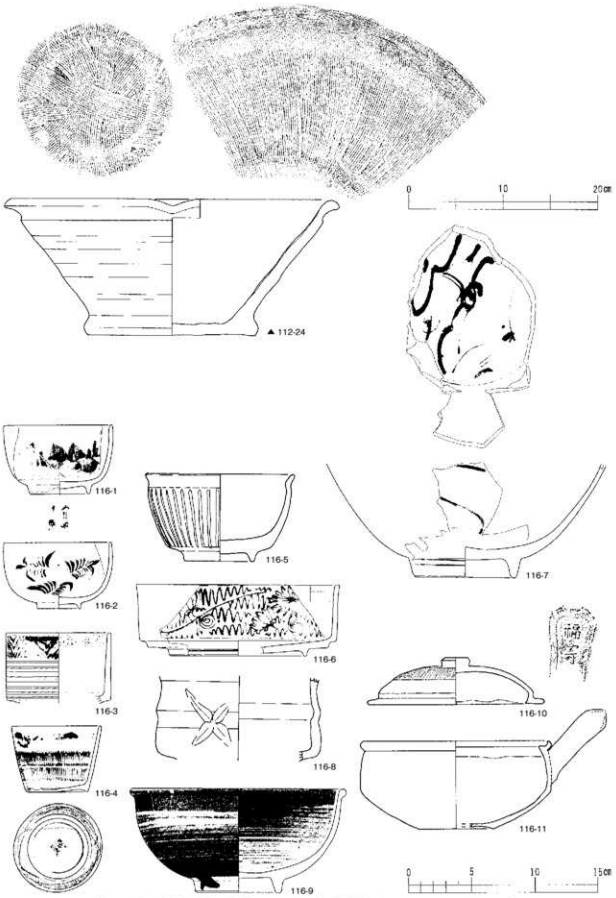
第36図　近世陶磁器（遺構96-2・99・100・102・109）実測図　（S＝1／3・▲は1／4）



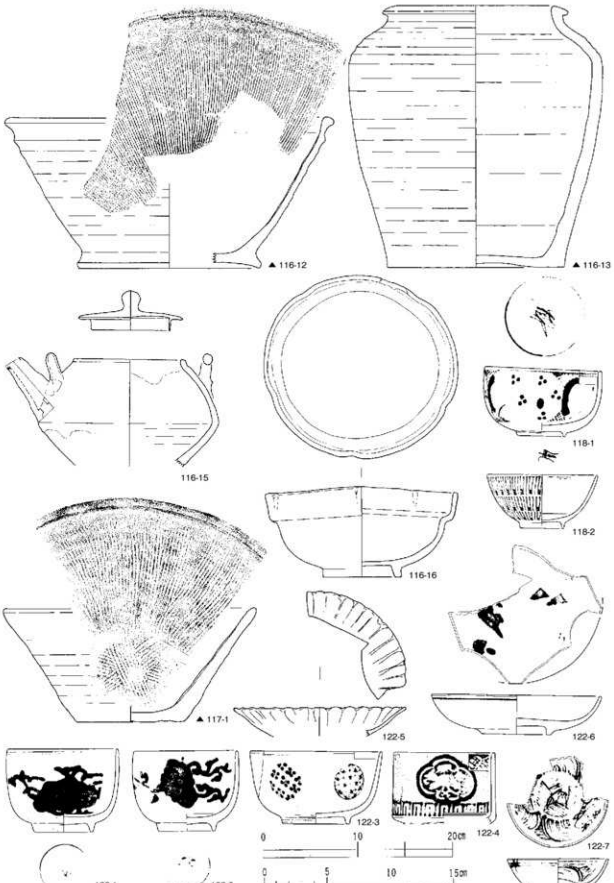
第37図　近世陶磁器（遺構110・112-1）実測図　（S＝1／3・▲は1／4）



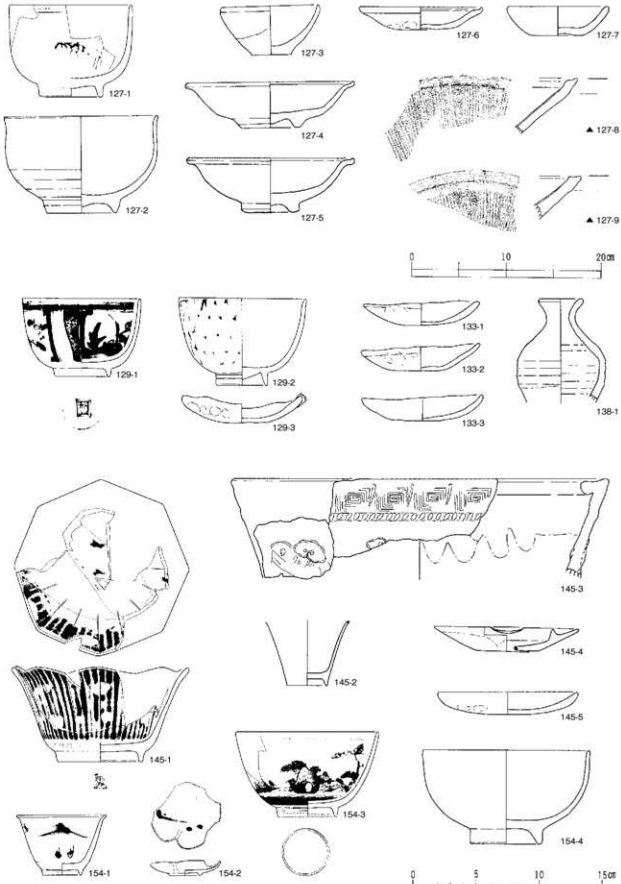
第38図　近世陶磁器（遺構112-2）実測図　（S＝1／3）



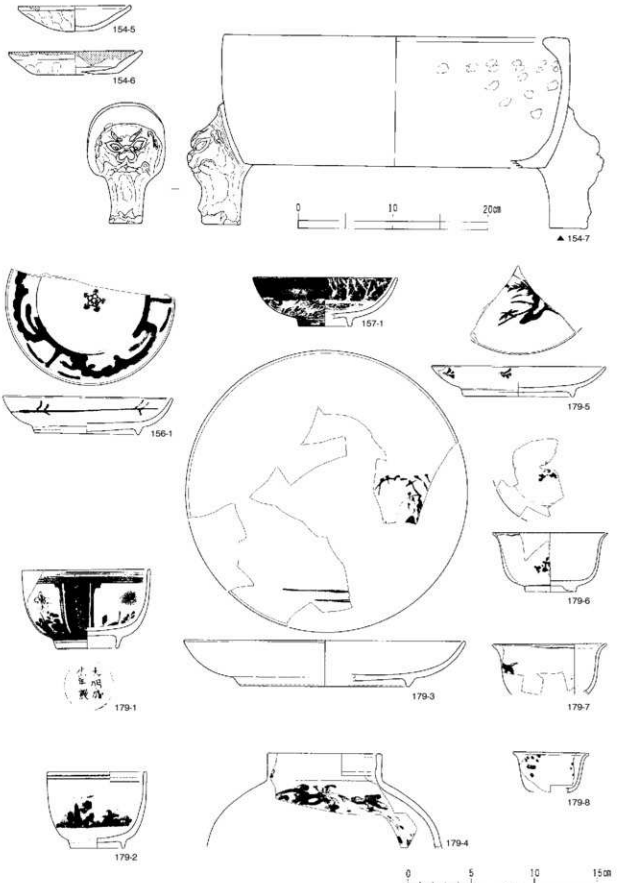
第39図　近世陶磁器（遺構112-3・116-1）実測図　（S＝1／3・▲は1／4）



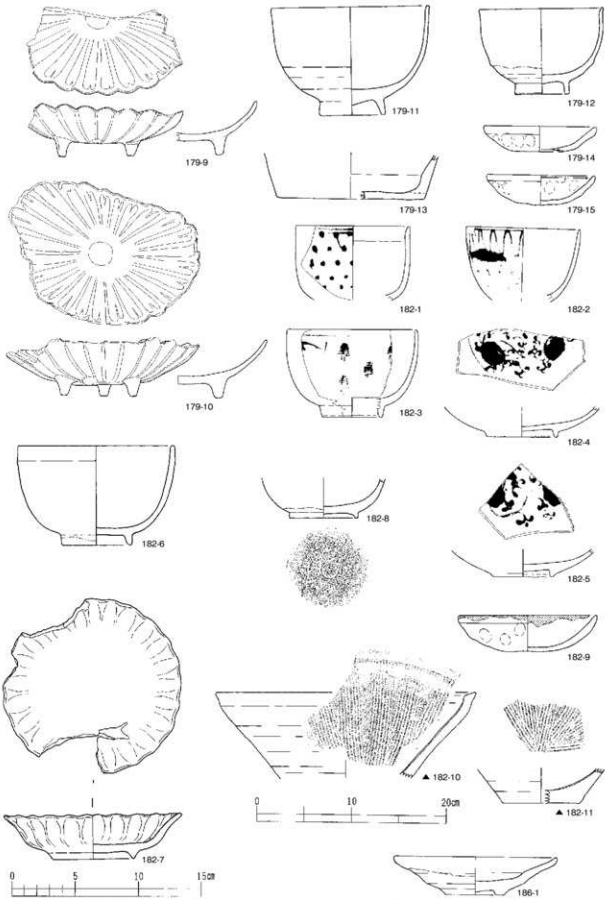
第40図　近世陶磁器（遺構116-2・117・118・122）実測図　（S＝1／3・▲は1／4）



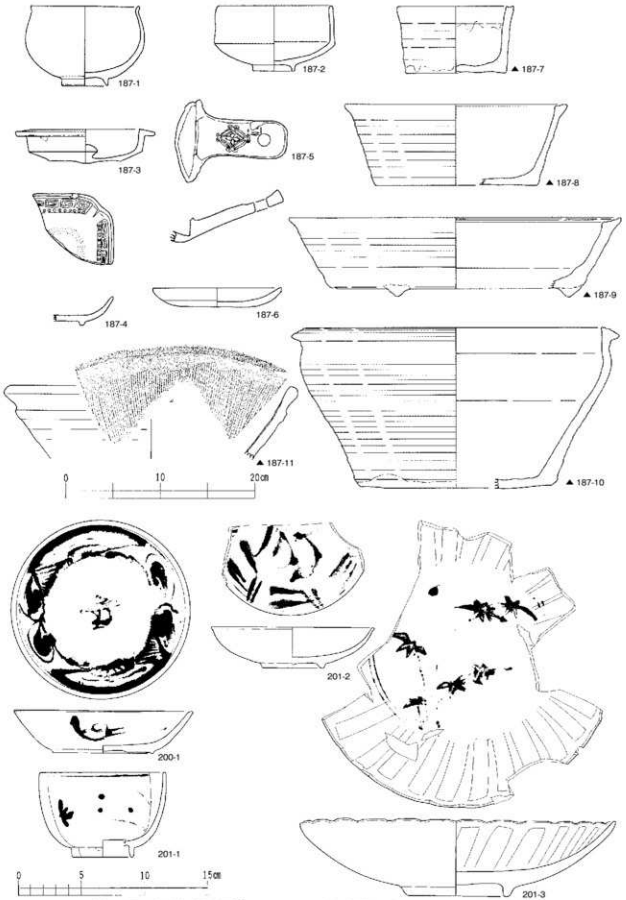
第41図　近世陶磁器（遺構127・129・133・138・145・154-1）実測図　（S＝1／3・▲は1／4）



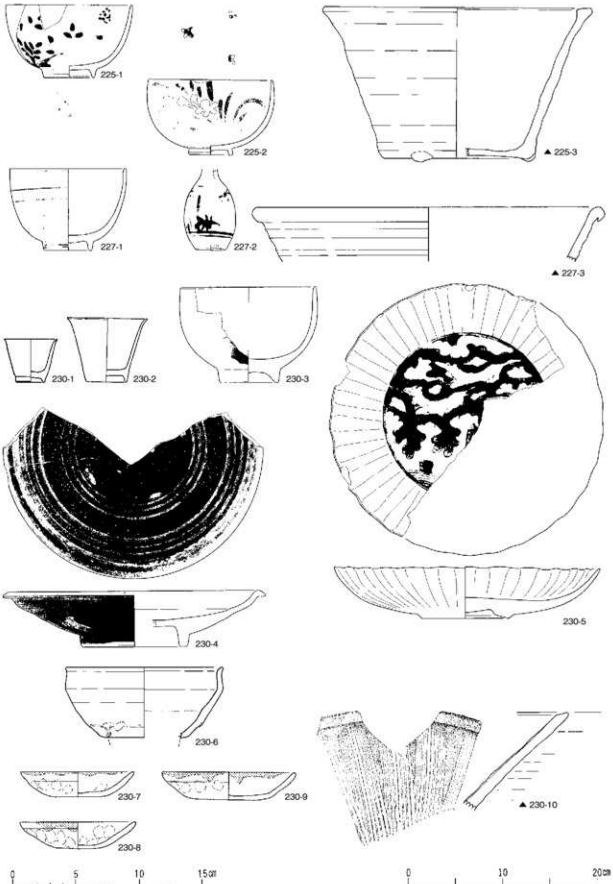
第42図　近世陶磁器（遺構154-2・156・157・179-1）実測図　（S＝1／3・▲は1／4）



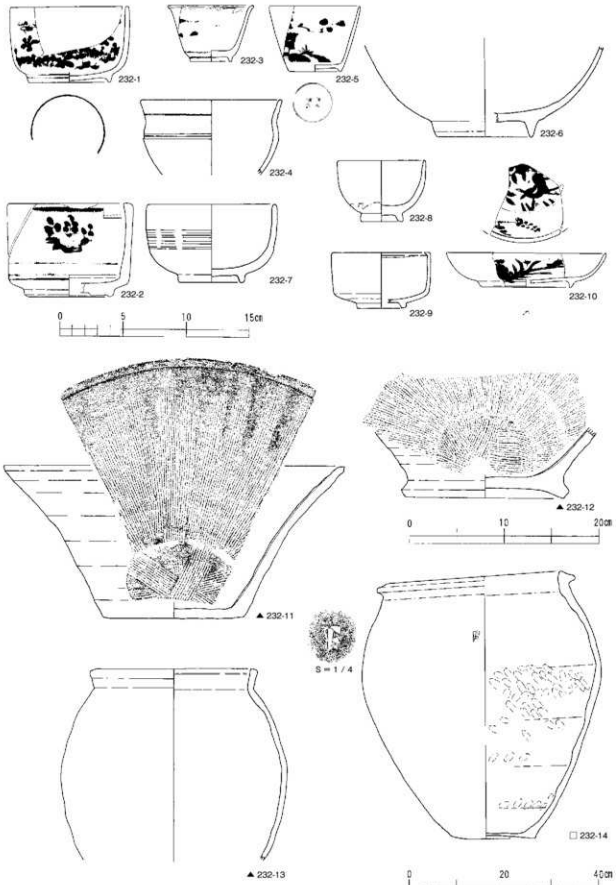
第43図　近世陶磁器（遺構179-2・182・186）実測図　（S＝1／3・▲は1／4）



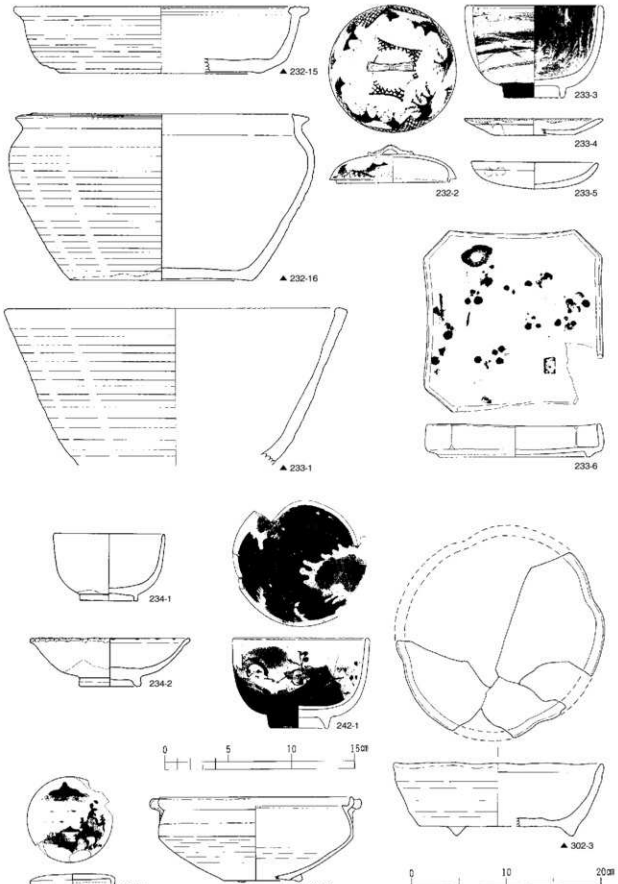
第44図　近世陶磁器（遺構187・200・201）実測図　（S＝1／3・▲は1／4）



第45図　近世陶磁器（遺構225・227・230）実測図　（S＝1／3・▲は1／4）



第46図　近世陶磁器（遺構232-1）実測図　（S＝1／3・▲は1／4・□は1／8）



第47図　近世陶磁器（遺構232-2・233・234・242・302）実測図　（S＝1／3・▲は1／4）

第７表　近世陶磁器観察表１

№	器種	産地	口径	底径	器高	その他
遺構１						
1	瀬戸碗	瀬・美	9.0	4.0	4.8	磁器
遺構６						
1	碗	伊万里	10.5	5.0	8.0	陶胎染付
2	碗	瀬・美	10.8	4.6	6.9	白釉（長石釉）
3	刷毛目碗	唐津	10.0	5.5	7.1	
4	鉄器手碗	唐津	10.2	4.8	7.2	緑釉流し
5	京風碗	唐津				高台内施釉
6	梅花鉢		9.6	6.4	6.0	型打ち
7	菊形大皿	伊万里	(22.0)	(11.4)	6.2	焼き継ぎ
8	擂鉢	越前	(36.2)	(16.8)	14.0	擂目６本 /19cm
遺構26						
1	平縁小碗	伊万里	9.1	3.1	3.7	赤絵
2	大瓶	伊万里		9.9	(12.7)	染付
3	土瓶		8.4	6.7	9.0	染付
4	壺	越前	38.6	14.4	32.6	鉄釉
遺構28						
1	盃	伊万里	(10.0)	鉄径（5.2）	2.8	
2	広東碗	瀬・美	10.2	7.5	5.6	
3	平縁碗	伊万里	8.8	3.6	5.7	見）鬼紋
4	皿	伊万里	13.2	7.8	4.0	見）コンニャク五弁花文、底）「酒屋」
5	角皿	伊万里	18.8	13.6	4.0	赤絵、焼き継ぎ
6	壺	瀬・美	6.5	2.5	2.5	上絵付け
7	碗	伊万里	7.2	3.6	5.9	
8	梅花鉢	三田焼	12.6	6.0	6.1	青磁釉
9	大皿	伊万里	28.4	16.4	6.8	針支え痕
10	水注	京・信	最大径 6.0	3.8	3.9	灰釉
11	碗		10.6	4.0	6.8	
12	壺	京・信	7.8	6.0	6.3	
13	皿	瀬・美	14.8	8.2	3.2	
14	油差	京・信	7.6	7.4	8.6	
15	油差	京・信	7.2	4.6	7.9	
16	小坏	中国	(6.6)	(2.0)	3.5	染付
17	おもちゃ碗		3.7	1.8	2.2	軟質施釉（透明釉）
18	片口鉢		17.0	6.0	11.0	
19	土鍋蓋		17.6		4.1	
20	壺		15.8	9.6	16.8	
21	植木鉢		17.6	14.6	13.4	白釉・鉄釉
22	風炉			(22.6)	(7.1)	
23	灯明皿		(10.2)	(5.0)	1.5	
24	灯明皿		11.2	5.0	2.3	
25	壺	越前		(13.6)	(7.8)	
26	鉢	越前	31.2	17.0	15.0	壺形、鉄釉
27	擂鉢	越前			(9.8)	擂目８本 /2cm
28	擂鉢	越前			(7.6)	擂目９本 /2.7cm
29	擂鉢	瀬・美			(4.6)	擂目９本 /1.5cm　鉄釉
30	擂鉢	越前		18.4	(10.0)	擂目 12 本 /3cm
31	擂鉢	唐津	30.8	17.4	16.0	擂目９本 /2cm　鉄釉
32	擂鉢		33.0	12.6	14.7	擂目 14/15 本 /2cm　鉄釉
遺構29						
1	碗	伊万里	10.0	3.8	5.3	外）コンニャク印刷
2	平縁碗	伊万里	10.5	3.8	5.0	外）矢羽紋
3	瀬戸碗	伊万里	10.8	4.6	6.0	
4	広東碗	伊万里	12.2	6.8	6.0	
5	広東碗	伊万里	11.7	6.3	6.9	
6	蕎麦猪口	伊万里	7.4	5.2	5.8	見込）手書き
7	大皿	伊万里	22.8	13.8	3.5	内）銅唐草紋、焼継
8	鉢	伊万里	24.0	11.2	11.8	青磁釉
9	刷毛目碗	唐津	10.0	4.4	7.1	内）打ち刷毛
10	灯明皿台	唐津	12.8	4.8	3.8	鉄釉
11	碗	唐津	11.4	5.0	7.2	外）梅紋、白土掛流し
12	大皿	唐津		10.4	(9.1)	絵唐津
13	壺	唐津			(16.8)	鉄釉
14	壺	唐津	(29.1)		(11.3)	絵釉・緑釉
15	植木鉢？	瀬・美	(22.6)		(5.1)	緑釉
16	天目碗	瀬・美	11.7		(6.0)	鉄釉
17	碗	瀬戸		4.6	(4.5)	白土掛縞
18	瀬戸碗	京・信	8.4	3.0	4.6	
19	筒碗	京・信	(9.8)		(5.0)	外）御紋
20	盤	中国？				象南三彩？
21	深鉢	越前	35.3	19.8	17.0	鉄釉、壺型
22	深鉢	越前	33.6	22.2	17.1	鉄釉、壺型
23	深鉢	越前	(36.8)	(22.8)	(20.7)	鉄釉、逆台形
24	擂鉢	越前			16.0	擂目 10 本 /24 cm
25	擂鉢	越前	(34.0)		(9.5)	擂目 12 本 /3 cm
26	擂鉢	越前	36.0	18.8	14.9	擂目 13 本 /3.3 cm
27	擂鉢	越前		(16.0)	(9.5)	擂目６本 /2 cm
遺構30						
1	灯明皿		(12.2)	(5.0)	2.6	
2	皿	伊万里	(11.2)	4.9	3.9	
遺構32						
1	碗	伊万里	(10.6)	(5.6)	7.0	
2	壺	唐津			(4.7)	鉄釉、内面格子叩き
遺構34						
1	土瓶		11.2	8.7	16.2	青緑釉
2	瓶じ碗	京・信	11.8	(4.2)	6.4	
3	腰錆碗	瀬・美	9.8	5.0	6.1	灰釉・鉄釉
遺構37						
1	瀬戸小碗	中国	(9.1)	(3.9)	4.7	染付、輪郭紋
2	灯明皿		(9.7)	(5.0)	2.1	
3	鉢	瀬・美		(12.8)	(1.6)	鉄釉
遺構40						
1	灯明皿		(10.4)		(1.7)	
遺構44						
1	碗	瀬・美	(11.6)		(2.5)	鉄釉
2	皿（向付）	唐津			(5.0)	絵唐津
3	土師皿				(1.3)	

第８表　近世陶磁器観察表２

No.	器種	産地	口径	底径	器高	その他
遺構 59						
1	碗	唐津		4.4	(2.6)	呉須
遺構 62						
1	端反鉢	伊万里	10.2	5.3	6.6	見）五弁花紋，底）「満福」
2	小碗	伊万里	5.7	2.7	4.0	
3	碗	伊万里	10.2	3.4	5.2	見）「壽」
4	皿	伊万里	(31.2)	13.0	7.5	底「太□成化年製」
5	広東碗	瀬・美		5.6	(2.9)	見）五弁花紋
6	天目碗	瀬・美	(12.6)		(6.9)	
7	碗	京・信	8.6	4.0	5.6	上絵付（松竹）
8	大皿	肥前	(31.2)	(13.0)	7.5	
9	土瓶		7.4		(8.3)	
10		越前			(5.5)	
11	擂鉢	越前			(4.5)	櫛目８本/2.5 cm
12	擂鉢	越前	(35.0)		(10.0)	櫛目 12 本/2.5 cm
13	砥石		直径 2.0	最大厚 0.6		土師質
遺構 63						
1	深鉢	越前		(16.8)	(11.2)	鉄釉，逆台形
遺構 65						
1	碗	唐津	11.6	4.8	7.7	絵唐津
2	碗	伊万里	9.8	4.4	6.7	外）コンニャク印刊
3	擂鉢	越前	32.4	(13.8)	13.2	櫛目９本/24 cm　鉄釉
4	五重の塔		底辺 2.0		4.6	軟質施釉，合わせ型
5	土鍋		最大径 3.4		5.2	
遺構 70						
1	碗	伊万里	(11.0)		(5.8)	外）一重網目紋
2	碗	唐津		4.5	(3.9)	鉄釉
3	灯明皿		9.6	3.0	2.1	
4	灯明皿		(9.2)	(3.0)	2.2	
5	甕	越前	(14.0)		(4.4)	
遺構 72						
1	碗	伊万里	(9.4)	4.9	6.2	底「太明年製」
2	皿	伊万里	(15.8)	9.2	2.9	
遺構 73						
1	瓢箪碗	伊万里	8.4	4.2	6.4	底「太明成化年製」
2	碗	伊万里	9.2	3.5	6.1	見）手描き五弁花紋
3	天目形碗	伊万里	(10.8)		(5.1)	白磁
4	色絵端反碗	瀬戸系	9.6	3.5	5.1	見）鬼鹿紋
5	涂碗	伊万里	2.8	最大径 9.9	9.0	外）コンニャク印刊
6	手塩皿	伊万里	最大径 8.6	5.3	2.2	見）型紙摺り，型打ち成形，漆継ぎ，赤切り銘工。
7	平椀小碗（紅猪）	伊万里	6.8	2.3	3.3	染付，上絵付
8	中皿	伊万里	13.8	7.2	4.3	見）手描五弁花紋，焼継ぎ
9	蓋	伊万里	10.3	鈕径 4.2	3.0	
10	端反碗	瀬戸系	9.4	3.8	4.8	見）花紋
11	皿	瀬戸系	13.8	8.2	3.3	見）雲龍紋
遺構 76						
1	碗	伊万里	(8.8)		(4.5)	外）コンニャク印刊
2	色絵碗	伊万里		(4.4)	(3.9)	赤絵
3	碗	唐津	11.0	4.8	7.3	内外）刷毛目

No.	器種	産地	口径	底径	器高	その他
遺構 78						
1	水滴	伊万里	長径 (6.0)	短径 (5.5)	3.6	
2	急須			5.0	5.2	印有り
遺構 82						
1	瓢箪碗	伊万里	9.2	(5.6)	6.3	底「□□□製」
2	碗	伊万里	9.4	4.2	7.3	外）一重網目紋
3	色絵碗	伊万里	11.4	4.8	6.2	
4	色絵碗	伊万里	10.4		(4.8)	
5	碗	伊万里	10.8	4.0	6.1	白磁
6	小坏	伊万里	6.4	2.4	4.2	白磁
7	端反碗	伊万里	8.6	3.4	5.4	底「大明」
8	中皿	伊万里	20.0	8.0	4.5	菊絵紋
9	鉢	伊万里	(23.4)	(10.0)	9.4	
10	鉢	伊万里	(17.4)		(6.1)	外）一重網目紋
11	菊形中皿	伊万里	21.1	7.5	4.7	
12	菊形中皿	伊万里	(21.3)	8.2	5.1	
13	菊形中皿	伊万里		8.1	(4.0)	
14	皿	唐津	12.8	4.2	2.8	絵唐津　見込蛇の目釉剥ぎ
15	皿	唐津	(13.2)	4.4	3.2	絵唐津　見込蛇の目釉剥ぎ
16	皿	唐津	13.4	4.2	3.2	絵唐津　見込蛇の目釉剥ぎ
17	引器手碗	唐津	12.4	5.8	8.2	
18	引器手碗	唐津	11.2	5.0	7.8	
19	引器手碗	唐津	11.0	(4.6)	7.8	鉄釉
20	色絵碗	京	11.2	4.4	6.1	別印「羽倉」
21	徳利	唐津		8.2	(18.7)	鉄釉
22	擂鉢	越前	(31.4)		(4.9)	櫛目８本/24 cm
23	灯明皿		9.0	3.6	1.9	
24	灯明皿		10.9	4.0	2.1	
25	灯明皿		(9.8)	4.2	2.4	ロクロ赤切り
26	灯明皿		(11.1)	5.0	2.4	ロクロ赤切り
遺構 83						
1	碗	京・信	(10.6)	4.9	7.7	鉄絵
2	皿	唐津	(20.2)	(7.2)	5.1	胴毛目，見込蛇の目釉剥ぎ
3	小壺	瀬・美	3.3	5.9	6.1	鉄釉
4	灯明皿		10.0	2.0	1.8	
5	灯明皿		12.0	5.0	1.7	
遺構 86						
1	碗	伊万里	10.4	4.2	6.6	底）「大明」
2	碗	伊万里	11.0	5.0	6.3	底「宣明年製」
3	碗	伊万里	(11.0)		(4.9)	
4	碗	伊万里	10.8	4.0	7.0	青磁釉
5	碗	伊万里	8.6	3.4	5.6	見）五弁花紋
6	皿	伊万里	(14.8)	(8.2)	(3.6)	
7	皿	伊万里	22.0	9.4	5.5	脚付き
8	碗	唐津	10.4	(5.0)	7.6	鉄釉
9	碗	唐津		(4.4)	(5.0)	
10	瀬戸皿	唐津	(14.8)		(2.8)	
11	皿	唐津		3.4	(2.0)	
12	小碗	瀬・美	9.1	3.6	5.2	鉄釉

第９表　近世陶磁器観察表３

№	器種	産地	口径	底径	器高	その他
13	碗	京・信		4.4	(5.0)	
14	碗	瀬・美		5.4	(6.0)	灰釉・鉄釉
遺構 88						
1	腰張碗	伊万里	(8.8)	(5.5)	6.3	
2	色絵碗	伊万里	(9.4)		(4.2)	
3	鉢	伊万里	(16.4)		(7.1)	
4	端反小坏	伊万里	6.4	2.7	4.3	
5	端反坏	伊万里	7.8		(6.6)	
6	香炉	伊万里	10.0	6.5	8.2	
7	京風碗	唐津	(10.4)	5.3	7.2	刷毛目「清水」
8	碗	唐津		4.8	(4.1)	
9	碗	瀬・美	11.0	4.8	6.3	染付，陶胎
10	灯明皿		9.5	(5.0)	1.9	
11	灯明皿		9.6	(2.0)	1.9	
遺構 89						
1	碗	伊万里	10.4	4.2	7.1	外）一重網目紋
2	灯明皿		(10.0)	(4.6)	2.1	
3	擂鉢	越前			(5.6)	擂目 10 本 /2.6 cm
4	擂鉢	越前			(9.1)	擂目 8 本 /2.8 cm
5	大鉢	伊万里	(35.3)		(9.7)	
遺構 91						
1	碗	伊万里	10.8	5.6	7.5	
2	碗	伊万里	(9.2)		(5.6)	外）一重網目紋
3	小皿	伊万里	15.0	(9.0)	3.2	
4	竹節手碗	唐津	14.4	5.8	8.2	
5	壺	唐津			(4.5)	二彩，胴毛目
6	灯明皿		(11.5)	(4.4)	2.2	
7	灯明皿		(9.5)	(3.6)	1.8	
8	菊形小皿	伊万里	(11.2)	(7.2)	4.4	
遺構 92						
1	溝縁皿	唐津	13.8	5.2	3.8	灰釉・砂目
2	擂鉢	越前			(8.8)	擂目 11 本 /2.9 cm
3	土師皿		9.4		2.1	
4	土師皿		10.2		2.3	
5	土師皿		10.0		2.7	
6	土師皿		10.0		2.4	
7	土師皿		(10.0)		2.3	
8	灯明皿		10.2		2.8	
遺構 93						
1	碗	伊万里	9.8	(4.8)	7.0	
2	壺	美濃	(7.0)		(2.8)	志野釉
3	茶壺	唐津？	(13.4)		(11.0)	鉄釉・灰釉
遺構 94						
1	碗	伊万里		(5.2)	(4.1)	底「太明成」
2	水注	瀬・美	(3.2)	4.6	7.5	鉄釉・鉛釉
遺構 95						
1	碗	伊万里	(9.8)	4.0	4.8	外）二重網目紋
2	碗	伊万里	(9.8)	3.9	4.8	底「太明成」，くらわんか手
3	碗	伊万里	10.4	4.0	6.3	くらわんか手
4	端反碗	伊万里	(10.0)	(4.2)	5.0	
5	平縁碗	美濃	7.8	2.8	5.5	
6	蹄手碗	瀬・美	(11.8)	4.6	6.0	黄釉・緑釉
7	蹄手碗	瀬・美	12.2	4.9	6.1	黄釉・緑釉
8	色絵筒碗	瀬・美？		(5.2)	(5.0)	長石釉
9	小皿	唐津	(15.8)	5.1	4.5	砂目痕
10	大皿	瀬・美		7.0	(3.5)	重ね焼き痕　灰釉
11	灯明皿	信楽	11.4	4.2	2.3	
12	擂鉢	越前	(14.6)		(9.5)	擂目 13 本 /2.8 cm
13	壺	越前	(47.7)		(34.9)	
14	壺	越前	(22.0)		(5.9)	
15	壺	越前	(18.0)	(16.0)	27.5	
16	鉢	越前	(18.0)	(16.0)	14.3	
17	浅鉢	越前	(28.8)	(21.0)	6.7	逆台形
遺構 96						
1	大皿	伊万里	(24.6)	(15.8)	3.8	内）墨弾き
2	仏飯器	伊万里	8.2	4.0	5.7	
3	色絵竹節手碗	唐津	12.0	5.0	7.8	上絵
4	竹節手碗	唐津	12.0	(5.0)	8.1	
5	擂鉢	越前	(33.6)		(5.8)	擂目 10 本 /2 cm
6	擂鉢	越前	(34.0)		(12.7)	擂目 10 本 /2 cm
遺構 99						
1	皿	唐津	(12.8)	4.6	3.6	青緑釉
遺構 100						
1	竹節手碗	唐津	(10.0)		(6.1)	
4	青磁部大皿	美濃	26.4	10.8	6.0	
2	灯明皿		(8.1)	(2.8)	1.7	
3	灯明皿		9.1	3.0	2.0	
遺構 102						
1	天目形碗	伊万里	(10.8)	4.5	7.3	
遺構 109						
1	碗	伊万里	9.7	4.5	7.5	
2	碗	伊万里		5.0	(2.5)	底「宮殿年製」
3	碗	伊万里		(4.8)	(2.3)	
4	竹節手碗	唐津		5.0	(3.9)	
5	灯明皿		(12.4)	5.0	2.1	
6	灯明皿		10.0	3.8	1.9	
7	灯明皿		(10.0)	(5.0)	1.7	
8	擂鉢	越前	18.0	9.4	6.0	擂目 11 本 /2 cm
9	擂鉢	越前			(3.7)	
遺構 110						
1	皿	伊万里	(12.8)	(5.4)	2.8	
2	鉢	唐津	(14.2)	(11.0)	7.8	朝鮮唐津釉（瀬戸？）
3	深鉢	越前	(35.6)	(21.4)	18.3	錆釉，逆台形
遺構 112						
1	碗	伊万里	11.6	5.0	6.4	見）「寿」
2	広東碗	伊万里	9.8	5.0	4.9	見）見込紋，焼き継ぎ
3	碗	伊万里	8.6	3.6	4.3	
4	碗	伊万里	8.6	3.2	5.8	見）松竹梅円形紋

第10表　近世陶磁器観察表4

No.	器種	産地	口径	底径	器高	その他
5	碗	伊万里	11.6	4.6	7.0	見）コンニャク印刻。青磁釉
6	色絵平縁小碗	伊万里	8.2	2.8	4.0	口縁に金
7	平縁碗	伊万里	9.8	3.6	4.8	
8	碗	伊万里	8.4	3.2	5.4	見）火炎紋
9	碗	伊万里	8.8	3.4	6.0	見）源氏香紋，外）青磁釉
10	筒碗	伊万里	(7.6)		(5.6)	外）青磁釉
11	筒碗	伊万里	(7.8)		(5.5)	
12	色絵端反碗	瀬戸？	9.2	3.6	4.7	見）花弁状紋
13	端反碗	瀬・美	10.8	3.9	5.8	
14	小皿	伊万里	25.0	17.0	3.5	見）松竹梅文
15	鉢	伊万里	19.6	9.4	7.9	青磁釉。高台内墨書（不明）
16	盞	伊万里	(8.7)	総径3.6	2.4	見）松竹梅円形紋。
17	脚付杯	伊万里	7.4	2.5	5.6	
18	碗	京信	9.4	4.4	6.8	
19	油注	京信	(9.3)	6.6	11.8	
20	壺	唐津	(19.6)		(6.5)	鉄釉
21	行平蓋		18.6	5.0	5.0	灰釉・鉄釉・飛釉
22	天神平飛像		最大幅5.6	最大厚2.7	現存高5.1土人形。型合わせ	
23	徳利		19.8	18.2	18.1	
24	擂鉢	越前	35.6	17.8	14.3	擂目13本/2.6cm
遺構116						
1	腰張碗	伊万里	(8.6)	4.6	5.5	底「宣明年製」
2	碗	伊万里	(8.4)	3.6	5.3	
3	筒碗	伊万里	8.3		(5.4)	
4	蓋茶碗1	伊万里	7.0	4.8	5.3	底「清福」。焼き締め
5	天目型鐘碗	伊万里	(11.8)	5.5	6.9	
6	段重	伊万里	16.0	10.6	5.6	
7	鉢	伊万里		(8.0)	(8.9)	見）荒磯紋
8	鳴海津碗	唐津			(6.7)	
9	刷毛目鉢	唐津	16.2	6.9	8.4	
10	行平蓋		最大径14.0	総径2.2	3.7	鉄釉・緑釉・飛釉
11	行平		15.0	5.8	7.0	鉄釉・飛釉
12	擂鉢	越前	35.0	19.2	15.9	擂目10本/2.5cm
13	壺	越前	19.4	18.6	27.8	鉄釉。ロクロ目
14	壺		8.2	最大径11.0	4.2	総径2.0 鉄釉・緑釉
15	土瓶		11.8		(11.3)	青緑釉
16	鉢		20.4	8.3	9.6	灰釉・青緑釉　泥洗か
遺構117						
1	擂鉢	越前	26.6	11.4	12.0	擂目6本/20cm
遺構118						
1	平縁碗	伊万里	9.2	3.7	5.4	見）荒波紋
2	小碗	伊万里	8.8	3.4	4.2	見）「福」
遺構122						
1	碗	伊万里	8.9	4.7	6.5	
2	碗	伊万里	8.4	4.4	6.4	
3	碗	伊万里	(10.8)	(5.4)	5.8	
4	筒碗	伊万里	8.0		(5.5)	染付，赤絵
5	梅花皿	伊万里	(13.6)		(2.3)	型打ち・焼き締め
6	皿	伊万里	13.5	5.5	3.1	

No.	器種	産地	口径	底径	器高	その他
7	小皿	中国	(8.0)	3.7	2.7	
遺構127						
1	碗	伊万里	(9.2)	4.8	7.4	
2	桃川碗	唐津	12.2	5.5	7.6	
3	小杯	唐津	7.6	3.2	3.9	
4	溝縁皿	唐津	13.4	4.6	3.6	
5	溝縁皿	唐津	13.3	4.6	4.3	
6	灯明皿		9.8	4.0	1.8	
7	灯明皿		8.0	4.0	2.3	
8	擂鉢	越前			(5.9)	擂目8本/2.4cm
9	擂鉢	越前			(4.6)	擂目10本/3cm
遺構129						
1	碗	伊万里	(9.4)	4.2	6.3	
2	碗	伊万里	(9.6)	4.2	7.1	外）一重網目紋
3	灯明皿		9.6	3.1	2.2	
遺構133						
1	土師皿		9.2		1.9	
2	土師皿		9.4		2.3	
3	土師皿		9.7		2.1	
遺構138						
1	小丸巻柄	唐津	3.6		(8.2)	鉄釉
遺構145						
1	八角鉢	伊万里	(14.0)	(6.4)	7.5	
2	端反杯	伊万里		(3.2)	(5.1)	白磁
3	火鉢	瀬・美		(4.6)	(1.6)	緑釉
4	灯明皿	信楽	(11.4)	(4.8)	1.9	
5	灯明皿		(11.0)	3.0	1.8	
遺構154						
1	小坏	伊万里	7.0	3.0	4.8	
2	花形小皿	伊万里		2.5	1.2	
3	碗	伊万里	(11.4)	4.8	6.7	
4	只器手碗	唐津	13.2	5.7	7.4	
5	灯明皿		9.0	3.0	2.0	
6	灯明皿		(10.6)	(6.0)	1.9	
7	瓦質火鉢		(36.6)	(32.2)	20.0	
遺構156						
1	小皿	伊万里	13.6	8.4	3.0	見）コンニャク印刻五弁花紋
遺構157						
1	皿	唐津	11.1	3.8	3.9	見）石刷毛
遺構179						
1	碗	伊万里	10.4	4.8	6.3	底「大明成化年製」
2	腰張碗	伊万里	8.0	4.3	6.2	
3	小皿	伊万里	22.4	13.2	3.9	
4	壺	伊万里	口径9.1	胴径18.8	(7.5)	
5	皿	伊万里	14.0	8.9	2.4	
6	端反杯	中国	(9.2)	4.1	4.8	染付，輪花紅
7	端反杯	中国	(8.9)		(3.8)	染付，輪花紅
8	端反杯	中国	(6.2)		(3.2)	染付
9	菊形向付	美濃			4.7	御深井

第 11 表　近世陶磁器観察表５

№	器種	産地	口径	底径	器高	その他
10	菊形向付	美濃			4.9	御深井
11	皆器手碗	唐津	(12.5)	5.1	8.6	
12	碗	唐津	(9.8)	4.4	6.7	船籾
13	壺	越前		11.6	3.6	
14	灯明皿		8.6	(4.0)	2.4	
15	灯明皿		9.0	4.0	2.0	
遺構 182						
1	碗	伊万里	9.1		(6.0)	
2	碗	伊万里	9.2		(5.9)	
3	碗	伊万里	(11.2)	(4.8)	6.9	
4	皿	伊万里		5.5	(2.6)	
5	皿	伊万里		4.7	(2.0)	
6	碗	瀬・美	(12.4)	5.5	7.8	灰釉
7	梅花皿	瀬・美	14.0	6.4	3.5	志野白磁写し
8	京風碗	唐津		(5.4)	3.2	高台内染書）刑部「清水」
9	灯明皿		11.0	4.0	2.9	
10	擂鉢	越前	(27.6)		(9.0)	擂目８本 /2.3cm
11	擂鉢	唐津		(32)	(3.6)	擂目７本 /2cm
遺構 186						
1	皿	唐津	12.8	4.6	3.0	砂目痕
遺構 187						
1	碗	京・信	(8.6)	(3.6)	6.4	
2	丼じ碗	京・信	(9.0)	3.3	5.1	鉄絵　見）ハマ痕
3	おとし蓋	京・信	11.0	(5.6)	2.7	
4	角皿	瀬戸			2.3	型打ち
5	丼じ板				(4.6)	軟質施釉。
6	灯明皿		10.2	5.0	1.5	
7	鉢	越前	(12.4)	10.6	7.1	錆釉
8	浅鉢	越前	(25.6)	(17.2)	8.6	錆釉。逆台形
9	浅鉢	越前	(35.4)	8.4	8.4	錆釉。逆台形
10	深鉢	越前	(31.2)	(20.2)	16.9	錆釉。変形
11	擂鉢	越前	(29.4)		(7.7)	擂目９本 /1.9cm　錆釉
遺構 200						
1	皿	瀬・美	14.2	8.0	3.4	
遺構 201						
1	碗	伊万里	(10.0)	(5.0)	6.8	
2	皿	伊万里	13.0	4.8	3.0	
3	菊形大皿	伊万里	24.6	8.0	5.9	
遺構 225						
1	碗	伊万里	(10.0)	(3.6)	5.7	底「大明年製」
2	色絵半球碗	京	9.5	3.5	5.9	見）三足ハマ痕を隠す色絵
3	深鉢	越前	28.4	15.2	16.0	錆釉。逆台形
遺構 227						
1	碗	伊万里	(9.4)	3.8	6.5	
2	神酒徳利	伊万里		2.3	(6.4)	
3	浅鉢	越前	(36.4)		(5.8)	錆釉。逆台形。口縁外折
遺構 230						
1	小杯	伊万里	(4.2)	2.2	3.4	
2	端反小杯	伊万里	(6.4)	3.2	5.1	
3	皆器手碗	唐津	(10.8)	4.6	7.6	緑釉掛け流し
4	皿	唐津	(20.6)	8.0	4.4	鉄釉・銅緑釉
5	菊形小皿	伊万里	21.2	6.9	4.1	
6	天目茶碗	唐津	(12.4)		(5.5)	鉄釉
7	灯明皿		9.0	3.4	2.0	
8	灯明皿		(9.2)	3.4	2.1	
9	灯明皿		(10.6)	4.0	2.2	
10	擂鉢	越前			(10.3)	擂目８本 /2.3cm
遺構 232						
1	瓶張碗	伊万里	9.2	6.5	6.0	
2	香炉	伊万里	10.2	6.9	7.4	
3	端反小杯	伊万里	(7.2)	3.2	4.3	
4	碗	伊万里？	(11.2)		(5.8)	白磁
5	海鼠徳口	伊万里	(7.4)	4.0	5.1	底「大明年製」
6	鉢	伊万里		(7.6)	(7.3)	瑠璃釉
7	碗	瀬・美	10.0	5.0	6.1	鉄釉
8	小碗	唐津	6.8	3.3	4.8	船籾
9	鉢	京・信	7.8	4.0	4.4	
10	皿	中国	13.2	7.5	2.7	染付
11	擂鉢	越前	(36.2)	(15.0)	16.1	擂目９本 /1.8cm
12	擂鉢	越前		16.8	(7.5)	擂目 10 本 /2cm
13	甕	越前	(35.6)		40.2	錆釉
14	大甕	越前	(42.0)	18.0	56.9	
15	浅鉢	越前	(31.6)	21.6	7.0	鉄釉。逆台形
16	深鉢	越前	(31.4)	(19.6)	17.6	変形
遺構 233						
1	深鉢	越前	(36.4)		(16.5)	鉄釉
2	段重蓋	伊万里	最大径 (10.1)	9.0	3.1	
3	碗	唐津	(11.0)	(4.8)	7.2	外）刷毛目。内）石刷毛
4	灯明皿	越前	(11.0)	(6.0)	1.4	
5	土師皿		10.0	3.0	2.1	
6	色絵角皿	信楽？	13.4	最大径 (13.8)		長石釉。上絵
遺構 234						
1	碗	唐津	(8.8)	(4.5)	5.3	鉄絵　赤絵茶
2	梅花皿	唐津	(12.6)	4.6	3.8	船籾
遺構 242						
1	碗	唐津	10.6	4.3	7.3	
遺構 302						
1	合子蓋	伊万里		(6.4)	1.5	
2	土鍋	越前	(20.4)	(7.2)	9.0	
3	梅花形浅鉢	越前	(22.4)	(16.8)	7.7	錆釉

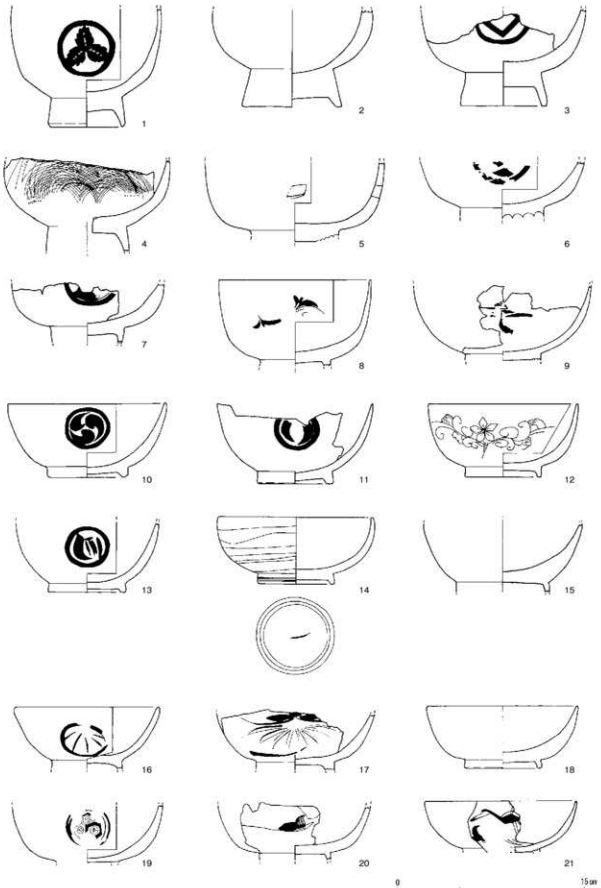
第２項　木製品

漆塗椀（第48図１～第50図56）　31遺構から83点出土している。時期は、19世紀代が約４割、17世紀代（後半が主）が３割で、18世紀代は数点のみである。器形のある程度分かるものを中心に、A～Kまでの11種に分類した。分類基準は、①口径と器高の比率、②器高、③口径と高台高の比率、④口径でありこれによりA～E・H類を分類した。その他に、器形の部分的特徴や用途（口縁部の端反・体部の隆帯・厚みなど）から、F・G・I～K類を分類、または細分した。以下器種毎に述べる。

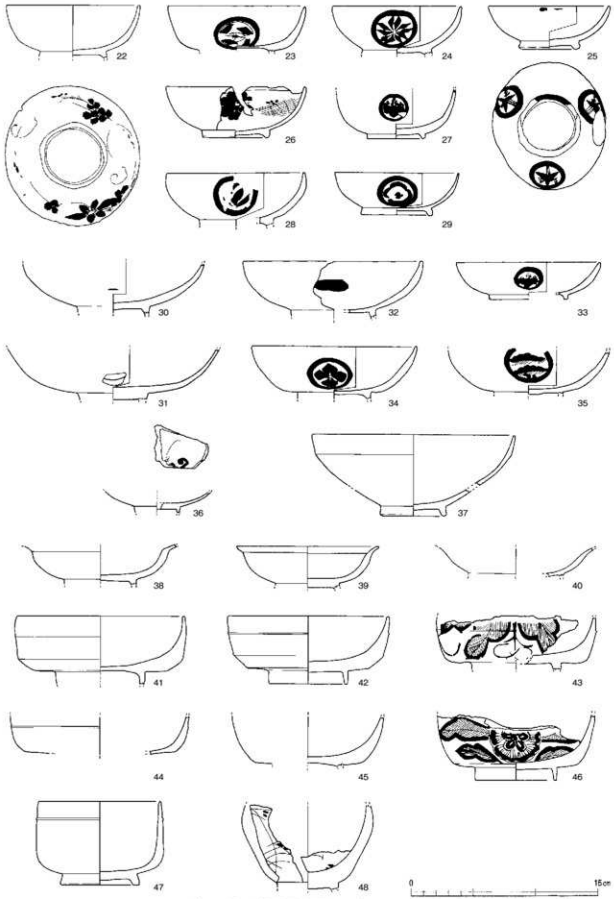
A類（１～９）は、口径と器高の比率が約２：１以上。高台部の厚いA－１（１～３）と薄いA－２（４～９）に分かれる。高台部が高く、体部が深いのが特徴である。飯椀に相当する。B類（10～15）は、口径と器高の比率が２：１前後。体部が薄いB－１（10～14）と体部が厚いB－２（15）に分かれる。C類（16～21）は、口径と器高の比率が２：１～３：１の間で、器高が５cm以上の高いもの。体部が薄いC－１（16・17・19～21）と体部が厚いC－２（18）に分かれる。D類（22～29）も口径と器高の比率が２：１～３：１の間だが、器高が約５cm未満と低いもの。B～D類は、汁椀に相当する。E類は口径と器高の比率が約３：１以下で、高台径／口径が約0.5cm以下のもの。口径が大きいE－１（30～32）、口径が小さいE－２（33～35）、口径が極端に小さいE－３（36）、器高が大きいE－４（37）に分かれる。杯・盃・皿などに相当する。F類（38～40）は、口縁部が外湾する端反椀である。すべて、内外面とも赤色である。G類（41～46）は、体部に隆帯（カツラ）が巡るもの（41～44）と無いもの（45・46）に分かれる。体部は、高台部から直線的に開き、その後ほぼ垂直に立ちあがる。下方の稜線は低く高台付け根とほぼ同じである。平椀に相当する。43・46は、特徴的な芙蓉文を施す吉野椀と呼ばれるものだと考えられる。H類（47・48）は、口径と器高の比率が約1.5：１前後で、口径が小さく体部が深いものである。壷椀に相当する。48は、天目形を呈する。I類（49～53）は、高台部裏に漆絵が描かれるものを主とする蓋である。口径が小さいI－１（49～52）と口径が大きいI－２（53）に分かれる。J類（55・56）は、腰高に相当する。K類（54）は、器高が低い高台の無い盆かと考えられる。

上塗りは、17・19世紀代とも外面黒色内面赤色が約８割を占め、１割弱が内外とも赤色である。内外とも黒色も１割前後だが、19世紀のほうが多くなっている。漆絵の使用色は、赤・黄・銀・金色がある。赤と黄は両時期にあるが、銀色は18世紀後半以降にしかない。描かれる場所は、外面がほとんどだが、36の盃だと考えられるものと54の盆には、内面に描かれる。また、14の高台裏には文字かとも考えられるものがある。漆絵の丸紋系は、17・19世紀ともあるが19世紀が若干多い。また、全面に植物文を描くものも両時期にあるが、高台裏にまで描くのは19世紀のみである。文様の内容は（第12表）、植物が約半数を占め、文様・図象、器材、動物などがある。時期的にみると、A～E類は両時期にあるが、G類の平椀とH類の壷椀は主に19世紀である。F類の端反椀は17世紀のみである。

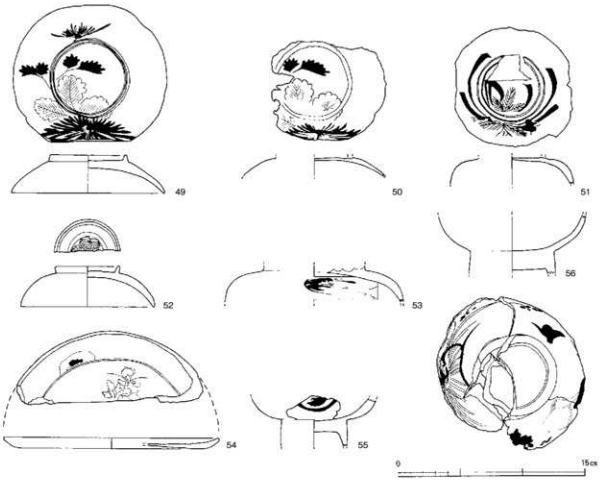
箸（第51図57～第52図93）　平面形により、全体が同じ太さの寸胴箸、最大径を一端に持ち片方の端が細い片口箸、両端が細い両口に大きく分けられる。出土数の約５割が寸胴箸で、４割が片口箸、１割が両口箸である。長さは、16～28cmまでり、21.7～23.6cmで約６割弱、20.6～26cmで約８割を占める。16～17cm、21.7～22.8cm、23～23.6cm、24～24.5cm、25.5～26cmに集中域がある。平均は22.6cmである。88～93は、断面正方形の16.5cm前後の短い箸で、92・93は、漆塗りである。茶事で使用される箸は寸胴箸であり、片口箸はケの場面すなわち日常で、両口箸はハレの場面すなわち特別な日などで使用される箸だとも言われている。



第48図　近世漆器実測図１　（S＝1／3）



第49図　近世漆器実測図2　（S＝1／3）



第50図　近世漆器実測図３　（Ｓ＝１／３）

第12表　漆器上塗り一覧表

		（上塗り）				（漆絵）								
種類	漆器	赤、黒	黒、黒	赤、赤	不明など	あり	なし	不明	外面のみ	内外とも	内面のみ	丸紋（○）	丸紋（◎）	全面
点数	96	68	13	11	4	71	16	1	67	0	4	31	2	11
割合（%）		71	13．5	11．5	4	74								

漆絵使用色	黄	銀	金？
点数	13	5	3
時期	17世紀後半～19世紀	18世紀後半～19世紀	19世紀代

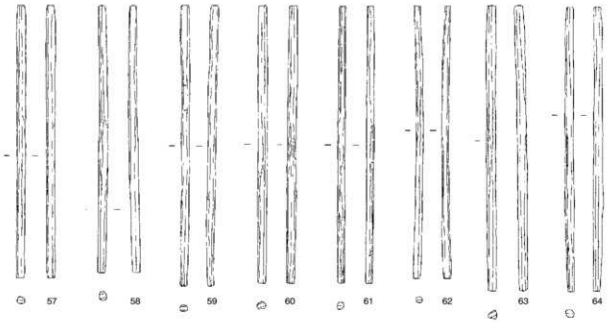
漆絵種類	植物	文様・図象	器物	動物	蓮茎文	？
点数	31	7	5	5	3	20
割合（%）	44	10	7	7	4	28

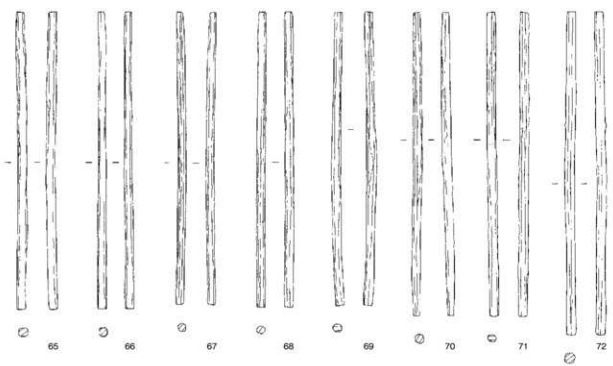
漆絵　植物	31点											漆絵　器材	5点	
種類	沢瀉	梅	薄？	松	桐	菊	木瓜	芙蓉	葵	柊	不明	種類	扇	分銅
点数	3	3	3	2	2	2	2	2	1	1	9	点数	4	1

漆絵　文様・図象	7点						漆絵　動物	5点			
種類	引両	亀甲	巴	角	花菱	目結	種類	鶴	亀	蜻蛉	海老
点数	2	1	1	1	1	1	点数	2	1	1	1

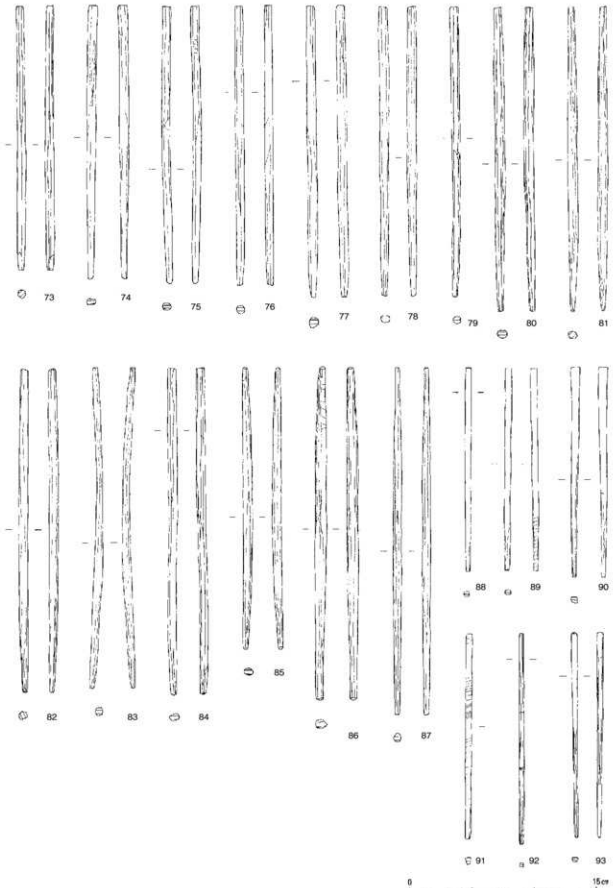
第13表　近世漆器観察表

検図番号	遺構番号	時期	器種	内面	外面	上塗						法量(cm)				備考
						場所		漆絵				口径	器高	高台径	高台高	
								色	種類							
48-1	88	17世紀後半～18世紀前半	A-1	赤	黒	外	3	赤	植物(?)	○	(11.8)	(9.5)	6.0	2.3		表裏刷毛
48-2	43	?	A-1	?	?	外					(12.5)	(7.7)	7.8	3.1		表裏刷毛
48-3	不明		A-1	赤	黒	外	3	赤	隅立て角	○	(13.0)	(7.7)	8.8	2.7		
48-4	182	17世紀後半	A-2	赤	黒	外	全面	黄?	植物(蔓?)		(13.0)	(7.0)	(6.5)	(2.0)	高台に孔あり	
48-5	62	19世紀	A-2	赤	黒	外	2	赤	三つ引き	○	(14.1)	(8.3)	(8.6)	(0.9)	体部に孔あり	
48-6	304	19世紀	A-2	赤	黒	外	3	赤	?	○	(13.0)	(4.5)	(6.6)	(0.8)		
48-7	201	17世紀後半	A-2	赤	黒	外	3	黄?	?	○	(12.0)	(4.7)	(5.5)	(1.3)	歪みあり	
48-8	96	18世紀後半	A-2	赤	黒	外	対角の位置に別文様	赤、銀	植物	絵	12.0	(6.9)	(5.6)	(0.5)		
48-9	96	19世紀	A-2	赤	黒	外		赤	植物?	絵?	(14.0)	(6.0)	6.0	(0.5)		
48-10	110	19世紀	B-1	赤	黒	外	2	赤	石三つ巴	○	12.5	6.0	6.4	0.9		
48-11	82	17世紀後半	B-1	赤	黒	外		赤	?	○	12.3	6.4	6.0	1.0		
48-12	62	19世紀	B-1	赤	黒	外	全面	銀	植物		11.8	5.9	6.0	0.9		
48-13	304	19世紀	B-1	赤	黒	外	2	赤	?	○	(11.2)	(5.6)	6.1	0.7		
48-14		17世紀中葉	B-1	赤	赤	無					12.4	5.4	6.1	0.9	高台裏に墨文字?	
48-15	包含層		B-2	赤	黒	外		赤	?		(12.4)	(5.5)	(7.4)	(0.6)		
48-16	27	19世紀中葉	C-1	赤	黒	外		赤	?	○絵	11.4	(5.0)	(5.6)	(0.7)		
48-17	112	19世紀	C-1	赤	黒	外		赤、黄	植物?	絵	(12.4)	(4.5)	(6.2)	(0.6)		
48-18	73	19世紀	C-2	赤	黒	無					11.9	5.0	6.1	0.7		
48-19	110	19世紀	C-1	赤	黒	外		赤	三つ盛り亀甲	○絵	(11.8)	(4.5)	(5.0)	–		
48-20	95	19世紀	C-1	赤	黒	外		銀	亀	絵	(11.5)	(4.0)	(5.4)	(0.6)		
48-21	182	17世紀後半	C-1	赤	黒	外		赤	鶴、亀?	絵	12.0	(4.1)	(6.0)	–		
48-22	179	17世紀後半	D	赤	黒	外	全面	赤	植物		10.8	(4.3)	(5.4)	(0.6)		
48-23	トレンチ		D	赤	黒	外		赤	瓦合わせ三つ巴	○	10.9	(3.7)	(5.8)	–		
48-24	230	17世紀後半	D	赤	黒	外	3	赤	?	○	10.2	(3.9)	(5.5)	(0.4)		
48-25	230	17世紀後半	D	赤	黒	外	3	赤	立ち沢潟	○	8.8	3.5	4.8	0.7		
48-26	62	19世紀	D	赤	黒	外	全面	赤、黄、銀	植物		11.0	4.1	5.3	0.6		
48-27	包含層		D	赤	黒	外		赤?	五三桐	○	(9.4)	(3.8)	4.6	0.4		
48-28	62	19世紀	D	赤	黒	外	2?	赤	植物?	○	10.9	(4.3)	(5.8)	(0.6)		
48-29	トレンチ		D	赤	黒	外	3	赤	木瓜	○	9.8	3.4	5.6	0.6		
48-30	122	17世紀後半	E-1	赤	黒	外		赤	?	?	(14.2)	(3.9)	5.8	(0.5)	歪みあり	
48-31	122	17世紀後半	E-1	赤	黒	無					(16.6)	(4.1)	5.5	(0.6)		
48-32	127	17世紀後半	E-1	赤	黒	外		赤	?	絵?	14.2	(4.6)	(6.6)	(0.7)		
48-33	179	17世紀後半	E-2	赤	黒	外		赤	桐	○	14.0	3.0	6.2	0.4		
48-34	82	17世紀後半	E-2	赤	黒	外	2	赤	花菱?	○	(13.0)	(4.2)	(5.5)	(0.6)	歪みあり	
48-35	147	19世紀	E-2	赤	黒	外		赤	二階松	○	(12.6)	(3.5)	(5.4)	(0.2)		
48-36	26	19世紀中葉～近代	E-3	赤	赤	内		金	?	絵?	(8.2)	(1.7)	(3.8)	(0.5)		
48-37	62	19世紀	E-4	赤	赤	無					18.0	(6.5)	5.2	0.8		
48-38	182	17世紀後半	F	赤	赤	無					(12.0)	(3.2)	(5.6)	(0.4)		
48-39	182	17世紀後半	F	赤	赤	無					11.2	(3.3)	(5.0)	–		
48-40	包含層		F	赤	赤	無					(12.8)	(2.0)	–	(0.2)		
48-41	4	19世紀	G-1	黒	黒	無					13.4	(5.5)	(7.0)	(1.0)		
48-42	28	19世紀中葉	G-1	赤	黒	無					12.7	5.4	6.3	1.1		
48-43	包含層		G-1	赤	黒	外	全面	赤	笑窪		(12.5)	(4.2)	(7.0)	(0.5)		
48-44	127	17世紀後半	G-1	赤	黒	無					(14.0)	(3.1)	–	–		
48-45	63	19世紀前半	G-2	黒	黒	無					(11.8)	(4.0)	–	–		
48-46	不明		G-2	黒	黒	外	全面	赤	笑窪		(12.4)	(3.1)	6.4	1.0		
48-47	73	19世紀	H-1	赤	赤	無					8.7	6.7	6.2	0.9		
48-48	29	19世紀中葉	H-2	赤	黒	外	全面	赤、黄	植物(蔓?)		10.2	(6.7)	(4.8)	(0.6)		
50-49	34	19世紀～近代	I-1	黒	黒	外、高台裏	全面	黄?	菊		12.1	3.1	6.0	0.8		
50-50	4	19世紀	I-1	黒	黒	外、高台裏	全面	黄か金	菊		(11.0)	(1.4)	(7.0)	–		
50-51	カクラン		I-1	赤	黒	外、高台裏	全面	黄?	松、蛇籠		(9.7)	(2.3)	–	–		
50-52	112	19世紀	I-1	赤	黒	高台裏		金	菱	○	10.5	3.2	5.1	0.5		
50-53	112	19世紀	I-2	赤	黒	外		黄?	海老?	絵	(14.0)	(3.3)	(9.0)	(0.4)		
50-54	包含層		K	黒	新落	内		赤、黄	植物(?)	絵	17.0	0.9	–	–		
50-55	包含層		J	赤	黒	外		赤	水辺?	○	(9.8)	(3.8)	(5.2)	(2.1)		
50-56	82	17世紀後半	J	赤	黒	外	全面	赤	蓮華文		(11.6)	(4.6)	(6.6)	(1.8)	歪みあり	
	88			赤	黒	無					(10.2)	(2.1)				
	62	19世紀		赤	黒	外	2?	赤	三つ引き	○	(10.9)	(3.4)	(6.1)	(0.8)		
	304	19世紀		赤	黒	外		赤	?		(11.8)	(4.1)	(6.1)	(1.0)		
	28	19世紀中葉		黒	黒	無					(12.0)	(4.3)	(7.0)	(0.3)		
	201	17世紀後半		赤	黒	外		赤	?		(11.0)	(2.9)	5.4	0.8		
	147	19世紀		赤	黒	外	3?	赤、黄	梅	○	(12.4)	(5.8)	(5.8)	(0.5)		
	112	17世紀後半		赤	黒	外	対角の位置に別文様	赤、黄	?	絵?	(11.6)	(2.4)	5.1	0.4	歪みあり	
	トレンチ			赤	黒	外	3?	赤	植物?	○	(9.4)	(1.9)	(5.0)	(0.2)		
	包含層			赤	黒	外		黄?	隅立て四つ目?	○	(9.1)	(3.3)	(6.0)	–		
	カクラン			赤	黒	無					12.0	(4.7)	(6.3)	(0.6)		
	カクラン			赤	黒	無					14.7	4.9	9.0	2.2		
	不明			赤	黒	外	3	赤	沢潟	○	(11.8)	(4.9)				
	230	17世紀後半		赤	黒	外		赤	向かい鶴	○	–	–	–	–	(0.3)	破片
	179	17世紀後半		赤	黒	外		赤	植物	○	(11.0)	(2.9)	5.4	–		体部破片
	122	17世紀後半		赤	黒	外		赤	沢潟	○	–	–	–	–	–	体部破片
	182	17世紀後半		赤	黒	外		赤	蓮華文	絵	–	–	–	–	–	体部破片
	109	17世紀後半～18世紀前半		赤	黒	外		赤	植物	絵	–	–	–	–	–	体部破片
	116	17世紀～19世紀		赤	黒	外		赤	植物(蔓?)	絵	–	–	–	–	–	体部破片
	29	19世紀中葉		赤	黒	外		赤、銀	植物	絵	–	–	–	–	–	体部破片
	93	19世紀		赤	黒	外		赤	植物(蔓?)	○	–	–	–	–	–	体部破片
	304	19世紀		赤	黒	外		赤	?	○	–	–	–	–	–	体部破片
	35	19世紀		赤	黒	外		黄	梅	○	–	–	–	–	–	体部破片
	35	19世紀		赤	黒	外		赤、黄	梅	○	–	–	–	–	(0.1)	体部破片
	遺構検査中			赤	黒	外	?	赤	とんぼ	絵					(0.2)	破片





第51図　近世木製品（箸）実測図１　（Ｓ＝１／３）

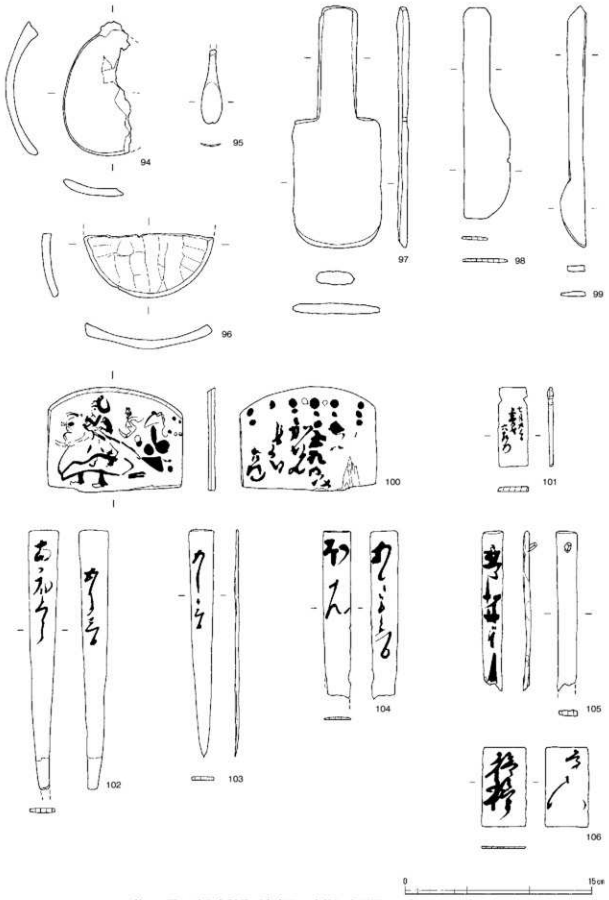


第52図　近世木製品（箸）実測図2　（S＝1／3）

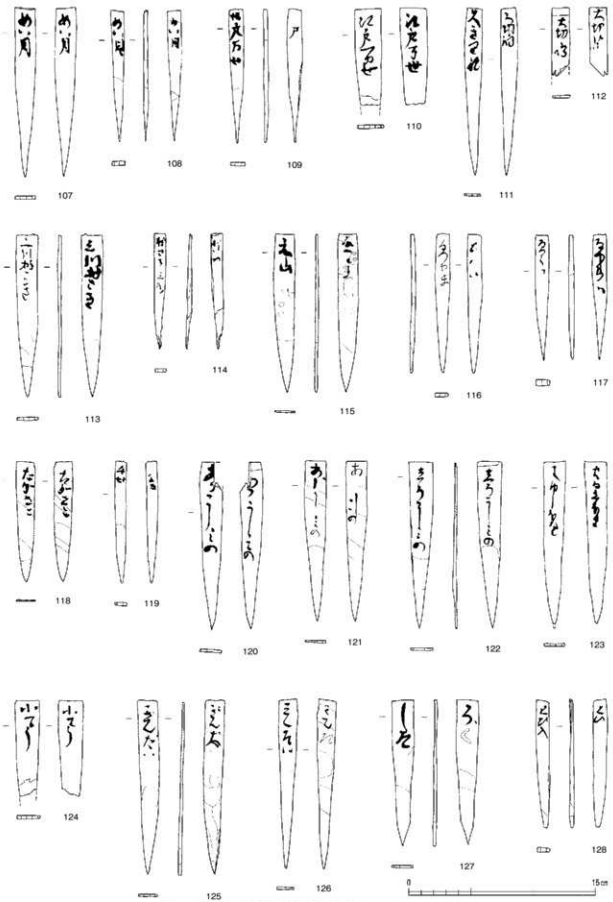
木簡類（第 53 図 100 ～第 55 図 150）　ここで扱うものは、樽や曲物の蓋など以外の板材に文字が書かれたもので、絵馬と札類などがある。100 は片面に何かに跨ったような人が描かれ、反対面には、名前かと考えられるものが書かれており、絵馬ではないかと考えられる。101 は両側面から切り込みが入り、「七月廿三日　上安田村　六左衛門」と書かれるもので、荷付札だと考えられる。102 ～ 104 は長さ 20 ㎝前後、幅約 2 ～ 2.5 ㎝。「五月三日」と書かれている。形は題 54・55 図のものと同じく先尖り形だが、大型である。105 は板材の上部に木釘が打たれ、引っ掛けられるようにしたものである。106 は厚さ 0.2 ㎝の長方形の板材である。107 ～ 150 は幅が 1 ～ 2 ㎝程の先尖り形のもので、表裏両面に同じ内容がかかれ、書かれている内容が「めい月」・「たかさこ」・「江戸万世」・「小てう」　などと荷付札とは思われないような、どちらかというと風流なものであり、植木鉢などに刺し、花などの植物の品種名を書いた札ではないかと考えられる。これらは、大きさにより 2 分類できる。A 類は、長さ約 11 ㎝以下、幅約 1.0 ㎝～ 1.2 ㎝。B 類は、長さ約 11.5 ㎝～ 13.5 ㎝、幅約 1.5 ㎝～ 2.0 ㎝。B 類の方が A 類よりも判読できた文字が多く、はっきりとかかれているが、A・B 両方に同じ内容が書かれているものもある。

第 14 表　木簡観察表

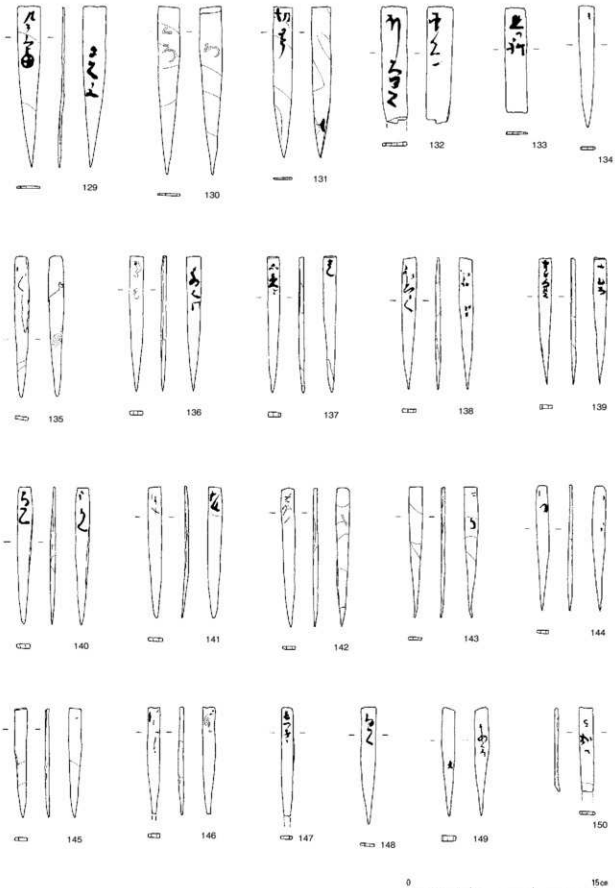
挿図番号	遺構番号	時期	法量(cm)	分類	釈文	
53-100	179	17世紀後半	8.2×10.7×0.6			
53-101	112	19世紀	6.4×2.4×0.4		七月廿三日　上安田村　六左衛門	
53-102	230	17世紀後半	(20.6)×2.4×0.3		あ□くら	五月三日
53-103	230	17世紀後半	18.1×2.0×0.3		五月三日	
53-104	230	17世紀後半	(13.5)×2.2×0.2			五月三日
53-105	179	17世紀後半	(12.6)×1.7×0.5			
53-106	179	17世紀後半	6.2×3.5×0.2			
54-107	179	17世紀後半	13.3×1.6×0.3	B	めい月	めい月
54-108	179	17世紀後半	10.3×1.1×0.4	A	めい月	めい月
54-109	179	17世紀後半	10.1×1.2×0.3	A	江戸万世	
54-110	179	17世紀後半	7.6×2.2×0.3	B	江戸万世	江戸万世
54-111	179	17世紀後半	13.1×1.4×0.3	B	大きり嶋	大切嶋
54-112	179	17世紀後半	(5.4)×1.5×0.2	B	大切嶋	大切嶋
54-113	179	17世紀後半	12.8×1.7×0.3	B	三川むらさき	三川(村)さき
54-114	179	17世紀後半	9.1×0.9×0.3	A	村さき三川	村
54-115	179	17世紀後半	12.5×1.7×0.3	B	東山	なつやま
54-116	179	17世紀後半	10.9×1.1×0.3	A	なつやま	なつ(山)
54-117	179	17世紀後半	9.9×1.1×0.5	A		
54-118	179	17世紀後半	9.4×1.5×0.2	A	たかさこ	たかさこ
54-119	179	17世紀後半	9.1×0.9×0.3	A	千世	
54-120	179	17世紀後半	13.2×1.8×0.3	B	あ(か)こしもの	あ(か)こしもの
54-121	179	17世紀後半	12.6×1.8×0.3	B	あ□□□この	あ□□□この
54-122	179	17世紀後半	13.2×1.9×0.2	B	しろこしもの	しろこしもの
54-123	179	17世紀後半	(12.7)×1.8×0.3	B	はるしぼり	はるしぼり
54-124	179	17世紀後半	(7.5)×2.0×0.3	B	小てう	小てう
54-125	179	17世紀後半	13.7×1.7×0.3	B	ぎんだ	ぎんだ
54-126	179	17世紀後半	13.2×1.6×0.3	B	しんたい	
54-127	179	17世紀後半	11.5×1.8×0.3	B	した	
54-128	179	17世紀後半	10.1×1.1×0.4	A	とひ入	とひ
55-129	179	17世紀後半	12.7×1.9×0.3	B		
55-130	179	17世紀後半	13.2×1.8×0.3	B		
55-131	179	17世紀後半	11.8×1.5×0.2	B	切	
55-132	179	17世紀後半	(9.2)×2.1×0.3	B		
55-133	179	17世紀後半	(8.2)×1.8×0.2	B		
55-134	179	17世紀後半	12.5×1.7×0.3	B		
55-135	179	17世紀後半	11.5×1.2×0.3	A		
55-136	179	17世紀後半	10.6×1.2×0.4	A	□の<□	
55-137	179	17世紀後半	10.7×1.1×0.4	A		
55-138	179	17世紀後半	10.3×1.2×0.3	A		
55-139	179	17世紀後半	10.0×1.0×0.4	A		
55-140	179	17世紀後半	10.8×1.2×0.4	A		
55-141	179	17世紀後半	10.3×1.2×0.3	A		
55-142	179	17世紀後半	10.9×1.1×0.3	A		
55-143	179	17世紀後半	10.3×1.1×0.3	A		
55-144	179	17世紀後半	9.9×1.1×0.3	A		
55-145	179	17世紀後半	8.6×1.0×0.3	A		
55-146	179	17世紀後半	(8.3)×1.0×0.3	A		
55-147	179	17世紀後半	(8.6)×1.0×0.3	A		
55-148	179	17世紀後半	9.3×1.2×0.3	A		
55-149	179	17世紀後半	8.5×1.1×0.5	A		
55-150	179	17世紀後半	(6.8)×1.2×0.3	A		



第53図　近世木製品（食事具・木筒）実測図3　（S＝1／3）



第54図　近世木製品（木簡）実測図4　（S＝1／3）



第55図　近世木製品（木簡）実測図5　（S＝1／3）

容器（第 56 図 151 ～第 59 図 195）　曲物・桶・樽・柄杓、柄杓の部品や樽などの栓、さらに便宜的に提灯・折敷なども扱う。151 は茶事で使用される三足の水指だと考えられる。推定現存高は 7.3 ㎝。黒漆かと考えられるものが外面に薄く塗られる。156 ～ 158 は釘が残存し、底部に孔があることから、提灯だと考えられる。171 は楕円形を呈しおまるもしくは飯櫃の底板だと考えられる。直径は、6.4 ～ 50.7 ㎝まであり、50 ㎝代の大型、30 ㎝前後の中型、約 20 ㎝以下の小型に分かれ、小型はさらに約 16 ～ 20 ㎝、約 14 ～ 15 ㎝、約 13 ㎝以下に分かれる。最小のものは、提灯や柄杓だと考えられる。159・160 は柄杓の部品である。165 ～ 169 は栓であり、169 を除き直径 3.1 ～ 3.9 ㎝である。166・167・169 には側面に孔が開く。195 は折敷である。

人形（第 60 図 202 ～ 205）　205 は角柱状のもので、削り出しによって頭部と体部を表現している。体部では、中央部と下方の側面２箇所に穿孔があり、手足を付けるためのものだと考えられる。頭部は顎と目・鼻・口を彫り込み立体的に表現している。202 ～ 204 は削り出しによって頭部と頚部を立体的に作り出している。202 は頚部底面に１㎝ほどの孔があり体部と接合したものと考えられる。頭頂部にも孔がある。口唇部には、赤彩色の痕跡が残る。203・204 には頭部に木釘が打ちこまれている。203 には口頭部中央に孔があり、204 は底面に釘孔がある。

櫛（第 60 図 209 ～ 212）　209・211 は目が荒く解櫛である。210・212 は目が細かく梳櫛である。棟は、209・210 が曲線を描き、211・212 は直線的である。歯は、211 が 34 本、212 が 92 本である。

下駄（第 61 図 213 ～第 63 図 255）　43 点計測し内訳は、連歯下駄 17 点、露卯下駄 10 点、除卯下駄８点、無歯下駄５点、刳り（庭）下駄３点である（第 15 表）。連歯・露卯・除卯下駄の平面形には方形と丸形の２種がある。連歯下駄（213 ～ 229）は方形のものがさらに台の幅が広い 213 ～ 220 と狭い 221 ～ 227 に分かれる。幅が広いものでは、台前部が後部よりも幅が広いものがほとんどで、長さが幅の２倍から 2.5 倍である。213・214 は前歯が他のものよりもかなり台の中央へ寄っている。225 は台裏の中央部が平ではなく、突出している。223・224 には「×」の刻印がある。露卯下駄（230 ～ 239）は平面方形と丸形に分かれ、さらに孔の数により２分される。234・236 ～ 238 の台裏には、細かい放射状の加工痕がある。237 は漆塗りで焼印がある。除卯下駄（240 ～ 247）は、平面形により、方形で幅広・小判形・方形で幅狭・丸形に分かれる。243・245 ～ 247 は漆塗りである。刳り（庭）下駄（248 ～ 250）は、両歯非独立と片歯独立に分かれる。前者は、台裏の一部を刳り抜きほぼ全面に広い接地面を作ったもの。後者は、前歯が台と連続し後歯のみが独立しているもの。草履下駄（251・252・254）は、台の周囲に小孔が複数あるもの。雪下駄（253・255）は、前壷が１つあるいわゆる１つ目下駄である。253 の後歯はひもを通す小さな孔が開く程度である。255 は台前部に１ヶ所切り込みが入っており、前壷の代わりをしていたと考えられる。なお、216・217・219・237・238 には鼻緒の一部が、238 には歯の差し込み部分が一部残存する。時期別では、連歯下駄は 17 世紀代が８点、19 世紀代が２点である。露卯下駄は 17 世紀代が４点、18 世紀代が２点、19 世紀代が４点。除卯下駄はすべて 19 世紀代である。刳り（庭）下駄は 17 世紀代が１点、19 世紀代が１点。草履下駄は 17 世紀代が１点、18 世紀代が１点。雪下駄は 19 世紀代のみである。

第 15 表　下駄分類表

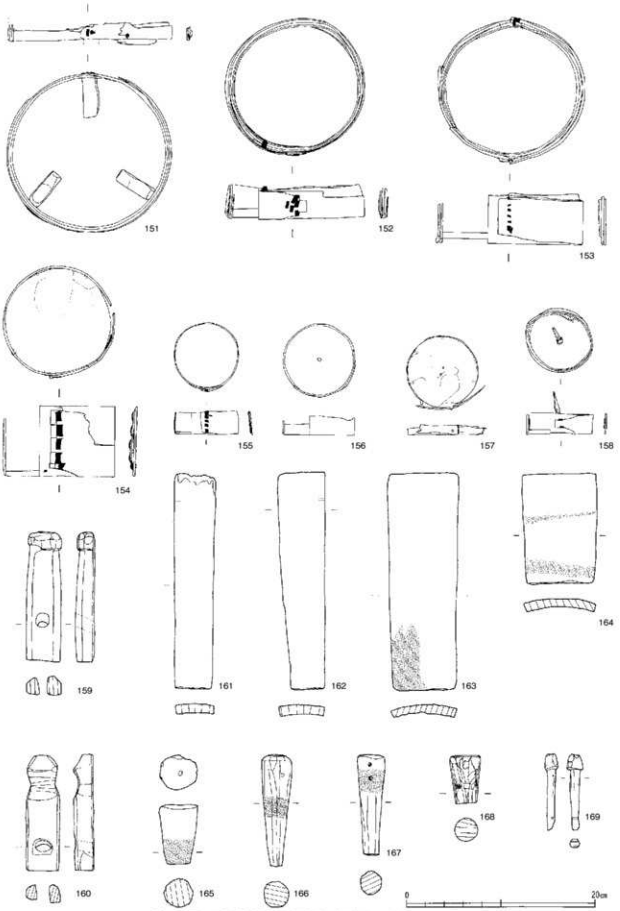
器種		点数	%	分類	番号
一本	連歯	17	39.5	方形（幅広）	213～220
				方形（幅狭）	221～227
				丸	228・229
	刳り（庭）	3	7	両歯非独立	248・249
				片歯独立	250
差歯	露卯	10	23.5	方形（孔４）	230・233
				方形（孔２）	232
				丸（孔６）	231
				丸（孔２）	234～239
	除卯	8	18.5	方形（幅広）	240～243
				小判形	244
				方形（幅狭）	245
				丸	246・247
無歯	草履	3	11.5		251・252・254
	雪	2			253・255

第16表　下駄観察表

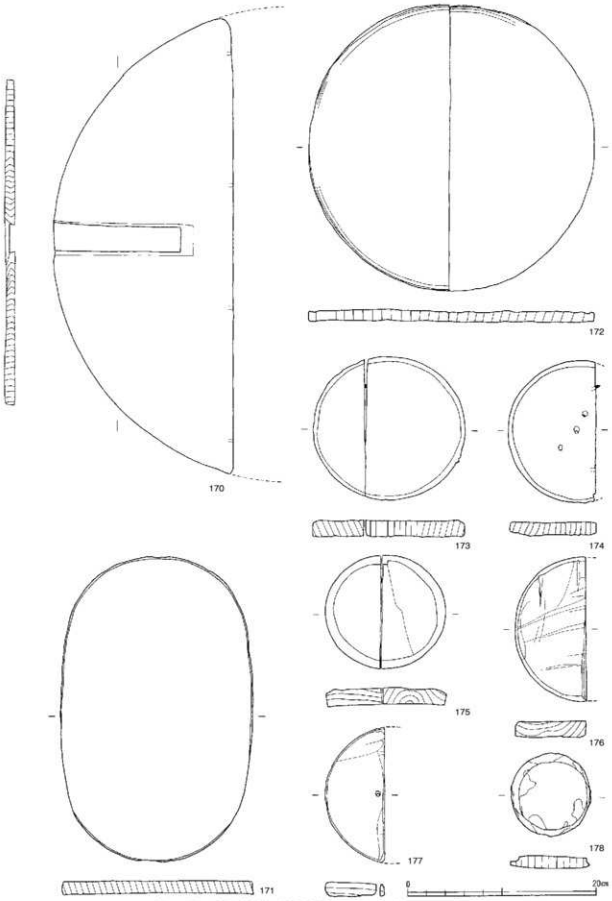
挿図番号	遺構番号	時期	種類	法量(cm)					備考
				長さ	幅	台幅	台厚	全高	
61-213	包含層		連歯	22.5	10.1	10.1	1.0	2.5	
61-214	包含層		連歯	22.3	10.8	10.8	1.1	2.6	
61-215			連歯	22.5	10.4	9.8	2.3	5.3	
61-216	82	17世記後半	連歯	22.6	9.5	9.5	1.5	2.7	台表に線状痕あり。右用
61-217	230	17世記後半	連歯	13.8	9.7	9.6	1.7	4.5	左用
61-218	147	19世記	連歯	24.5	11.0	10.1	2.1	7.8	釘で補修した跡あり、前歯欠損。右用
61-219	82	17世記後半	連歯	22.7	9.6	9.2	1.3	5.1	前歯欠損
61-220	179	17世記後半	連歯	22.7	9.8	9.2	1.7	4.3	左用
61-221	82	17世記後半	連歯	22.1	9.3	8.8	1.4	4.4	右用
61-222	122	17世記後半	連歯	20.3	9.4	8.4	1.2	4.4	
61-223			連歯	22.8	8.8	8.8	1.9	6.3	刻印「×」
61-224			連歯	22.0	9.2	9.0	1.9	5.5	刻印「×」、左用
61-225	82	17世記後半	連歯	21.6	9.6	9.1	3.5	5.1	台裏が一部突出。左用
61-226	82	17世記後半	連歯	20.3	9.5	8.7	0.9	3.1	左用
61-227			連歯	16.5	8.2	7.0	1.3	6.3	子供用
62-228	62	19世記	連歯	21.2	8.4	8.2	1.4	2.6	
62-229			連歯	23.4	10.6	8.5	1.3	5.0	鼻緒残存
62-230	6	19世記	露卯	23.4	9.5	8.8	4.0	4.8	
62-231	96	18世記後半	露卯	(20.8)	9.8	7.4	3.0	7.8	
62-232	62	19世記	露卯	21.1	－	7.7	2.8	－	歯欠損。
62-233	6	19世記	露卯	23.4	11.2	10.1	3.2	6.6	後歯欠損。
62-234	230	17世記後半	露卯	21.7	9.8	7.7	3.4	7.6	後歯欠損。
62-235	182	17世記後半	露卯	22.1	9.0	8.0	4.9	3.5	右用
62-236	182	17世記後半	露卯	14.7	7.3	5.7	1.7	5.0	子供用
62-237	96	18世記後半	露卯	21.5	12.0	8.2	3.5	9.5	黒漆塗り、焼印あり。左用。前歯欠損。
62-238	182	17世記後半	露卯	17.9	－	7.0	1.9	－	子供用。歯欠損。
62-239	147	19世記	露卯	16.0	8.2	5.8	2.1	5.2	子供用。右用
62-240	6	19世記	陰卯	23.4	11.2	10.1	3.2	6.6	
62-241	6	19世記	陰卯	23.5	11.5	10.5	3.7	6.9	
63-242	73	19世記	陰卯	20.5	9.5	8.9	3.5	4.7	釘で歯を止めている。左用
63-243			陰卯	21.4	9.0	8.5	3.8	5.6	黒漆塗り
63-244	28	19世記中葉	陰卯	19.3	9.8	8.2	3.1	6.4	
63-245	63	19世記前半	陰卯	21.5	9.2	6.2	3.4	7.8	漆塗り、左用
63-246			陰卯	22.0	8.3	6.8	4.0	7.0	漆塗り
63-247	6	19世記	陰卯	21.3	－	7.9	3.1	－	漆塗り、歯欠損。
63-248	28	19世記中葉	朝り(庶)	20.7	－	9.7	4.1	－	
63-249			朝り(庶)	21.8	－	10.0	4.0	－	一部炭化
63-250	127	17世記後半	朝り(庶)	(19.8)	－	7.5	1.3	－	左用
63-251	82	17世記後半	草履	25.7	－	8.8	1.2	－	
63-252	96	18世記後半	草履	25.3	－	9.0	1.1	－	
63-253	34	19世記～近代	雪	22.0	－	8.7	1.0	－	
63-254			草履	22.0	－	7.7	1.2	－	
63-255	6	19世記	雪	16.7	－	6.7	1.6	－	子供用、刻印「×」

上水道管継手（第64図256～第65図265）　12点が出土している。孔の開き方などにより、4分類できる。257・261・263は上水道管である竹管の太さを変えるためのもので、孔の出口の口径が細くなっている。256・259・262・263は管の方向を変えるもので孔の角度が259は直角に、256・265は鈍角になっている。258・260・264は単に管を延長させるためのもの。262は管の沈下防止のために管を据え置く場所が半円形に刳りぬかれている。以上のように継手は単に竹管を延長させるためだけではなく、所定の場所に必要な量の水を導くためにいろいろな形に成形されている。用材としては、256は丸太材であり、257・259・260・263・264は芯持の、258・261・262・265は芯を持たない角材である。不必要な加工を持つものがあり、半数ほどが転用材だと考えられる。

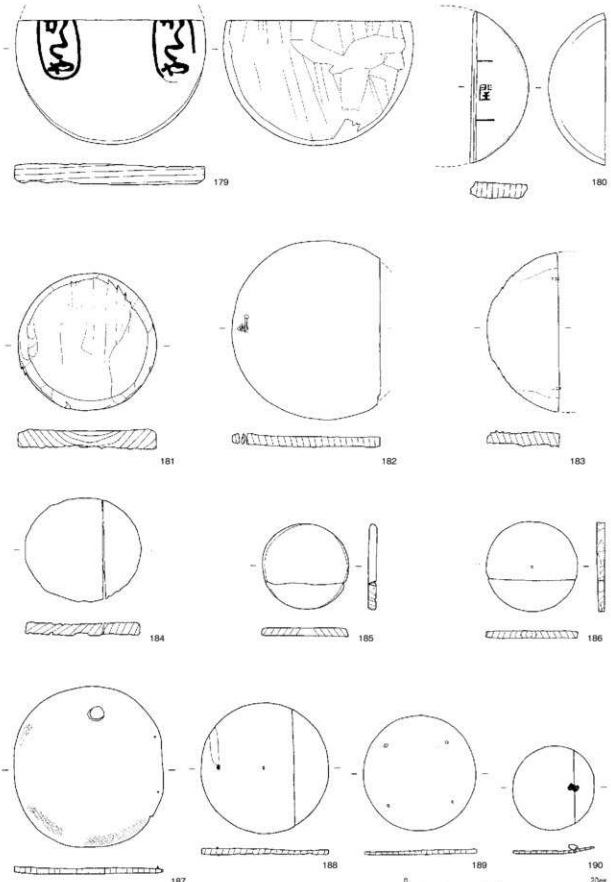
柱（第65図266～273）　9点が出土しており、すべて芯持材である。断面形では、円形に近いもの266・269・272と、面取りをして多角形を呈するもの267・268・270・271・273がある。底面は、ほぼ平坦266～268、270～272、側面から削り込んで先端を尖らせる273、側面から削り込み平坦面を持つ269の種類がある。268では側面下方に孔が開けられ貫通しており、これは木材運搬時に縄を掛けたものと考えられる。また、269・273では側面下方が掘り窪められ、くびれが1周している。267・271では中央部で幅約5cmほどの部分が凹んでおり、他の部材が結合されていたと考えられる。267では下から25cm、271では8cmを測る。



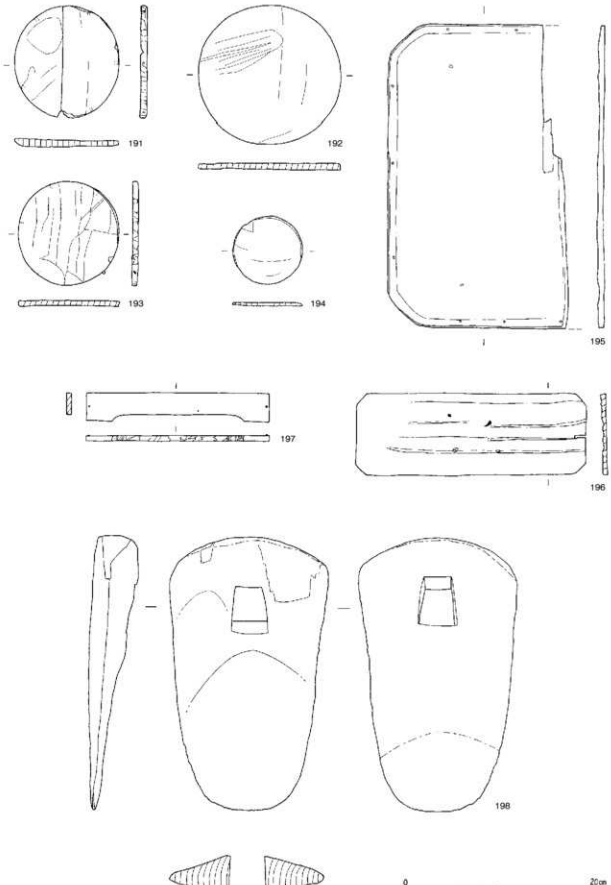
第56図　近世木製品（容器類）実測図６　（Ｓ＝１／４）



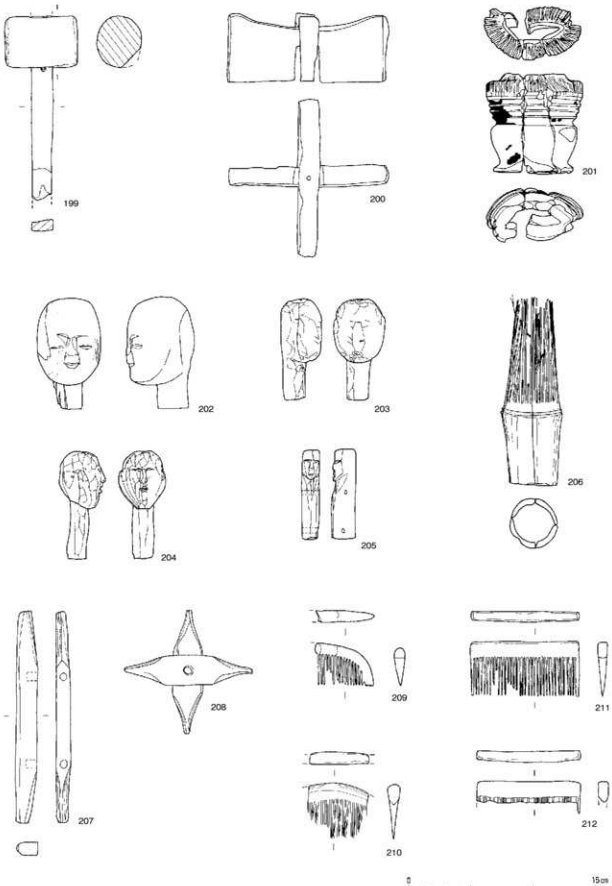
第57図　近世木製品（容器類）実測図7　（S＝1／4）



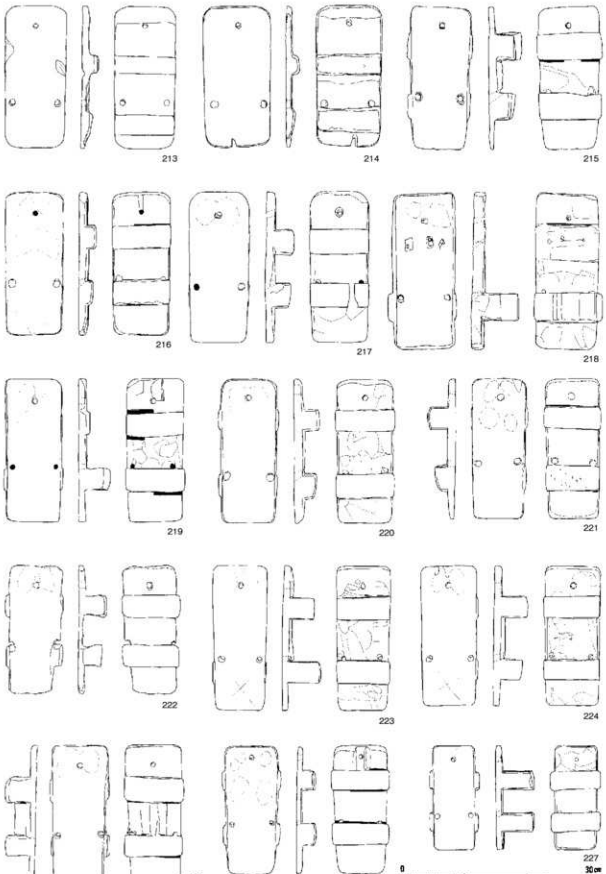
第58図　近世木製品（容器類）実測図8　（S＝1／4）



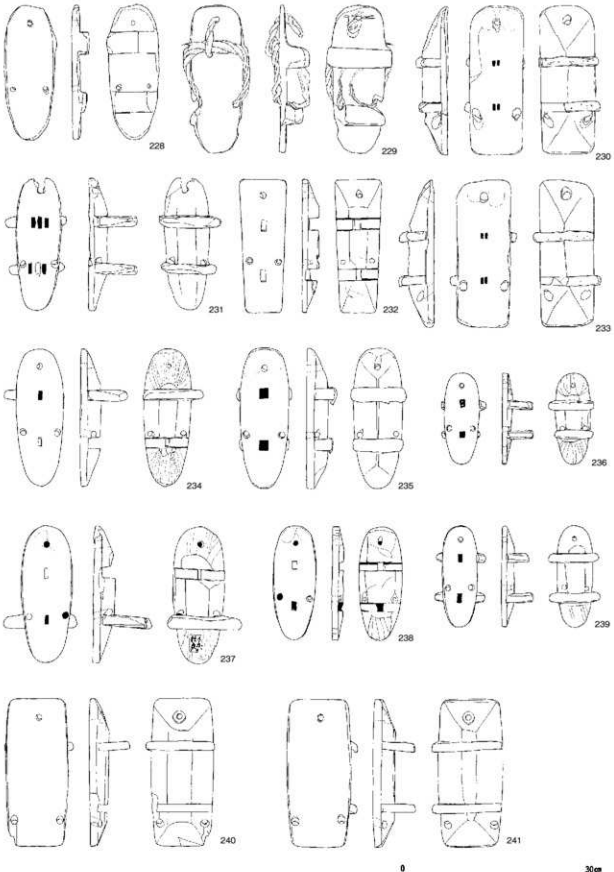
第59図　近世木製品（容器類・鍬など）実測図9　（S＝1／4）



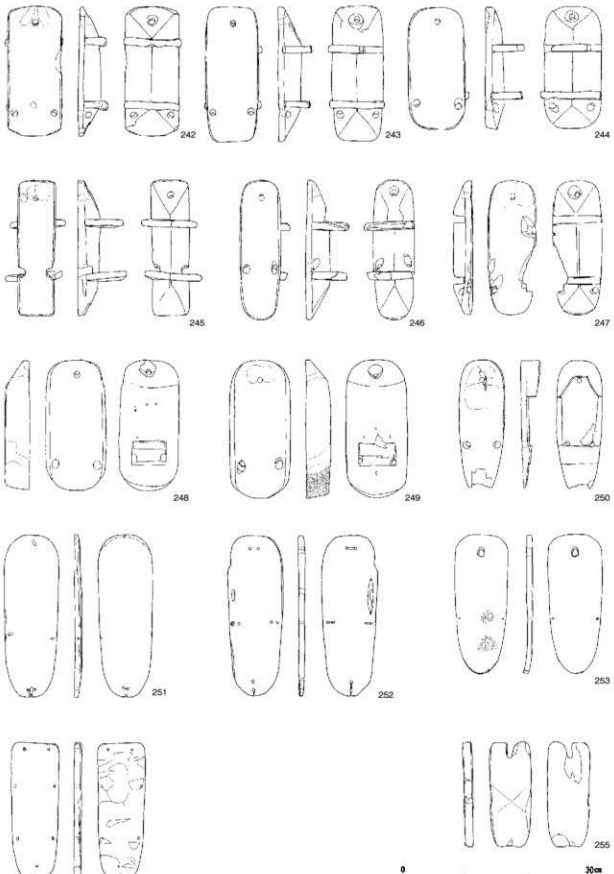
第60図　近世木製品（人形・櫛など）実測図10　（S＝1／3）



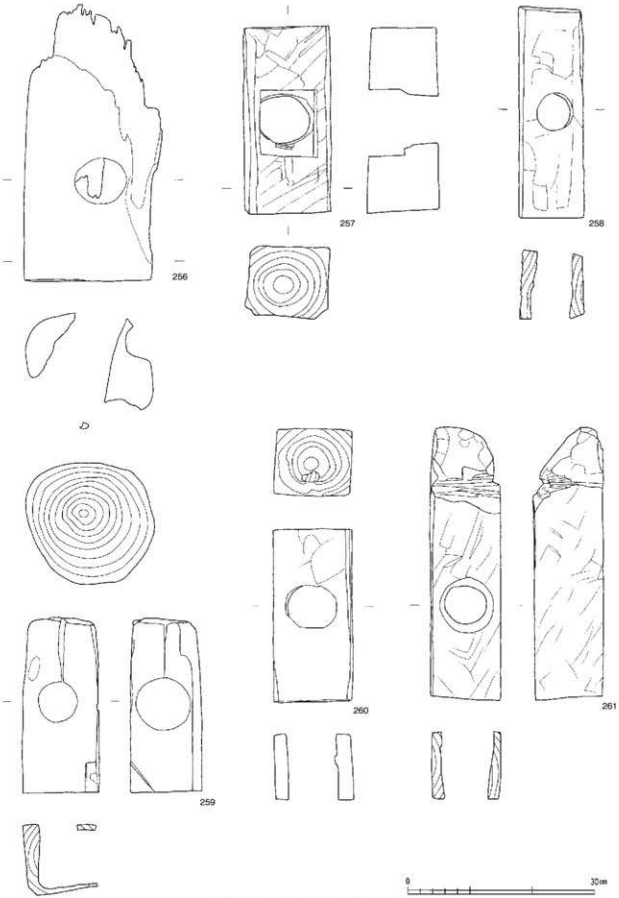
第61図　近世木製品（下駄）実測図11　（S＝1／6）



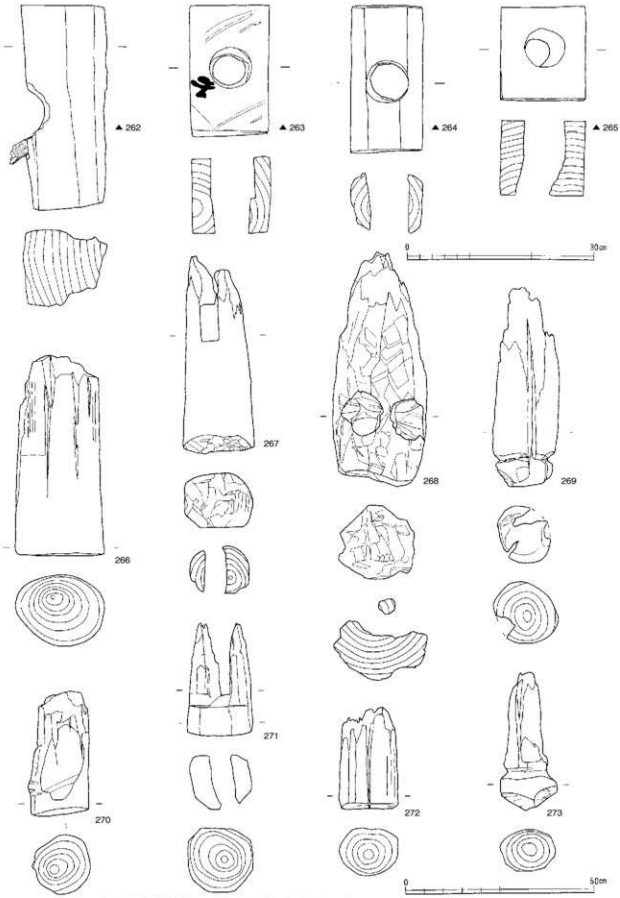
第62図　近世木製品（下駄）実測図12　（S＝1／6）



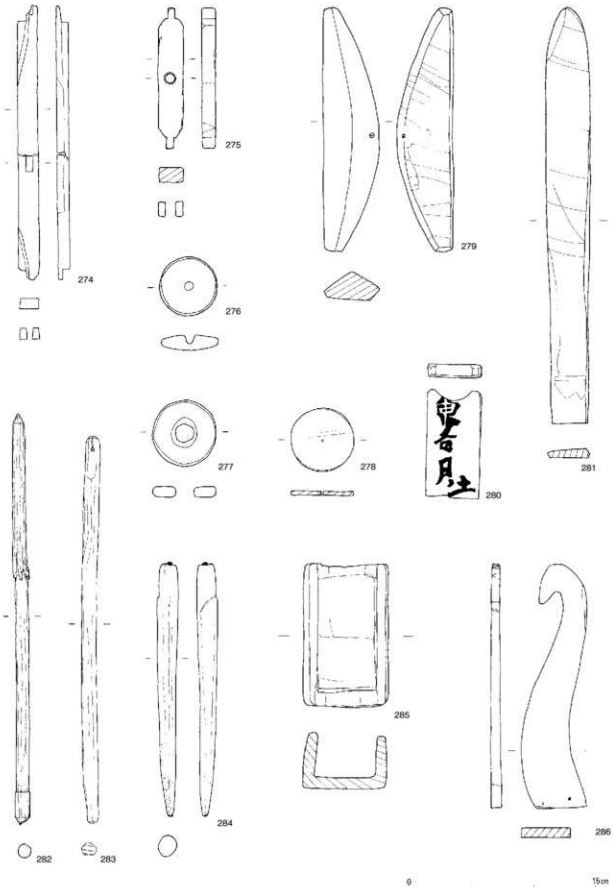
第63図　近世木製品（下駄）実測図13　（S＝1／6）



第64図　近世木製品（水道樋手）実測図14　（S＝1／6）



第65図　近世木製品（水道樋手・柱）実測図15　（S＝1/10・▲262～265は1/6）



第66図　近世木製品（加工木）実測図16　（S= 1 / 3）

第17表　近世木製品観察表

検図番号	遺構番号	時期	種類	法量(cm)			備考
				長	幅	厚	
S1-57	92	17世紀後半	電(寸面)	21.7	0.6	0.6	
S1-58	93	19世紀	電(寸面)	21.3	0.7	0.7	
S1-59	179	17世紀後半	電(寸面)	22.0	0.7	0.5	
S1-60	179	17世紀後半	電(寸面)	22.0	0.8	0.6	
S1-61	146	19世紀	電(寸面)	22.1	0.6	0.6	
S1-62	230	17世紀後半	電(寸面)	21.7	0.7	0.5	
S1-63	192	17世紀後半	電(寸面)	22.8	0.6	0.7	
S1-64	182	17世紀後半	電(寸面)	22.7	0.6	0.6	
S1-65	179	17世紀後半	電(寸面)	23.3	0.6	0.6	
S1-66	179	17世紀後半	電(寸面)	23.3	0.7	0.7	
S1-67	32	19世紀	電(寸面)	23.3	0.7	0.6	
S1-68	230	17世紀後半	電(寸面)	23.6	0.7	0.6	
S1-69	147	19世紀	電(寸面)	23.4	0.6	0.7	
S1-70	147	19世紀	電(寸面)	24.1	0.6	0.6	
S1-71	182	17世紀後半	電(寸面)	24.2	0.6	0.6	
S1-72	179	17世紀後半	電(寸面)	25.6	0.6	0.6	
S2-73	230	17世紀後半	電(片口)	21.1	0.7	0.7	
S2-74	92	17世紀後半	電(片口)	21.9	0.8	0.5	
S2-75	182	17世紀後半	電(片口)	22.2	0.7	0.6	
S2-76	93	19世紀	電(片口)	22.3	0.7	0.7	
S2-77	179	17世紀後半	電(片口)	23.3	0.8	0.8	
S2-78	182	17世紀後半	電(片口)	23.0	0.7	0.6	
S2-79	146	19世紀	電(片口)	23.1	0.7	0.7	
S2-80	230	17世紀後半	電(片口)	24.2	0.8	0.6	
S2-81	92	19世紀	電(片口)	24.4	0.8	0.6	
S2-82	179	17世紀後半	電(片口)	25.8	0.7	0.7	
S2-83	147	19世紀	電(片口)	25.6	0.7	0.7	
S2-84	2	17世紀中葉	電(片口)	26.0	0.8	0.6	
S2-85	92	19世紀	電(周口)	22.4	0.8	0.6	
S2-86	230	17世紀後半	電(周口)	26.5	0.7	0.7	
S2-87	27	19世紀中葉	電(周口)	27.7	0.6	0.7	
S2-88	302	19世紀	電(片口)	16.2	0.5	0.4	
S2-89	302	19世紀	電(片口)	16.8	0.5	0.4	
S2-90	302	19世紀	電(片口)	16.8	0.5	0.5	
S2-91	302	19世紀	電(片口)	16.4	0.5	0.6	
S2-92	302	19世紀	電(片口)	16.5	0.4	0.3	
S2-93	302	19世紀	電(片口)	16.4	0.5	0.4	
S3-94	159	17世紀後半	杓子	(10.4)	(5.3)	1.2	
S3-95	152	19世紀	匙	(5.7)	1.8	0.1	鼻漆塗り
S3-96	182	17世紀後半	杓子	(5.0)	(10.0)	0.8	黒漆塗り
S3-97			動作子	19.4	8.8	1.1	
S3-98	82	17世紀後半	切板	16.8	3.6	0.3	
S3-99	179	17世紀後半	切板	18.7	2.0	0.5	
S5-151	127	17世紀後半	水筒	16.0	(7.2)	–	三足付き
S5-152	232	19世紀	曲物	12.9	3.7	–	
S5-153	127	17世紀後半	曲物	13.7	(5.4)	–	
S5-154	179	17世紀後半	曲物	11.1	(7.4)	–	
S5-155	304	19世紀	曲物	6.7	2.3	–	
S5-156	82	17世紀後半	蓋灯	7.3	(2.0)	–	
S5-157	230	17世紀後半	蓋灯	7.6	(1.1)	–	
S5-158	29	19世紀中葉	蓋灯	6.4	2.3	–	
S5-159	82	17世紀後半	網代部品	13.7	3.7	2.0	
S5-160	6	19世紀	網代部品	12.3	3.6	2.1	
S5-161	28	19世紀中葉	側板	22.7	4.4	1.0	
S5-162	28	19世紀中葉	側板	22.9	5.1	1.1	
S5-163	28	19世紀中葉	側板	22.8	7.6	1.1	
S5-164	28	19世紀中葉	側板	11.6	6.0	1.1	
S5-165	63	19世紀前半	枕	6.3	3.8	–	
S5-166	127	17世紀後半	枕	11.8	3.2	–	
S5-167	182	17世紀後半	枕	11.7	3.1	–	
S5-168			枕	5.1	3.2	–	
S5-169	116	17世紀前半～19世紀	枕	8.0	1.8	–	
S7-170			底板	(46.5)	(18.6)	1.1	復元径50.7cm
S7-171	28	19世紀中葉	底板	32.4	20.0	1.4	桃円形
S7-172	147	19世紀	円形板	30.4	–	1.2	
S7-173			蓋	15.2	–	1.8	
S7-174	27	19世紀中葉	蓋	14.9	–	1.5	
S7-175	6	19世紀	蓋	12.8	–	1.7	上面は黒漆塗り
S7-176	28	19世紀中葉	蓋	15.1	–	1.7	
S7-177	27	19世紀中葉	蓋	(14.5)	(7.2)	1.8	復元径14.8cm

検図番号	遺構番号	時期	種類	法量(cm)			備考
				長	幅	厚	
S7-178	179	17世紀後半	蓋	7.2	–	1.3	
S8-179	27	19世紀中葉	蓋	20.2	–	2.2	張印あり
S8-180	28	19世紀中葉	蓋	(16.2)	(8.0)	1.7	張印あり、復元径17.4cm
S8-181	28	19世紀中葉	蓋	14.8	–	2.2	
S8-182	6	19世紀	蓋	19.3	–	1.2	釘が打ち込まれている
S8-183	28	19世紀中葉	円形板	(18.9)	(7.5)	1.8	復元径17.1cm
S8-184	28	19世紀中葉	円形板	12.1	–	1.3	
S8-185	2	17世紀中葉	円形板	9.1	–	0.8	
S8-186	179	17世紀後半	蓋	9.8	–	0.8	
S8-187			蓋	16.7	–	0.8	
S8-188	112	19世紀	蓋	13.6	–	0.6	
S8-189			蓋	12.0	–	0.5	
S8-190	82	17世紀後半	蓋	8.8	–	0.3	
S9-191	182	17世紀後半	底板	11.6	–	0.8	
S9-192	112	19世紀	円形板	14.8	–	0.7	
S9-193			底板	9.9	–	0.6	
S9-194			円形板	7.3	–	0.4	
S9-195	27	19世紀中葉	折敷	32.3	–	0.6	
S9-196	179	17世紀後半	加工木	24.4	8.8	0.7	
S9-197	146	19世紀	櫛	18.3	3.0	0.6	
S9-198	73	19世紀	簞	29.2	16.5	4.7	
60-199	304	19世紀	木屑	18.8	3.6	4.1	
60-200	179	17世紀後半	灯明台	12.6	5.5	–	
60-201	63	19世紀前半	単鞘鞘	7.9	7.6	–	
60-202	122	17世紀後半	人形	8.9	5.0	–	赤彩色が残る
60-203	82	17世紀後半	人形	7.9	4.1	–	
60-204	82	17世紀後半	人形	8.4	3.8	–	
60-205	179	17世紀後半	人形	7.1	2.0	–	
60-206	179	17世紀後半	板塀	15.0	3.7	–	
60-207	179	17世紀後半	糸巻(非木)	18.8	1.7	1.1	
60-208	179	17世紀後半	糸巻(陶木)	10.0	–	–	
60-209	包含層		板碑	(4.6)	3.3	1.0	
60-210	152	19世紀	板碑	(4.5)	4.4	1.0	
60-211	82	17世紀後半	板碑	8.6	4.3	0.6	
60-212	93	19世紀	板碑	8.1	(2.5)	0.8	
64-256	蔀半①2	19世紀	蔀手	(44.6)	20.8	–	
64-257	蔀半②2	19世紀	蔀手	30.3	13.4	11.5	
64-258	蔀半③	19世紀	蔀手	34.0	11.3	10.1	
64-259	蔀半②2	19世紀	蔀手	27.8	12.1	11.3	
64-260	蔀半北西	19世紀	蔀手	27.8	12.3	10.6	
64-261	蔀半③	19世紀	蔀手	43.9	10.7	10.5	
64-262		19世紀	蔀手	32.9	13.3	12.7	
64-263	蔀半②	19世紀	蔀手	21.0	12.6	12.3	
64-264	36	19世紀	蔀手	23.6	11.2	10.4	
64-265	蔀半②	19世紀	蔀手	15.3	13.2	11.9	
	蔀半③	19世紀	蔀手	20.2	12.6	12.3	
	蔀半③	19世紀	蔀手	27.3	12.0	10.8	
64-266	45		柱	54.2	21.9	–	
64-267	36	17世紀初頭～前葉	柱	53.4	15.5	–	
64-268	15		柱	62.0	23.6	–	
64-269	17		柱	52.9	17.5	–	
64-270	24		柱	32.9	15.8	–	
64-271	50		柱	30.3	17.6	–	
64-272	10		柱	27.4	14.6	–	
64-273	178		柱	36.9	14.4	–	
	47		柱	17.3	10.6	–	
66-274	230	17世紀後半	加工木	21.8	1.6	0.8	
66-275	232	19世紀	加工木	11.5	2.0	1.1	
66-276	146	19世紀	加工木	4.6	–	1.2	
66-277	34	19世紀～近代	加工木	5.2	–	0.6	
66-278			加工木	5.0	–	0.4	
66-279	27	19世紀中葉	加工木	19.4	4.4	2.2	
66-280	82	17世紀後半	加工木	9.5	4.3	1.1	文字が彫り込まれている
66-281	182	17世紀後半	加工木	33.1	3.5	0.8	
66-282			加工木(柳状)	32.5	–	1.2	
66-283	230	17世紀後半	加工木(柳状)	30.8	–	1.2	
66-284	62	19世紀	加工木	19.1	–	1.6	先端に釘あり
66-285			加工木	11.4	6.7	4.5	
66-286	179	17世紀後半	加工木	19.3	4.5	0.8	

第３項　金属製品

金属は希少なため回収され、廃棄されることが少ないためか量的にはあまり多くない。又、破損・部分品等で用途不明のものも多い。主なものは銭貨の他、煙管、釘等が多い。

銭貨　中世の銭貨も多く含まれるが、ここでは福井城期の遺構・整地層より出土したものについてもここで扱う。古銭の総数は 40 枚である。渡来銭でみてゆくと、北宋銭は元豊通宝（1078）が６枚、皇宋通宝（1038）が５枚、至道元宝（995）と元祐通宝（1086）が３枚ずつ、咸平元宝（998）、祥符元宝（1009）、聖宋元宝（1101）が１枚ずつ、明銭は永楽通宝（1408）が 10 枚、洪武通宝（1368）が１枚、本邦銭の寛永通宝は古寛永（1636 ～ 1659）が６枚、新寛永（1668）が４枚である。さらに無文銭が１枚出土している。残りの５枚は不明銭である。

遺構から出土したものを見てみると、元豊通豊が遺構 215 から３枚、皇宋通宝が遺構 163・215 から、至道元宝と聖宋元宝が遺構 215 から、元祐通宝が遺構 65 から、咸平元宝が道北溝から、洪武通宝が遺構 502 から、新寛永が遺構 98，112，182 からそれぞれ１枚ずつ出土している。整地層出土品をグリット別に見ると、皇宋通宝が２－Ａ，４－Ｄ，至道通宝が４－Ｊ、７－Ｅ、元祐通宝が７－Ｅ，元豊通宝が３－Ｄ，８－Ｄから１枚ずつ、永楽通宝が５－Ｃから９枚、８－Ｄから１枚、古寛永が３－Ｊ，４－Ｉ，５－Ｉ，７－Ｋ，９－Ｆから１枚ずつ出土している。

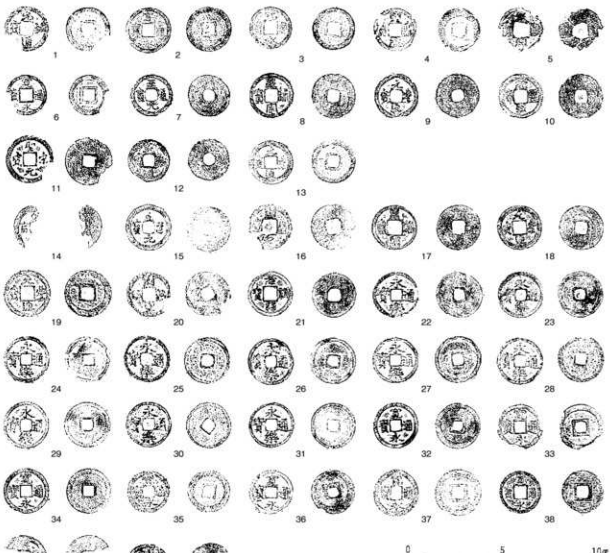
以上から出土状況を総括的にみると、渡来銭は調査区南半分から、古寛永は北半分から多く出土している。永楽通宝９枚が５－Ｃの上層に集中する。又、各遺構を全体的に見てみると、調査区南半分の遺構から出土している古銭が多いことがわかる。遺構 215 からは北宋銭が６枚出土しており、明銭が１枚も出ていないことから、遺構 215 は明銭が日本に入る室町時代より古い時代の遺構である可能性がある。また、６枚が一括して出土していることや、下層で焼骨が出土していろことから六道銭の可能性が考えられる。遺構 182 は出土陶磁器類から 17 世紀後半と考えられるが、新寛永も出土しているので遺構 182 は 1668 年以降の遺構と考えられる。

全体的に見ると、中世の渡来銭、特に北宋銭がかなり多い。

煙管　雁首・吸口は各々組み合わされて出土したものはなかった。雁首のうち１・２は全長の短い新しい形式のものである。各々出土遺構から 19 世紀中頃と考えられる。3・5 は 4 に比べ全長が１cm短い。特に３は羅宇接続部近くが膨らむ形状である。吸口は８・９が全長 4.3・4.9 cmと短く、６・７はこれよりも約１cm長い。11 は 7.3 cmあり最も長い。

化粧道具　簪は、出土品について全長で 31・32 は 13.5 cm、33・34 は 17.4 cmと約 4 cm差の２種類に分けられる。また、程度の長さと２股に分かれる部分の形態が 31・34 は角形段切り、32・33 は丸形段切りの２種類に分かれる。35 は毛抜きで中央部の軸が上下し先端部を開閉できる。

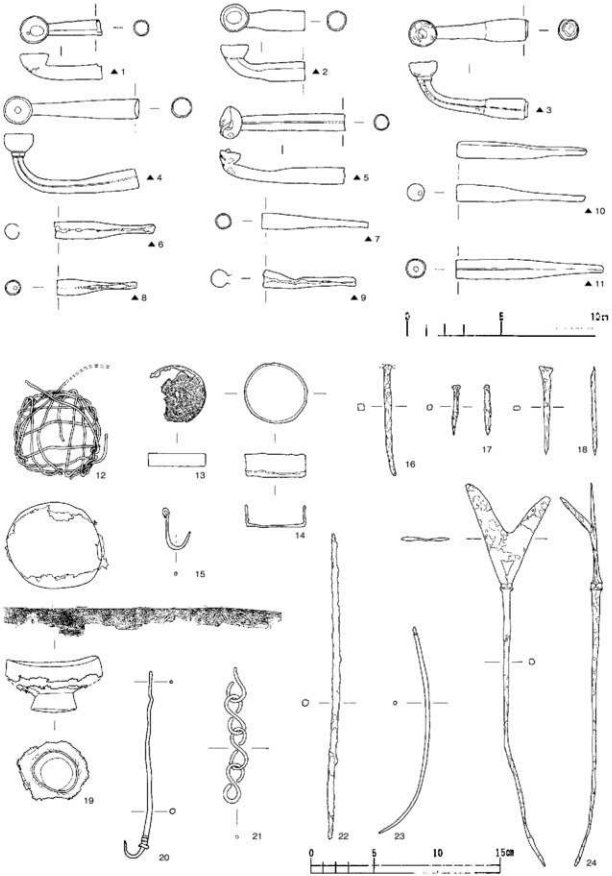
その他　12 は真鍮製針金を籠状に編まれる。24 は２股の矢尻である。13・14 はキャップ状の金具である。円筒の先に付いていたと考えられる。14 は鶴の毛彫り装飾が施される。19 は真鍮板から起こした盃である。高台部分は別に貼り付けられる。体部外面には魚々子地に笹等毛彫りで表す。30 は銅製の手付き皿である。油痕は確認できなかったが灯明皿若しくは受け皿とおもわれる。



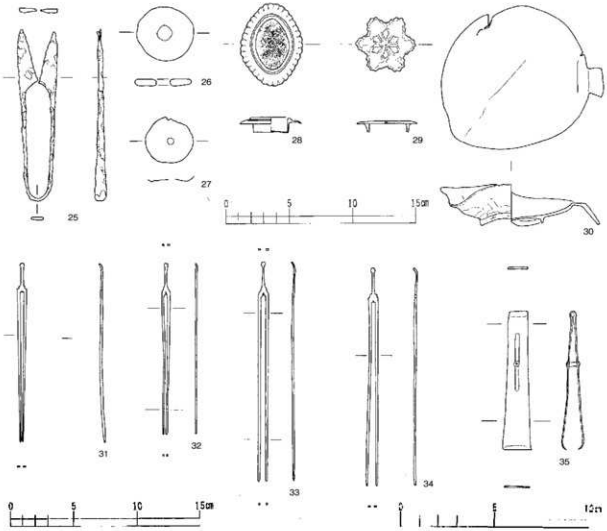
第67図　近世金属製品（銭貨）拓本図1　（S＝1／2）

第18表　近世銭貨観察表

No.	遺構	出土地点	名称	外径(mm)	穿径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	時代	初鋳年	備考	No.	遺構	出土地点	名称	外径(mm)	穿径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	時代	初鋳年	備考
1	65	4−I	元祐通宝	24	6.3	1.4	2.2	北宋	1086	新寛永	21			元祐通宝	24.2	7	1.2	2.9	北宋	1086	
2	98	9−H	寛永通宝	24.4	6.4	1.1	2.8	江戸	1668	新寛永	22		5−C	永乗通宝	24.8	5.6	1.2	1.6	明	1408	
3	112	4−G	寛永通宝	22.8	6.6	1.1	2.2	江戸		新寛永	23		5−C	永乗通宝	24.6	5.7	1.3	2.7	明	1408	
4	158	8−F	元宝？	23.1	6.5	1.5	2.2				24		5−C	永乗通宝	24.5	5.2	1.3	1.8	明	1408	
5	163	9−F	皇宋通宝	23.7		1.1	1	北宋	1038		25		5−C	永乗通宝	24.5	6.1	1.3	2.5	明	1408	
6	182	3〜4D〜F	寛永通宝	21.6	6.2	1.2	1.6			新寛永	26		5−C	永乗通宝	24.6	5.7	1.1	2.6	明	1408	
7	167	9−F	景德元宝	22.8	6.2	1.2	2.4	北宋	995		27		5−C	永乗通宝	24.6	5.5	1.4	3.3	明	1408	
8	167	9−F	皇宋通宝	24.4	6.8	1.4	3.3	北宋	1038		28		5−C	永乗通宝	24.7	5.4	1.3	3	明	1408	
9	167	9−F	元豊通宝	23.5	6.2	1.5	2.8	北宋	1078		29		5−C	永乗通宝	24.3	5.6	1.4	3.8	明	1408	
10	167	9−F	元豊通宝	24.3	6.7	1.3	2.4	北宋	1078		30		5−C	永乗通宝	23.9	5.6	1.3	3.5	明	1408	
11	167	9−F	聖宋元宝	25.6	6	1.4	2.5	北宋	1101		31		8−D	永乗通宝	24.3	5.9	1.4	3.3	明	1408	
12	167	9−F	不明	22.7	6.1	1.5	3.3				32		5−I	寛永通宝	24	5	1.2	2.7	江戸	1637	古寛永
13		8−C	元豊通宝	23.7	6.1	1.7	3.2	北宋	1078		33		4−I	寛永通宝	24.5	5.6	1.3	2.4	江戸	1656	古寛永
14		4−J	景德元宝	24.4		1	0.9	北宋	995		34		3−J	寛永通宝	24.5	5.5	1.1	3.4	江戸	1636	古寛永
15		7−E	景德元宝	24.6	6	1	2.5	北宋	995		35		7−K	寛永通宝	23.2	5.8	0.9	2	江戸	1636	古寛永
16		2−A	皇宋通宝	24	7.7	1.5	1.6	北宋	1038		36		9−F	寛永通宝	23.8	5.2	1.5	2.8	江戸	1636	古寛永
17		4−D	皇宋通宝	24.5	7.5	1	2.3	北宋	1038		37			寛永通宝	25.1	6.1	1.3	2.7	江戸	1636	古寛永
18		8−D	元豊通宝	24.1	6.8	1.3	3.6	北宋	1078		38		2−J	寛永通宝	22.8	6.3	1.1	2.5	江戸	1668	新寛永
19		3−D	元豊通宝	25	6.5	1.4	4	北宋	1078		39			不明	24		1	0.8			
20		7−E	元祐通宝	24.9	6.6	1.3	2.9	北宋	1086		40			不明	25.4		1.1	0.5			



第68図　近世金属製品実測図２　（▲１～11はS＝１／２・12～24は１／３）



第69図　近世金属製品実測図3　（S＝1／3）

第19表　近世金属製品観察表

No.	遺構番号	種別	法　量(cm)	実測番号	No.	遺構番号	種別	法　量(cm)	実測番号
1	29	キセル雁首	全長4.35 全高1.9 首部長3.85 火皿径1.5×1.3 火皿高0.9	29	17	32	和釘	長さ4.0	32-2
			羅宇接続部0.8 火皿接位置 上		18	27	和釘	長さ7.0	27-2
2	47	キセル雁首	全長4.5 全高1.9 首部長4.25 火皿径1.5 火皿高0.75	47-1	19	32	面	口径(7.3) 底径(3.5) 厚さ0.08	32-1
			羅宇接続径1.0 火皿接位置 左		20	65		全長14.65 最大径0.4	65-1
3	110	キセル雁首	全長6.2 全高3.0 首部長5.7 火皿径1.45 火皿高0.8	110	21	75	鎖状製品	長さ7.2	75-1
			火皿接続部径0.8 羅宇接続径1.05 火皿接位置 左		22	230	矢筈	全長2.2 最大径0.53	230-1
4		キセル雁首	全長 7.2 全高 3.1 首部長 6.4 火皿径 1.5 火皿高 1.0	P1004	23	230	矢筈	口径11.5 底径3.32	230-2
			火皿接続部径 0.7 羅宇接続径 1.1 煙接位置 左		24	73	矢尻	全長3.5 最大径1.0	73-1
5		キセル雁首	全長 6.6 全高 2.0 首部長 6.4 羅宇接続径 0.8 煙接位置 上	P1005	25	112	和 鋏	全長13.6 最大幅3.1	112
6	1	キセル吸口	現存長(5.4) 最大径(0.9) 羅宇接続径(0.85) 端部径(0.45)		26		船製打元円盤	最大径 4.5 孔直径1.1 厚さ 0.5	P1015
7	88	キセル吸口	全長5.65 最大径0.8 羅宇接続径0.8 端部径0.3 煙接位置下	1-1	27		蝶台(蝶受け)	径 3.8 厚さ 0.02	P1011
8		キセル吸口	全長 4.3 最大径 1.0 羅宇接続径 0.8 端部径 0.3 煙接位置 左	88	28		天袋引き手	全長 6.5 幅 4.8 厚さ 1.1	P1009
9		キセル吸口	全長 4.9 最大径(0.9) 煙接位置 左	P1006	29		環状金具	全長 4.9 厚さ 1.0	P1010
10	102	キセル吸口	全長6.85 最大径0.9 羅宇接続径0.9 端部径0.3 煙接位置右	P1006	30		灯明皿	口径 11.5 底径 9.2 厚さ 0.2	P1012
11		キセル吸口	全長 7.3 最大径 0.8 羅宇接続径 1.0 端部径 0.4 煙接位置 左	102	31	73	簪	全長 14.1 幅 0.8 厚さ 0.2	73-1
12	1	かご	最大径7.0	P1007	32		簪	全長 13.5 幅 0.8 厚さ 0.2	P1003
13	27	被せ金具	高さ1.0 径4.5	27-1	33		簪	全長 17.3 幅 0.8 厚さ 0.2	P1002
14	26	被せ金具	口径4.8 底径4.6 器高1.7	26-1	34		簪	全長 17.4 幅 1.0 厚さ 0.2	P1001
15	26	釣針状金具	最大長3.3	26-2	35	116	毛抜き	全長7.2 幅1.5 厚さ0.1	116
16	26	和釘	長さ8.7	26-3					

第４項　石製品

石製品は比較的多く出土しているが、割れ・欠け等の破損品が多く、用途・形状の不明なものが多い。石材は地元産の笏谷石製品が多い。用途も笏谷石製品では屋根瓦等建築資材、バンドコ等生活用品、石臼・石鉢等台所用品等、柔らかく加工しやすい特性を活かし生活全般に渡るのは一乗谷朝倉氏遺跡と同様である。笏谷石以外の石材を使用するのは堅さ・緻密さを要求される硯・砥石類のみといえる。

１笏谷石製品

石瓦　遺構 232 の護岸に大量に使用されていた。総て丸瓦で 13 のみ素紋の軒丸瓦である。外面（上面）は整跡がほとんど見えないほど丁寧に仕上げる。内面は少し削るが整跡を残したまま仕上げはおこなわない。２次的転用品だが、調査区では池遺構 232 以外では出土していないためこの屋敷内の建物に使用されていたとは考え難く、櫓・城塀に使用されていたものが持ち込まれたと思われる。

バンドコ　20 ～ 24 は蓋、25 は身部である。上から見た形で「O」「D」形に大別されるが、蓋は細片のため形態は不明である。23 は「O」形小バンドコ形製品の蓋だが、上部に３箇所穿孔し、穴および周囲に陰刻装飾を施す。24 は 23 とほぼ同径の身部である。このような小型品は時折見受けられる。身部 25 は「O」形である。

26・27 はバンドコに似るが双方脚が付き、27 は浅いことから香炉又は火鉢とおもわれる。

その他　18 は井戸遺構 216 の底に据えられていた。その形状から水道竹管の継ぎ手、又は分水器と考えられる。31 は小判形の石板に楷書の「水」と陰刻する。用途は不明である。32・33 はその形状から碁石と考えた。

２その他の石材

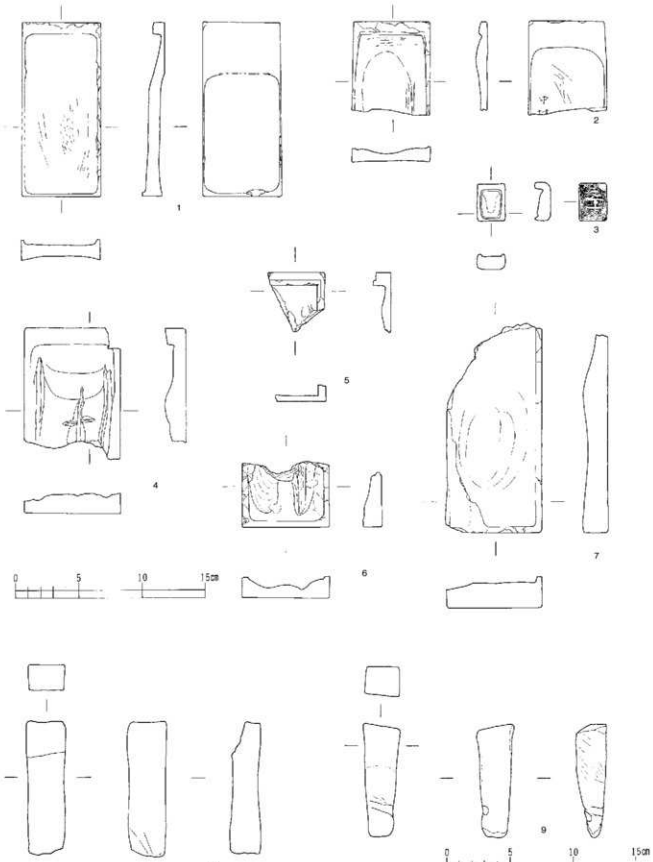
硯　細片は比較的多く出土している。底を窪ませる１・２の形態と、窪ませないものに分けられる。２には「中村」と名前が線刻される。

砥石　８・９とも目の細かい仕上げ用とみられる。

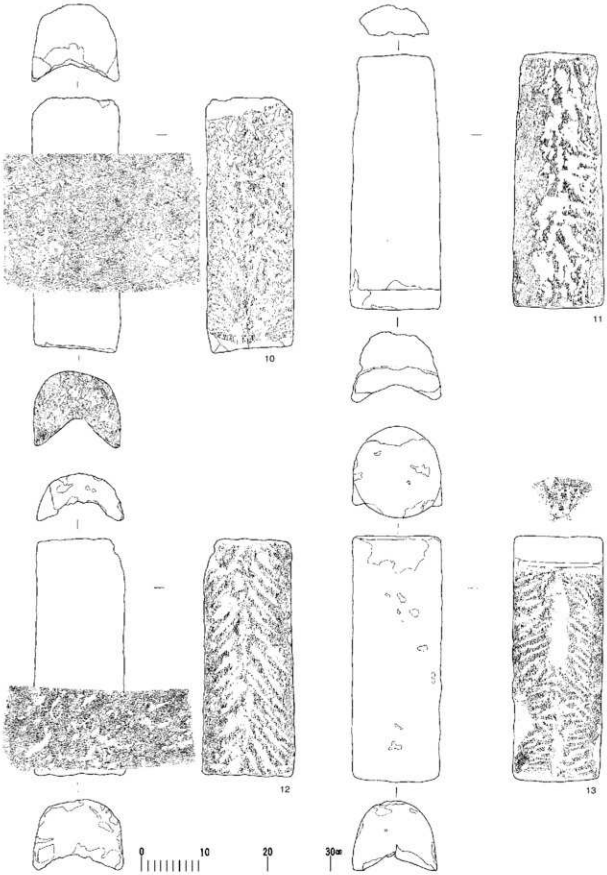
第 20 表　近世石製品観察表

No.	遺構番号	種別	石質	法量(cm)	備考	写真番号
1	6	硯		縦13.6 横6.3 厚20.9		8-1
2	28	硯		縦7.0 横6.2 厚20.5		28B-1
3	40	ミニチュア硯		縦3.0 横2.5 厚2.1		32-1
4	63	硯		縦10.4 横7.6 厚21.6		63-6
5		硯		縦 4.7 横 (3.0) 厚3.1		P901
6		硯		縦 4.4 横 7.0		P900
7		硯		縦 11.6 横 7.5		P902
8		硯石		縦 10.5 横 3.1 厚2.1		P904
9		硯石		縦 3.0 横 3.0 厚2.4		P903
10	232	丸瓦	笏谷石(緑色凝灰岩)	全長(5)3.8 最大幅14.6 高3.5		7
11	232	丸瓦	笏谷石(緑色凝灰岩)	全長41.0 最大幅14.6 高21.3		2
12	232	丸瓦	笏谷石(緑色凝灰岩)	全長36.0 最大幅14.8 高21.5		4
13	232	軒丸瓦	笏谷石(緑色凝灰岩)	全長37.4 最大幅14.2 高21.4.4	瓦当は素紋	5
14	232	丸瓦	笏谷石(緑色凝灰岩)	全長38.1 最大幅14.8 高21.2		6
15	232	丸瓦	笏谷石(緑色凝灰岩)	全長46.0 最大幅13.8 高21.1.9		8
16	232	丸瓦	笏谷石(緑色凝灰岩)	全長41.0 最大幅15.0 高21.2.2		3
17	232	丸瓦	笏谷石(緑色凝灰岩)	全長55.5 最大幅15.4 高21.1.2		1

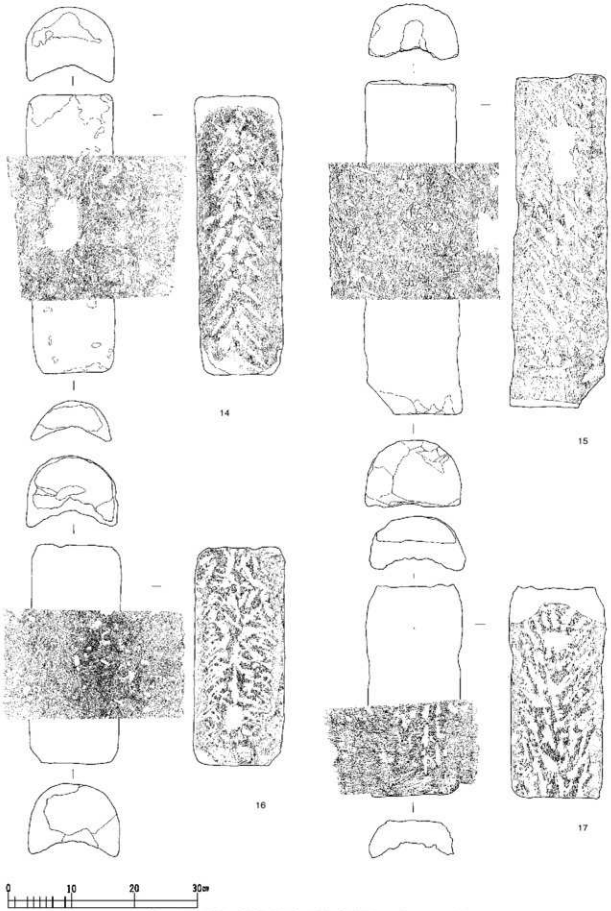
No.	遺構番号	種別	石質	法量(cm)	備考	写真番号
18	216	水道竹管継ぎ手	笏谷石(緑色凝灰岩)	厚さ16.0		
19	37	石臼(注口部)	笏谷石(緑色凝灰岩)	縦(14.0) 横(18.7) 厚さ7.5		
20	26	バンドコ蓋	笏谷石(緑色凝灰岩)	縦(11.8)厚さ2.8		26-1
21	232	バンドコ蓋	笏谷石(緑色凝灰岩)	最大幅残3.7厚2.4		試掘
22		バンドコ蓋	笏谷石(緑色凝灰岩)	最大幅残 (3.7)厚3.1		P909
23		ミニチュアバンドコ蓋	笏谷石(緑色凝灰岩)	長径 (8.2) 短径 5.2 最高 2.0	上面縁・鍵状穴 側子、間出穴(3箇)	P907
24		ミニチュアバンドコ	笏谷石(緑色凝灰岩)	最高 (2.9)		P911
25		バンドコ(O形)	笏谷石(緑色凝灰岩)	縦 22.7 横 27.4		P919
26		バンドコ(D形？)	笏谷石(緑色凝灰岩)	縦(12.0) 横(11.0) 最高 (5.6)	低脚脚付	P918
27		方形火鉢	笏谷石(緑色凝灰岩)	縦 (8)7.3 横残4.1 最高6.6	低脚脚付	P914
28		鉢	笏谷石(緑色凝灰岩)	底径 (21.0) 最高 (7.0)		P917
29		浮船等敲鉄石板	笏谷石(緑色凝灰岩)	縦残(11.2)厚7.2		P915
30		等骨引出し、釘手錠型		長さ(3.2)幅2.2 厚2.0		P906
31		陸軍「水」浮船石板	笏谷石(緑色凝灰岩)	最大幅残4.7厚2.6		P905
32		碁石		最大径2.0 厚2.0.5		碁-1
33		碁石		最大径 2.3 厚さ 0.4		P916



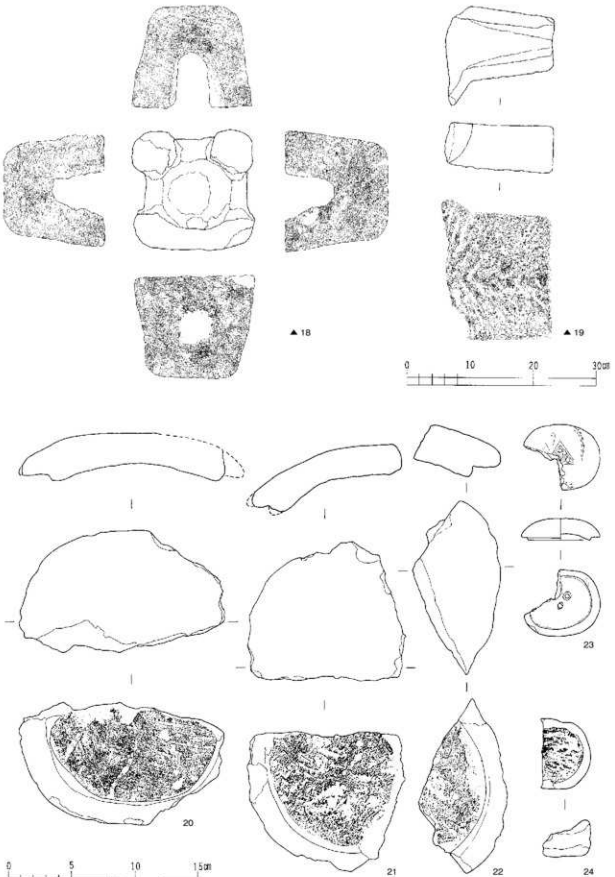
第70図　近世石製品（その他の石材）実測図1　（S＝1／3）



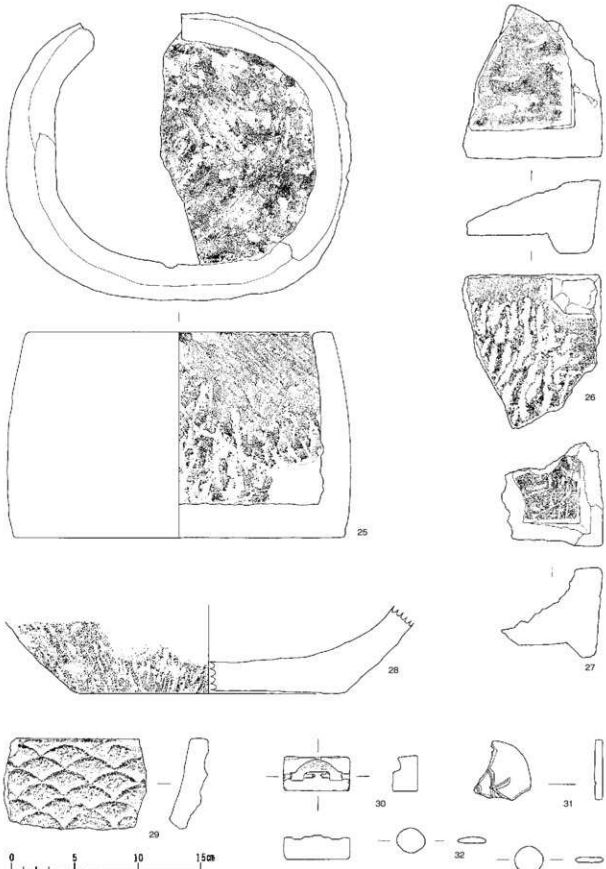
第71図　近世石製品（笏谷石瓦）実測図2　（S＝1／6）



第72図　近世石製品（笏谷石瓦）実測図３　（Ｓ＝１／６）



第73図　近世石製品（笏谷石）実測図４　（S＝1／3・▲18～19は1／6）



第74図　近世石製品（笏谷石）実測図5　（S＝1／3）

第４章　中世（北庄城期）の遺構と遺物

第１節　北庄城期の遺構

調査の都合上調査区南半に限られたが、福井城期の整地層の下に拡がる黒色土面が北庄城期の遺構面となる。この時期の遺構は、調査区中央を南北に走る溝、これと直交し東西に延びる砂利敷の道路及び溝、土坑、ピット等がある。遺構密度は比較的高い。遺構群は主軸を真北よりやや西に振る。これらの遺構群は、切り合い等より最低２期に分かれる。しかし遺構出土遺物からみると、大きな時間的隔たりは感じない。溝 540 や包含層（特に溝 540 より西側）には朝倉氏北庄期（15 世紀後期～ 16 世紀後期）の遺物も含むため、この同一面、若しくは付近にこの時期の遺構が存在する可能性が高い。

１）舗装道路

ほぼ東西に延びる。幅約５m、全面に直径１～２cm前後の玉砂利を敷き詰め、舗装する。砂利路面（舗装面）は１面のみで嵩上げされた様子はない。調査区中央付近で溝 540 と直交する。東・西端の遺存度は悪いが、双方調査区外に延びる。道路両側には側溝と考えられる溝が確認されたが、深さは道路面から約 0.3 cmである。砂利敷道路の構造そのものは福井城期の道路跡と大差ないが、絵図ではこの位置に道路が描かれたものはないため、福井城期の遺構ではないことは明らかである。

２）溝

溝 540　溝は調査区のほぼ中心を南北に貫く。幅は 3.3m、深さは遺構面より 1.3m を測る。断面で堆積状況をみると、徐々に埋没していく様子が看取できる。

道路跡と直交する付近のみに笏谷石の石組が検出された。石組は、非常に粗雑な１～２段積で、石材も大形・小形の石、あるいは転用材と考えられるもの等様々で一様ではない。又、これより上、遺構面いっぱいまで積まれていたか、あるいは溝全体に渡り組まれていたかは不明である。道路跡と直交する部分のみ残る事から橋のとりつき部のみの護岸の可能性も考えられる

その他溝の東・西岸底部には竪杭が打たれ、横木の残る部分もある。また、木杭列に合わせ大・小の石が部分的に荒く列べられる。このことから本来、護岸のため石が積まれていたと考えられる。木杭は単独で護岸に関わると考えられる他、石積を支えたり、胴木を押さえるためとも考えられる。

溝内土層の断面観察から、溝内に水が流れておらず、留まった状態であったとみられる。　溝は南へは調査区を越えのびるが、調査区より北へは延びない可能性も看取された。いずれにせよ空間を区画する重要な溝と考えられる。

溝 502　幅約 17 m、深さは確認面から 0.3 m を測る。断面形は底に向かってなだらかに落ちるゆるやかな逆台形である。東西道路北側溝より約 2.5 m北側を道路に平行してはしる。東側は溝 540 との交差点より約 13 mで終わる。溝 540 より西側では明瞭に遺構検出できなかったが、約 12 m西側で確認できたため、東西道路に平行してさらに西へ延びると思われる。溝 540 との交差点で溝 502 を荒い積みの石列で塞ぐ。このことから溝 540 廃絶以前に溝 502 は廃絶・埋め戻されていたと考えられる。ただし、溝 502 と溝 540 の出土遺物によると時期差は大きく感じない。溝 502 を境として北側に土坑等遺構が集中するため道路と宅地（？）を区画する溝と考えられる。

３）建物

建物１　掘立柱建物 501 は、ピット 503・506・509・511 を結び、方１間に復元した。柱間は東西 3.2m

(509・511 間)、南北 3.85m（506・511 間）を測る。ピット 503 は 506・509 の交差ラインより南へ 0.5m 外れるためこの建物の柱ではない可能性もある。柱軸ラインは溝 540・502 と平行し、かつ両溝交点の角に位置する。各ピットとも柱根は確認できなかったが、ピット 506・509・511 の断面では直径約 0.25m の柱のあたりを確認する。

建物 2　掘立柱建物 502 は、ピット 522・531・527・520・537 を結び、1 × 2 間に復元し、規模は 5.3×5.3m とほぼ正方形としたが、東西 1 間では柱間が広すぎる。土坑 521 や溝 502 に攪乱されている可能性を考慮すれば 2 × 2 間となる。柱間は南北列東側は 2.6m（522・531 間）、2.7m（531・527 間）。南北列西側は 2.5m（520・536 間）を測る。南西角の柱穴は溝 502 内にあたる。溝 502 精査時に確認できなっかたが、溝埋没後当該の位置に南西角柱を立てたと推定する。主軸は他の遺構と同角度である。

柵・塀：　柵？1　溝 502 に平行し、ピット 507・535・529・525 を通る柱間 3 間の柵又は塀と考えられる。全幅 9.8m を測る。ピット 507・525 は直径 0.5m とやや大きく、中側のピット 535・529 は 0.25 ～ 0.3m を測り、両側のピットより小さい直径である。柱間はピット 507 ～ 535・529 ～ 525 間は約 3.5m。ピット 535 ～ 529 間は 2.9m を測る。

柵 2　溝 502 に直角する。ピット 526・523・530 を通る柱間 2 間の柵と考えられる。全幅 3.1m を測る。各ピットとも直径 0.3 ～ 4m 前後である。柱間は各 1.55m である。溝 502 の東端から東へ約 1.5m の箇所から直角に北へ延びるため溝 502 との関連性が考えられる。

4）柱穴

直径約 1 m前後の穴が 6 基、2 列に並ぶ。当初 1 × 2 間の建物と想定したが、掘削後、深さ・断面形状がそれぞれ違う別物とわかった。遺構 521 は、平面径は 1.28m。遺構面より 0.3m で段が付き、柱部は直径 0.45m 深さは 0.72m を測る。遺構 522 は、平面不整形で最大 1.44m × 1.2m、深さは 0.52m を測る。柱穴と考えられるが、遺構 521 とは主軸が合わない、柱の深さが違う等から別々と考えられる。

5）土坑

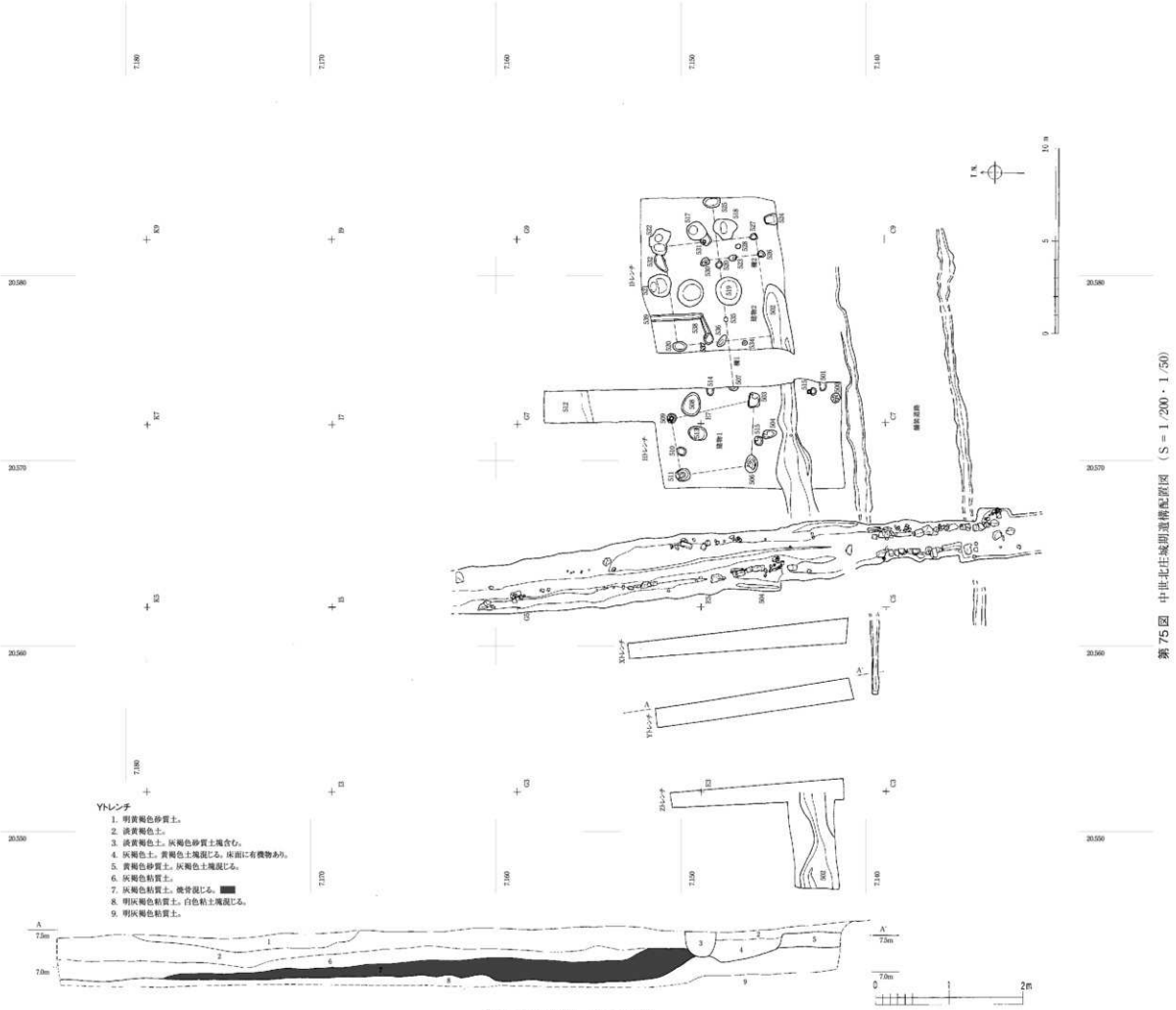
遺構 517 は平面径 0.95m、深さ 0.72m を測る。遺構内中程が膨らみ、袋状になる。最大内径は約 1.2m。遺構埋土は黒色土・腐植土が交互に堆積する。遺構 519・533 とも平面径約 1.4m で、平面・断面形が円筒形と類似するが、深さが遺構 519 は 0.58m、遺構 533 は 1.0m と相違する。遺構 518 は、平面 1.36 × 1.12m の不正形であり、深さは 0.67m を測る。519 等に比べやや小振りである。

6）包含層

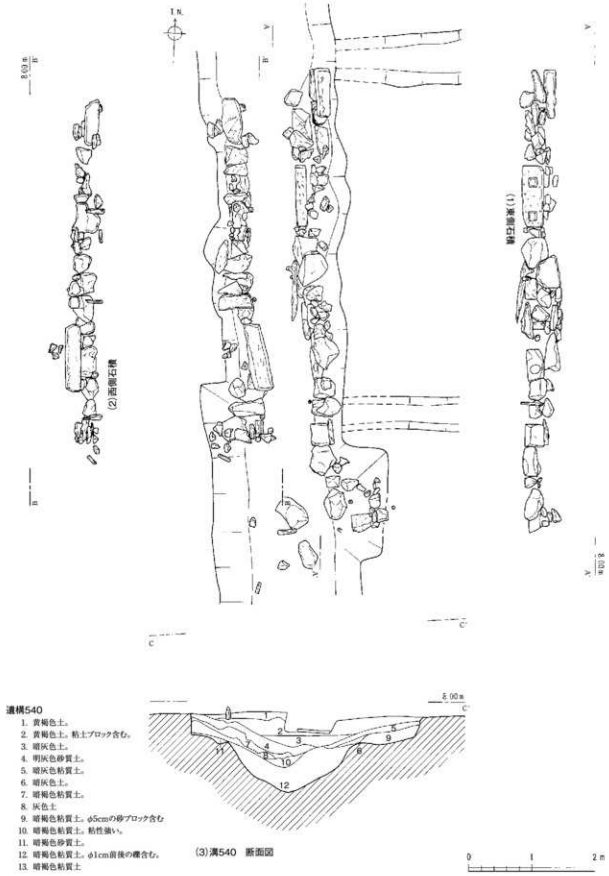
遺構ではないが重要とおもわれるので付け加えておく。遺構 540 より西側に黒色層が広がり、層中に多く焼骨片が含まれていた。明確な遺構ではなく広く層全体に含まれ状態であった。また層中の遺物量はそう多くはないが、古瀬戸後期の灰釉深鉢片や瀬戸美濃焼大窯前期の灰釉皿が含まれる。特に「享禄元年」銘の入った笏谷石製の板碑が出土しておりこの黒色土層の時期を考える上で重要である。しかしこの板碑 1 点以外には塔・墓類や、宗教的な遺物は確認できなかった。遺構 540 より東側の遺構集中地帯では、いくつかの遺構内に焼骨片が混じったものがあるが（第 21 表参照）、いずれもピット等で、焼骨片と遺構の性格とは直接関わりは薄いとおもわれる。

第21表　中世遺構一覧

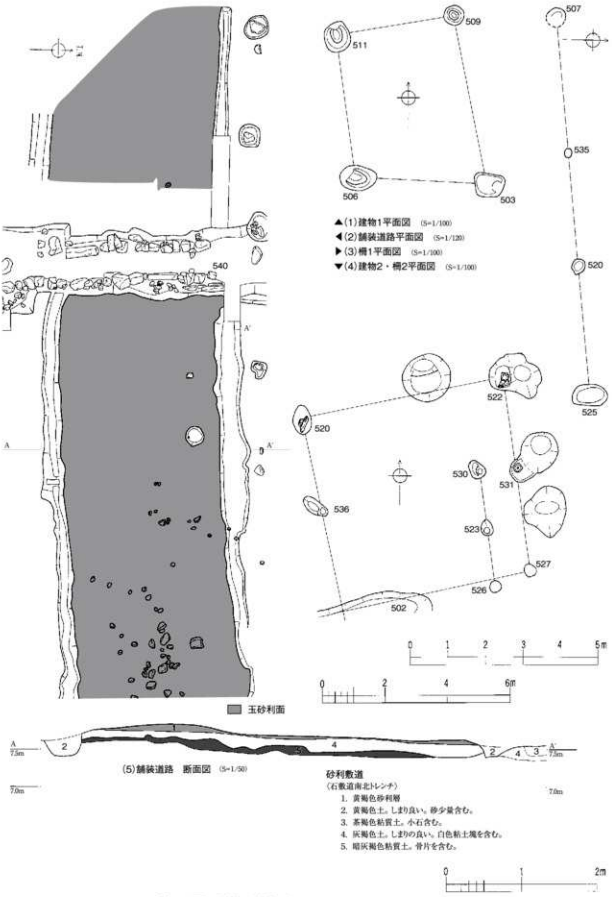
遺構番号	種　別	地　点	時　期	特色・備考	主な遺物	旧遺構番号
500	柱穴	7－C				
501	ピット	7－C	16C末			
502	溝	2～8－C・D	16C末		瀬）天目碗・灰釉皿。中国）白磁皿・小盃？。越）甕・擂鉢。土）灯明皿・土錘。須）壺・坏。金）銭。石）パンドコ蓋・硯。他）焼骨	
503	柱穴	7－D	16C末			
504	柱穴	6－D	16C末		土）灯明皿。	
505	柱穴	6－D	16C末			
506	柱穴	6－D	16C末			
507	ピット	7－D	16C末		瀬）灰釉皿。越）甕。土）灯明皿	
508	土坑	7－E	16C末		土）灯明皿。他）寒	
509	柱穴	7－E	16C末		越）甕。	
510	ピット	6－E	16C末			
511	柱穴	6－E	16C末			
512					土）灯明皿。	
513	土坑	6－D・E	16C末			
514	ピット	7－D				
515	ピット	7－C				
516	ピット	7－C	16C末			
517	土坑	9－D・E	16C末	断面袋状になる。	瀬）天目碗。中国）染付皿・端反小盃。越）擂鉢	
518	土坑	9－D	16C末		中国）染付皿。土）灯明皿。須）甕。	
519	土坑	8－D	16C末		土）灯明皿。須）甕。	
520	土坑	7－E	16C末		金）鉄鐸	
521	土坑（柱穴？	8－E	16C末			
522	土坑（柱穴？	8・9－E	16C末		土）？。須）坏。	
523	柱穴	8－D				
524	土坑	9－D	16C末		瀬）天目碗・灰釉大皿。中国）青磁碗・染付け小盃？。越）擂鉢。土）灯明皿・瓦質。須）甕。	
525	土坑	9－D				
526	ピット	8－D				
527	ピット	9－D				
528	ピット	8－D				
529	ピット	8－D				
530	柱穴	8－D				
531	柱穴	8・9－D				
532	土坑	8－E				
533	土坑	8－D・E	16C末			
534	ピット	7－D	16C末			
535	ピット	8－D	16C末			
536	ピット	7－D				
537	ピット	7－D				
538	溝	8－D	16C末			
539	溝	8－E	16C末			
540	溝	4～6－A～G	16C後～	道路との交差部分のみ石積み。古瀬戸卸皿等15C後から含む。	瀬）天目碗・鉄釉碗・灰釉碗・鉄釉皿・大皿・天目形小盃・小壺・鉄釉擂鉢・鉄釉瓶。唐）碗・大皿・砂目皿・胎土目皿。京）軟質施釉碗高台。信）壺・鉢。中国）青磁碗・白磁端反皿・香炉・染付皿。越）甕・擂鉢。土）灯明皿（金箔あり含む）。金）銭・釘。石）硯？。動物の骨・糞。	308
道	北溝				瀬）天目碗・灰釉皿。唐）碗。信）壺。越）甕・擂鉢。土）灯明皿・瓦質羽釜？。金）銭・金属円板。他）数珠玉？	
道	南溝				瀬）天目碗・鉄釉鍋。中国？）碗・皿・染付皿。越）擂鉢。土）灯明皿。	
道	南北トレ				瀬）茶入。信）壺？中国）青磁・染付皿。須）灰釉皿・甕・坏。	



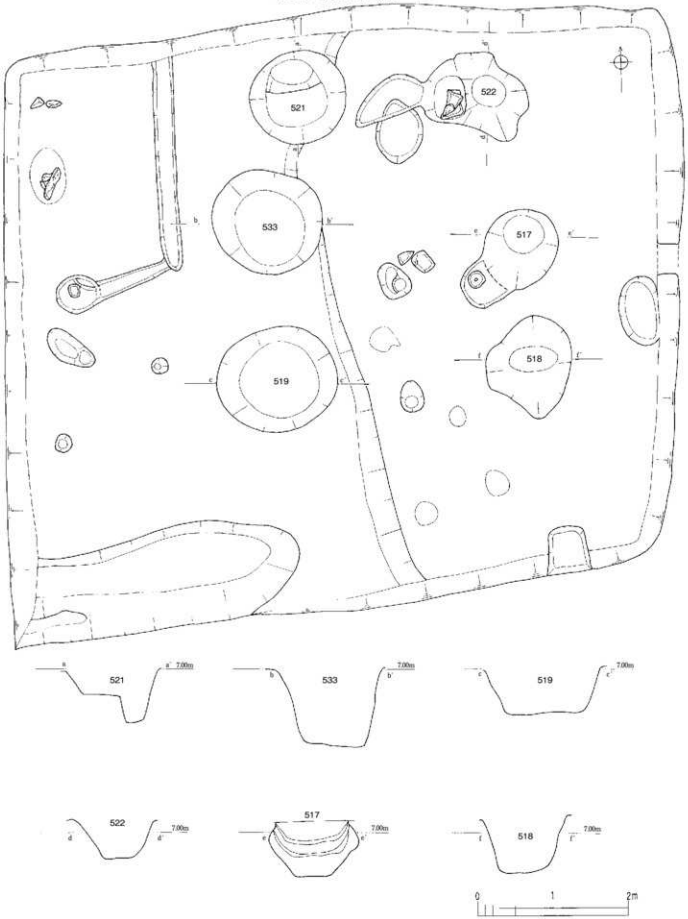
第75図　中世北庄城周濠構配置図（S＝1/200・1/50）



第76図　溝遺構540石積部分　（S＝1/60）



第77図　道路・建物　（S＝1/50・1/100・1/120）



第78図　土坑（S＝1/50）

第２節　北庄城期の遺物

第１項　土・陶磁器

この時期の遺物の大半は遺構 540 から出土しており、完形品が多いこと、土師質皿が極端に少ないことが特色である。また黒色土層出土品には 13 世紀前後の貿易陶磁や土師質等含まれており合わせて紹介する。以下遺構出土品を中心に一部黒色土層出土品も図示し、産地毎に述べる。

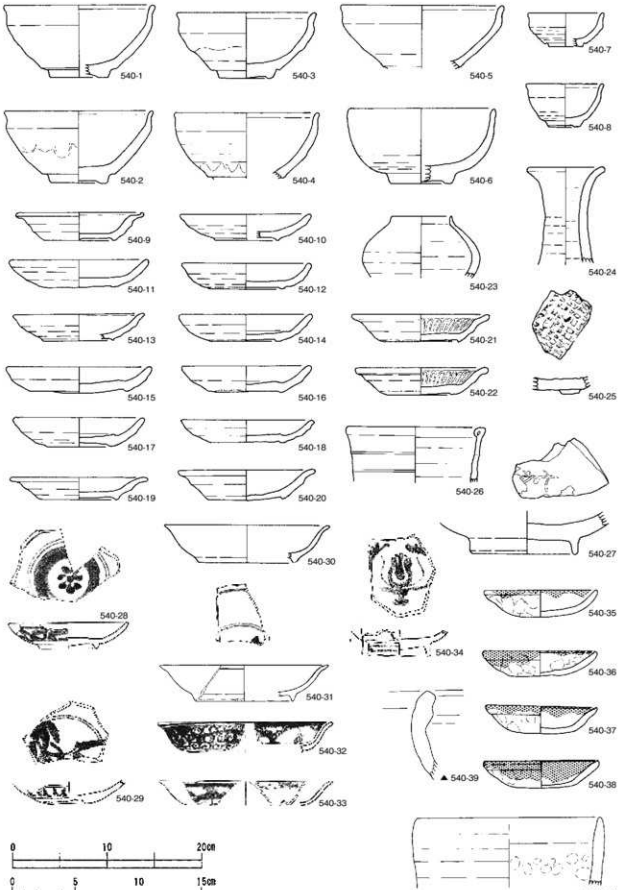
瀬戸美濃焼；　大窯後期の製品が中心である。鉄釉天目茶碗（540-1 ～ 5、502-1、517-1、包 -3・4）のうち、露胎部に錆釉を塗布したものも多い（第 22 表　中世陶磁器観察表参照）。天目形小碗（盃）（540-7・8）、丸碗（540-6）等碗類、灰釉・鉄釉小皿は大きく４種類に分類でき、丸皿（540-10 ～ 13、502-2、包 1・2）、内剥皿（540-14 ～ 18、502-3）、稜皿（540-19 ～ 20、507-1）、折縁皿（540-21・22）、鉄釉折縁皿（540-9）がある。他に鉄釉瓶（頸部）（540-24）、鉄釉小壷（540-23）、錆釉擂鉢（540-42・43）、錆釉鉢（540-41）がみられる。この他、古瀬戸後期の製品もみられる。図示出来たのは卸皿（540-25）のみだが灰釉を掛けた深鉢と思われる細片も近世面に混じったものも含め数片みられた。

越前焼；　大半は擂鉢である。口縁端部が角張り、内面端部の圏線が口縁端まで上がってくる一乗谷遺跡より新しい様相のものが増える（540-45 ～ 54、56）。16 世紀後半から 16 世紀末頃のものが中心だが、15 世紀後期から 16 世紀前半のもの（540-57、517-4、包 11）も混じり年代幅は広い。甕は体部片も含め少ない。体部が直立した桶も出土している。

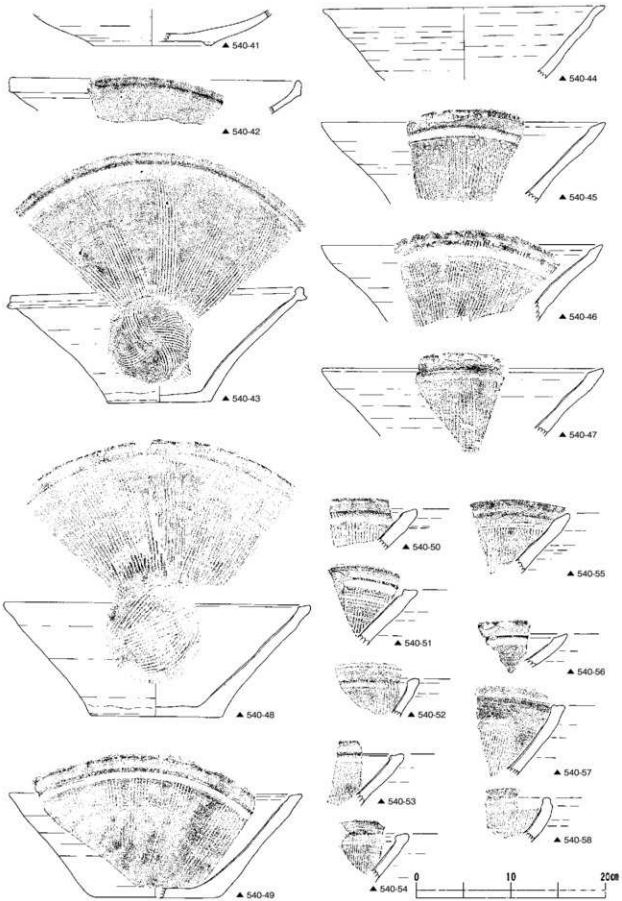
信楽焼；　540-44 は擂目がなく、捏ね鉢と考えられる。口縁形態は越前焼に近いが信楽焼ではやや外反したようになる。信楽焼と確認されたのはこれ１点である。

土師質；　瀬戸美濃焼等に比べ少量である。皿（540-35 ～ 38、502-4、包 -14 ～ 16）は灯芯油痕を残すものが多い。25％以上口縁が残るものでは直径９cm前後に収まり、大径のものはない。この他土鍾（502-5）も出土している。黒色土層中出土の羽釜（包８）は、羽の上で現状１箇所穿孔し、内面には斜め・横方向の刷毛目を残す。近年県下の多くの中世前期の遺跡から同様の釜が出土しており、本品も 13 世紀代とみられる。

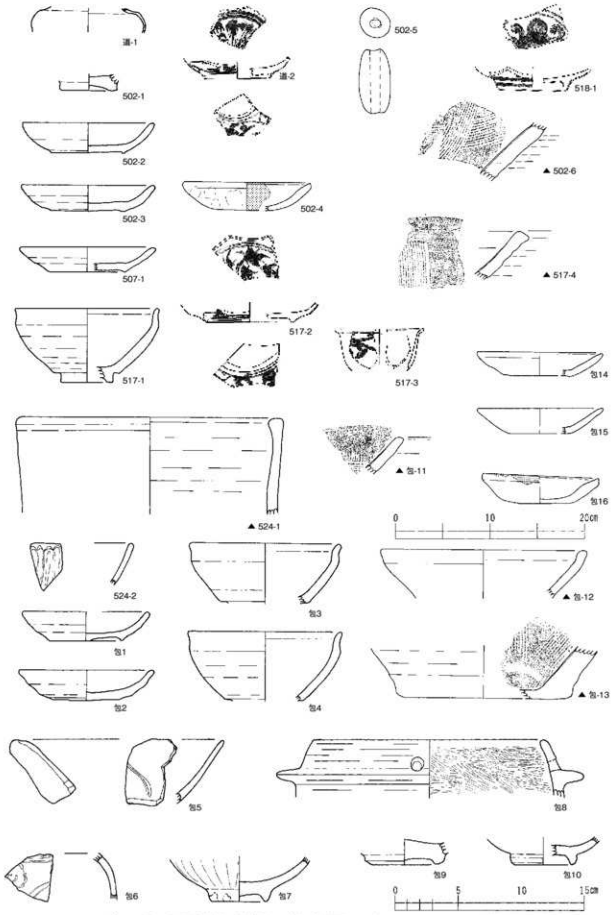
貿易陶磁；　染付・青磁・白磁等みられ、器種的には皿が多い。遺構 540 をでみてゆくと端反皿は４点出土しており、白磁（540-30）、染付（540-31, 32, 33）の別がある。この他皿では碁笥底（540-29）や軟質で見込み蛇の目釉剥ぎ（540-28）等みられる。碗・鉢類では青磁鉢（540-27）、染付碗（540-34）がある。染付碗は漳州窯系で、他の遺物群より新しい様相を呈し、遺構の時期を決める上での扱いに注意を要する。白磁筒香炉（540-34）は胴部に紐２条を締め、口縁は内に折り返し玉縁状とする。このように遺構 540 では白磁・染付を中心とし、青磁が激減した様相は一乗谷朝倉氏遺跡に比べ新しさを示すといえよう。他の遺構でも染付中心で皿（517-2, 518-1, 道 -2）小杯（517-3）がみられる。鉄釉小壷（道１）は大海形の茶入とおもわれる。胎土は黒色・緻密で焼成状態もよい。器壁は非常に薄いため手取りも軽い。いわゆる唐物茶入としての見所を備える。北庄城期遺構面のベースとなる黒色土層出土品（包５～７・９・10）では遺構群より古い様相を示し、青磁碗（包５・７・９・10）等中心である。また更に中世前期に遡るものもある。青白磁梅瓶（包５）は圏線と雲形の刻紋の一部がみえる。青磁碗（包５）は外面に捻り花紋と思われる刻線を施す。



第79図　中世陶磁器（遺構540-1）実測図1（S＝1／3・▲1／4）



第80図　中世陶磁器（遺構540-2）実測図２　（▲S＝1／4）



第81図　中世陶磁器（遺構その他）実測図３　（Ｓ＝１／３・▲１／４）

第22表　中世陶磁器観察表

№	器種	産地	口径	底径	器高	その他
遺構 540						
1	天目椀	瀬・美	12.0	4.6	5.8	鉄釉・置銘釉
2	天目椀	瀬・美	11.8	(4.6)	5.7	鉄釉・置銘釉
3	天目椀	瀬・美	11.0	4.2	5.3	鉄釉
4	天目椀	瀬・美	11.6		(5.3)	鉄釉
5	天目椀	瀬・美	(13.0)		(5.0)	鉄釉・置銘釉
6	丸椀	瀬・美	11.8	5.0	6.0	鉄釉
7	天目形壺	瀬・美	6.0	2.6	2.7	鉄釉
8	天目形壺	瀬・美	6.2	2.4	3.4	鉄釉
9	折縁皿	瀬・美	10.2	5.4	2.3	鉄釉
10	丸皿	瀬・美	10.4	5.4	2.1	灰釉
11	丸皿	瀬・美	11.0	5.4	2.2	灰釉
12	丸皿	瀬・美	10.4	6.4	2.1	灰釉
13	丸皿	瀬・美	10.4	5.4	2.1	灰釉
14	内湾皿	瀬・美	10.6	5.4	2.2	灰釉
15	内湾皿	瀬・美	11.4	7.4	2.1	灰釉
16	内湾皿	瀬・美	10.4	5.4	2.0	灰釉
17	内湾皿	瀬・美	10.4	5.2	2.3	灰釉
18	内湾皿	瀬・美	10.6	6.0	1.8	灰釉
19	稜皿	瀬・美	10.8	5.6	1.8	灰釉
20	稜皿	瀬・美	10.8	5.6	2.4	灰釉
21	折縁皿	瀬・美	11.2	6.2	2.1	灰釉
22	折縁皿	瀬・美	10.6	5.8	2.2	灰釉
23	茶入	瀬・美	4.8	最大径 9.2	(4.9)	
24	瓶	瀬・美	(6.2)		(7.8)	鉄釉
25	卸し皿	古瀬戸			(1.4)	
26	香炉	中国	11.0		(4.3)	白磁
27	鉢	中国		8.2	(3.5)	青磁
28	皿	中国	9.3	4.6	2.1	染付
29	皿	中国		3.2	(1.8)	碁笥底　染付
30	端反皿	中国	13.1	8.0	3.0	白磁
31	端反皿	中国	13.3	7.6	2.9	染付
32	端反皿	中国	13.7		(2.3)	白磁
33	端反皿	中国	13.6		(1.9)	白磁
34	碗	中国		4.9	(2.1)	染付
35	灯明皿		8.8	2.0	2.2	
36	灯明皿		9.2	3.0	2.2	
37	灯明皿		9.0	3.0	2.1	
38	灯明皿		9.1	4.1	2.0	
39	甕	越前			(9.4)	
40	鉢	越前	(19.0)		(7.3)	
41	鉢	瀬戸		12.6	(3.8)	錆釉
42	擂鉢	瀬戸	31.1		(3.5)	錆釉
43	擂鉢	瀬戸	(30.7)	11.7	11.0	櫛目 13 本 /3.7 cm
44	捏鉢	信楽	(30.0)		(7.7)	
45	擂鉢	越前	(30.2)		(8.5)	櫛目 9 本 /3.1 cm
46	擂鉢	越前	(30.0)		(8.1)	櫛目 9 本 /2.6 cm
47	擂鉢	越前	(30.0)		(7.2)	櫛目 8 本 /2.8 cm
48	擂鉢	越前	32.4	13.4	11.9	櫛目 9 本 /3 cm
49	擂鉢	越前	(31.2)	12.8	11.0	櫛目 7 本 /2 cm
50	擂鉢	越前	(31.0)		(4.3)	櫛目 13 本 /3.9 cm
51	擂鉢	越前	(30.0)		(6.0)	櫛目 7 本 /1.9 cm
52	擂鉢	越前			(4.1)	櫛目 6 本 /2.0 cm
53	擂鉢	越前			(5.6)	櫛目 6 本 /2 cm
54	擂鉢	越前			(5.2)	櫛目 6 本 /2 cm
55	擂鉢	越前	(29.8)		(6.4)	櫛目 9 本 /2.7 cm
56	擂鉢	越前	(31.0)		(3.6)	櫛目 3 本 /9 cm
57	擂鉢	越前	(36.0)		(7.4)	櫛目 13 本 /3 cm
58	擂鉢	越前	(18.8)		(4.7)	櫛目 6 本 /2 cm
遺構 502						
1	天目椀	瀬・美		4.6	1.2	錆釉
2	皿	瀬・美	10.4	5.9	2.4	灰釉
3	皿	瀬・美	11.6	5.8	2.1	灰釉
4	灯明皿		(10.0)	(4.0)	2.3	
5	土錘		最大径 3.3	全長 6.8		
6	擂鉢	越前			6.2	櫛目 12 本 /32 cm・11 本 /27 cm
遺構 507						
1	皿	瀬・美	10.8	6.1	2.0	灰釉　輪トチ痕
遺構 517						
1	天目椀	瀬・美	11.4	4.1	5.8	鉄釉・置銘釉
2	皿	中国		(6.7)	1.6	染付
3	端反小坏	中国	(7.0)		3.2	染付
4	擂鉢	越前	(32.0)		5.1	櫛目 7 本 /2 cm
遺構 518						
1	碗	中国		5.0	2.0	染付
遺構 524						
1	鉢		21.0		7.6	
2	碗	中国			3.4	青磁
遺構　遺（南北トレ）						
1	大海茶入	中国			(2.0)	鉄釉
2	皿	中国		5.0	(1.7)	染付
トレンチ H						
1	皿	瀬・美	10.1	5.8	2.3	灰釉
2	皿	瀬・美	10.8		2.3	灰釉、輪トチ痕
3	天目椀	瀬・美	12.0		(4.8)	鉄釉
4	天目椀	瀬・美	12.2		(5.6)	
5	碗	中国			(5.1)	青磁
6	梅瓶	中国			(3.7)	青白磁
7	碗	中国		(4.7)	(3.7)	青磁
8	羽釜		(18.4)		(4.6)	土師質、穿孔
9	碗	中国		5.0	(2.0)	青磁
10	碗	中国		(5.0)	(2.2)	青磁
11	擂鉢	越前			(4.0)	櫛目 8 本 /2 cm
12	鉢	越前	(22.0)		(5.1)	
13	擂鉢	越前		(18.8)	(5.6)	櫛目 8 本 /2 cm
14	土師皿		10.0	5.1	1.9	
15	土師皿		10.0	4.8	2.0	
16	灯明皿		9.2	5.2	2.4	

第２項　木製品（16 世紀末）

第 82 図１～ 16 は漆塗椀である。遺構 540 の溝からがほとんどで、遺構 521 と 531 の柱穴からも３点出土している。形態的には、A 類～ F 類が出土している（分類基準は、63 ページを参照）。なお、体部が欠損しており、分類できなかったもの９・14・15・16 もある。A 類（１～４）は、口径 16 ㎝前後、器高９㎝前後で、体部が緩やかに立ちあがり、全体に大振りであり、高台部が厚い。B 類（５～８）は、口径 14 ㎝～ 16 ㎝、器高６～７㎝で、A 類よりも高台部が低く口径も小さい。C 類（10）は、口径 13.6 ㎝、器高 5.9 ㎝。D 類（11）は、口径 13 ㎝、器高 5.1 ㎝。C 類よりも若干小ぶりである。E 類（12）は、口径 11.4 ㎝、器高３㎝程。器高が他の器種の半分程度である。F 類（13）は、口径 11.6 ㎝、器高 3.2 ㎝。端反椀であり、内外共赤色である。１・３には高台部内外面にロクロ目（筋）が見られ、３・４・11 の高台裏には「×」や「○」などの刻印がある。２・５には体部に孔があり、柄杓に転用されたものと考えられる。6･10 にも体部に孔がある。上塗りでは、外面黒内面赤が約７割で、内外面共赤が約２割、内外面共黒は１点のみで１割弱である。漆絵には、開扇・鵜・松・分銅・蓬莱文があり、２・３には高台内面に描かれるが、それ以外はすべて体部外面である。

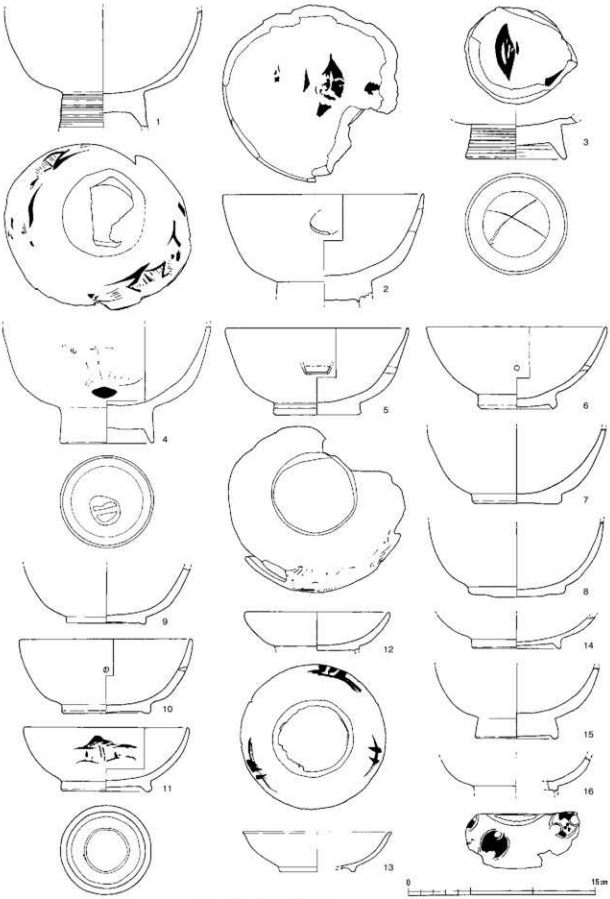
第 83 図 17 は荷付札で、上部の切り込み部分から上が欠損する。「末村□□郎」と書かれている。19 は板状の人形と考えられ、頭部を削り込み頭部を作り出す。頭部は目と口を表現し、先端がやや尖っている。体部側面には木釘が打ち込まれる。20 は扇子であり骨が８本残る。21 は歯の目が粗い解櫛であり、歯はほとんど遺存せず棟の部分のみ。22・23 は両端が削られる両口箸である。25・26 は柄杓の柄。28 は鍬の身の部分で、半分が欠損。29 は樽の蓋で、焼印がある。30 は内外面とも黒漆塗りの蓋である。

第 23 表　中世漆器観察表

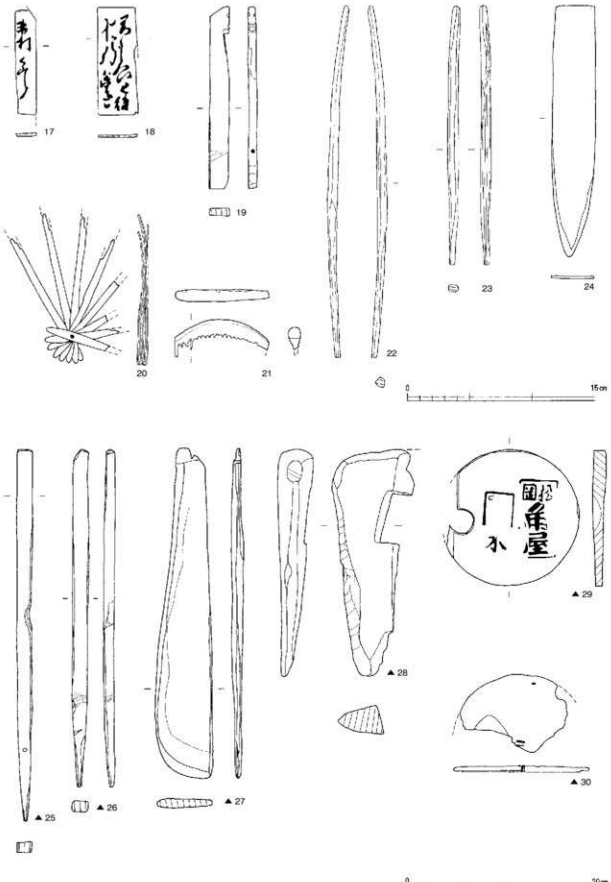
挿図番号	遺構番号	時期	器種	上塗							法量(cm)				備考
				内面	外面	漆絵					口径	器高	高台径	高台高	
						場所		色	種類						
82-1	540	16世紀末	A	赤	黒	外	2	赤	蓬莱文	絵	(15.5)	(9.4)	7	(2.9)	
82-2	540	16世紀末	A	剥落	剥落	内		赤	黒	絵	15.8	(8.7)	(7.5)	(1.7)	体部に孔あり
82-3	531	16世紀末？	A	黒	黒	内		赤	黒	絵	(9.7)	(3.5)	(7.9)	(2.6)	刻印×|
82-4	540	16世紀末	A	赤	黒	外	3箇所	赤	黒	絵	(16.4)	(9.3)	7.4	2.9	高台裏に刻印あり
82-5	540	16世紀末	B	赤	黒	外		赤	蓬莱文？	絵	14.4	6.9	6.9	1.0	体部に孔あり
82-6	540	16世紀末	B	赤	黒	無					16.2	6.6	6.2	1.2	体部に孔あり
82-7	540	16世紀末	B	剥落	剥落						(14.0)	(6.0)	7	0.8	
82-8	521	16世紀末	B	赤	?	無？					(13.8)	(6.1)	(7.6)	(0.8)	高台部削平？
82-9	540	16世紀末	－	赤	黒	無					(13.0)	(4.5)	6.3	0.5	
82-10	540	16世紀末	C	赤	黒	無					13.6	5.9	7	0.7	体部に孔あり
82-11	540	16世紀末	D	赤	黒	外	2	赤	松	絵	13	5.1	7.1	0.8	刻印○)
82-12	540	16世紀末	E	赤	黒	外	3	赤	鶴	絵	11.4	(3.1)	(6.6)	(0.4)	
82-13	540	16世紀末	F	赤	赤	無					11.6	3.2	6	0.4	
82-14	531	16世紀末？	－	赤	黒	無					(12.4)	(2.6)	7.0	0.7	
82-15	540	16世紀末	－	赤	赤	無					(12.8)	(5.7)	6.5	1.6	
82-16	540	16世紀末	－	赤	赤	外		黒	分銅		(14.0)	(2.6)	(7.0)	(0.3)	

第 24 表　中世木製品観察表

挿図番号	遺構番号	時期	種類	法量(cm)			備考
				長	幅	厚	
83-17	540	16世紀末	木簡	8.3	(1.7)	0.3	
83-18	540	16世紀末	木簡	8.5	3.2	0.2	
83-19	540	16世紀末	人形	14.2	1.6	0.7	
83-20	540	16世紀末	扇子	(12.0)		0.8	
83-21	506	16世紀末	解櫛	7.4	3.0	(1.0)	
83-22	540	16世紀末	箸	28.2	0.8	0.8	
83-23	540	16世紀末	箸	20.6	0.9	0.6	
83-24	540	16世紀末	加工木	19.7	3.4	0.2	
83-25	507	16世紀末	柄杓柄	39.4	1.6	1.2	
83-26	540	16世紀末	柄杓柄	35.9	1.7	1.2	
83-27	540	16世紀末	加工木	25.5	4.5	0.7	
83-28	540	16世紀末	鍬	23.4	(8.3)	3.8	
83-29	540	16世紀末	蓋	14.2	－	1.4	焼印あり
83-30	517	16世紀末	蓋	14.4	－	0.8	



第82図　中世漆器実測図（S＝1／3）

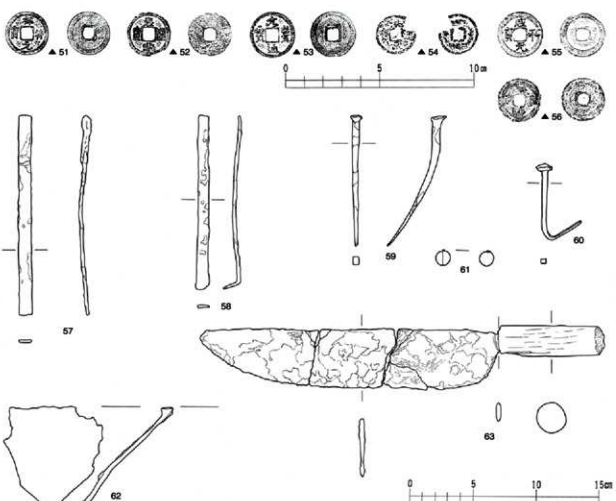


第83図　中世木製品実測図　（S＝1／3・▲25～30は1／4）

第３項　金属製品

51 から 56 は銭貨である。51 は祥符元宝、52 は皇宋通宝、53 元豊通宝、54 洪武通宝、55 は感平元宝、56 は判字できなかった。54・56 は字体がはっきりしない程鋳上がりが悪く、通常よりも肉薄であることから模鋳銭と考えられる。

57 は鉄製で、板の一方を折り返し輪を作り、棒状のものを通すようになる。58 は鉄製鎹、59・60 は鉄製和釘である。61 は鉛製鉄砲玉である。鋳型の合わせ目や湯口跡が残る。62 は鉄鍋の一部である。口縁部が残っていたため推定できた。63 は包丁である。刃渡り約 20 ㎝、木製の柄が完存していた。



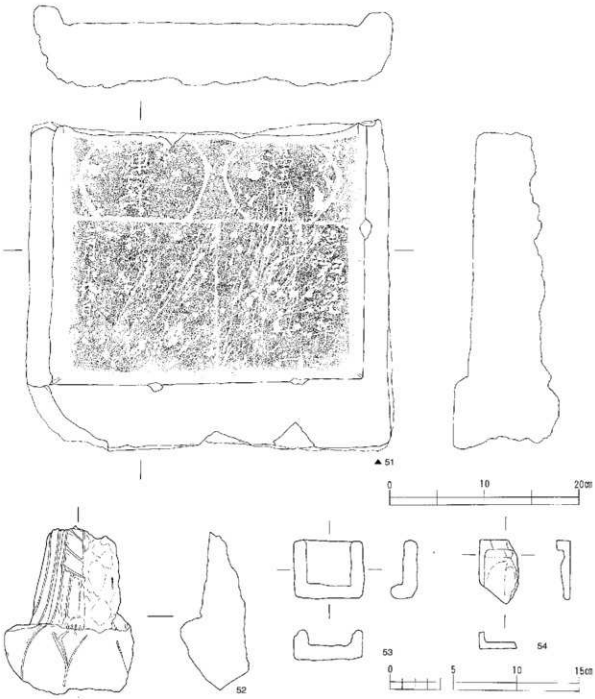
第 84 図　中世金属製品実測・拓本図　（▲ 51 ～ 56 は S ＝ 1 / 2 ・ 57 ～ 63 は 1 / 3 ）

第 25 表　中世金属製品観察表

No.	遺構	名称	外径(cm)	穿径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	時代	初鋳年	No.	遺物番号	種別	法　量(cm)	実測番号
51	540	祥符元宝	23.3	6.2	1.2	2.7	北宋	1009	57	507		現存長15.9 最大幅1.1 厚さ0.2	507-1
52	540	皇宋通宝	23.3	6.4	1.2	2.3	北宋	1038	58	507	鎹	口径14.6 底径1.0 高さ0.3	507-2
53	540	元豊通宝	24.6	6.5	1.6	3.9	北宋	1368	59	540	和釘	全長11.4 基部長11.0 基部長幅0.65基部厚0.45 頭部1.25 頭部厚0.25	540-2
54	502	洪武通宝	21	5.4	1.4	1.5	明	968	60	540	和釘	全長9.1 基部長4.8 基部長幅0.4基部厚0.35 頭部1.2 頭部厚0.85	540-3
55	道　北溝	感平元宝	24.3	6.5	1.2	2.1	北宋	不詳	61	540	鉛砲の玉	最大径1.2	540
56	道　北溝	無文銭	19.5	4.7	2.1	1.1	中世	模鋳銭	62	523	鍋	高さ8.0 厚さ2～4.5	523
									63	517	包丁	刃長約23.6 柄長約3.3 全長31.9 柄径2.3	517

第4項　石製品

51は2基の五輪塔が線刻された笏谷石製墓石である。水輪部に「蓮華」とあることから日蓮宗系のものか。「享禄元年」の年号が刻まれている。52は笏谷石製仏像である。蓮華座と脚部がかろうじて残る。袈裟を着し長い袖を垂らすことから地蔵菩薩像であろうか。53は笏谷石製の硯状製品である。上半は欠ける全体の様子は不明である。54は硯である。



第85図　中世石製品実測図　(S= 1 / 3・▲51は1 / 4)

第26表　中世石製品観察表

No.	遺構番号	種別	石質	法量(cm)	実測番号	No.	遺構番号	種別	石質	法量(cm)	実測番号
51		墓石	笏谷石(緑色凝灰岩)			53	540	硯?	笏谷石(緑色凝灰岩)	幅(4.6) 横(1.1) 厚さ1.1	540-1
52		石仏	笏谷石(緑色凝灰岩)	残高 (13.2)	P910	54	502	硯		幅(4.6) 横(3.1) 厚さ1.1	502-1

第５章　まとめ

周知の遺跡としては「近世遺跡」と登録されている「福井城跡」は、非常に濃密な内容を持つ古代から近世･近代に至る複合遺跡であることがわかった。以下今回の調査地点での成果を時代毎に略述する。

［調査地の自然地形］　最深部まで調査が及ばず推測も含まれるが、調査区の大部分が南北方向の自然河川（谷）の流路にあたる。調査地北には「お泉水屋敷」が広がるが、苑池は湧水地や河川跡等水を得やすい場所に営まれる例が多いことから周囲は低湿地の可能性が高い。また河川東岸９－Ａ～Ｆ区では比較的浅い高さで地山が確認され、これより東が生活に適した高乾地と考えられる。

［律令期］　自然河川東岸９－Ａ～Ｆ区の地山面でピット等数基確認された。付近から須恵器片が出土している。遺跡はここより東側に展開する。

［朝倉北庄期］　自然河川は時代を経る中で徐々に埋まり川幅も狭まった。明確な遺構はなかった。川に堆積した黒色粘土層内より焼骨片が出土した。ただし骨は纏まった状態でないため三味所的場所と見ることができないか。また享禄元年銘の板碑や石仏等墓所の様相を示す遺物も出土している。その他の遺物では古瀬戸深鉢や越前焼擂鉢等出土し、15 世紀～ 16 世紀代の時期を示すが、朝倉一族が北庄に館を置くのもこの頃である。

［北庄城期］　自然河川は更に狭まり木杭・石等で簡易的護岸をおこなう。この溝化した南北流路に直交して道路が作られる。道幅は 25 間足らずと広く、路面は砂利が叩き締められ重要な道路であることがわかる。溝遺構 540 の石積み護岸が橋台とすれば入念な作りである。（第 76 図）

溝 540 出土遺物群の編年観から時期について検討する。まず瀬戸美濃焼に関し、大窯Ⅲ～Ⅳ期に集中する。黄瀬戸をはじめとしたいわゆる桃山茶陶が出土しておらず、特に志野や唐津焼が出土していないことから 16 世紀最末期～ 17 世紀初期までは降がり得ないと考えられる。又、越前焼・瀬戸美濃焼が、一乗谷出土品の様相に比べ新しい様相を持つことから少なくとも 1573 年より遡らないと考えられる。以上から遺物群の年代観は大体 1573 ～ 1580 年代後半頃と捉えられよう。但し、比較的上層から出土しているが中国染付碗（540-34）の１点のみ上記年代観より新しい。この遺物の扱いによっては 17 世紀初期（福井城築城期）まで降る可能性もある。

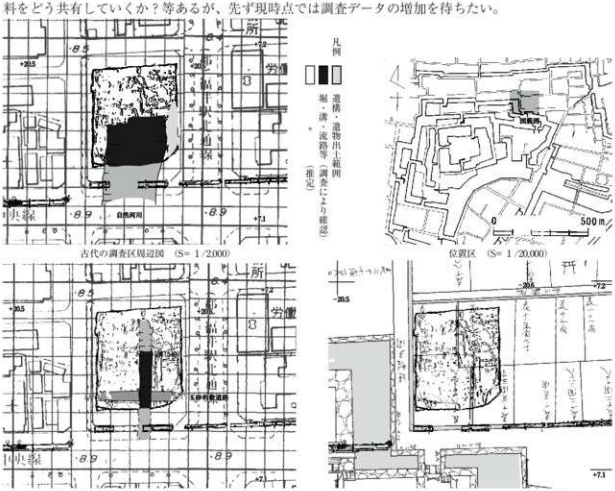
次に遺物組成の特色として､瀬戸美濃焼の擂鉢・平鉢等錆釉の調理具類が一定量みられることである。一乗谷遺跡での出土状況は、擂鉢等の分野は越前焼製品独占状態に等しい。福井城築城以降についてみると、擂鉢等は一乗谷に同じく越前焼が中心で、これに唐津焼等が加わる。瀬戸美濃焼の擂鉢類を一定量みるのは後にも先にもこの時期のみである。朝倉氏滅亡に際し越前焼窯元、あるいは流通関係が一時的に麻痺・衰退し、その間隙に瀬戸・美濃製品流通ルートから来た。あるいは柴田氏をはじめ、朝倉氏滅亡後の越前支配者が美濃･尾張地方出身であることから彼らの関与があるかも知れない。朝倉氏滅亡･支配者交代が契機と考えられるが、更にこの時期の発掘事例の増加を待ちたい。この他、土師質皿や甕が極端に少ないこともこの遺物群の特色である。

最後に出土状態において、完形に近いものや、擂鉢はあまり使用されずに廃棄されたものが多い。溝遺構 540 の埋土堆積状況は自然に埋まるというより人為的に埋められたと考えられる。以上から使用可能な土器もかまわず投棄し、急ぎ埋め立てた状況を看取れる。なお、福井城築城に際して埋め立てたのか、それ以前かは遺物を含め検討を要する。

［福井城期］　絵図から調査地を見ると、現存中最も古い様子を示す「北ノ庄城郭図」（慶長年間）では武家屋敷屋敷４軒分に相当する。各時期の絵図では住人は変化するが、屋敷地割りに大きな変化はみられない。絵図の屋敷地割りを詳細に見ると全時期を通じ、「田」字形にみえる屋敷地割は、Ｂ屋敷が鍵の手に南西に突出した形状で調査では掘り直しも含め確認された。４軒の屋敷は溝で区画されることがわかったが、特に溝遺構 116 は城下絵図でも溝として記載され、明治初期の地籍図でも屋敷地とは別な地番が付き区分されていることから給・排水等の役目をもった特別な溝であったと考えられる。

Ａ・Ｃ屋敷の特に西側で 17 世紀後半のゴミ穴遺構を多く検出し、この部分が勝手の空間と推定された。因みに絵図によるとＡ・Ｂ屋敷の表は南面、Ｃ・Ｄ屋敷の表は北面である。ゴミ穴出土遺物の接合状況をみると、遺構 82 と 230 のように違う屋敷で同一ゴミを分離して捨てる例、本来遺構 82 のゴミである伊万里皿（82-11 ～ 13）が周囲の遺構等でみつかるのは 230 の例と違い、類似場所で穴を掘削・廃棄・埋め戻しを繰り返した結果、古いゴミ穴を切り、切られた遺構の遺物が混じったとみられる。以上、遺構の遺存状況が悪く屋敷内空間を完全に復元することができないことは残念であったかったが、遺存状況の悪さの理由についても今後検討すべきとおもわれる。しかし遺構に比し、遺物の質・量の豊富さは今回の成果であり 200 石クラス武士の生活の一端を知る上で重要である。

以上福井市街地の今後の調査について様々な問題点・視点を得た。１つは古代～中世遺跡の広がりを限られた調査の中でどう効果的に情報を得ていくか。２つめに発掘調査の情報と福井城下絵図等伝世資料をどう共有していくか？等あるが、先ず現時点では調査データの増加を待ちたい。



第 86 図　古代・中世・近世の調査区周辺図

附章　福井城跡出土木製品の樹種

植田弥生（パレオ・ラボ）

1．はじめに

福井県福井市に所在する福井城跡から出土した木製品の樹種同定を報告する。木製品とその樹種から、当地域の16世紀末～幕末の時期の木材利用の一旦を知ることができた。

2．方法

材の組織標本は、片刃の剃刀を用いて材の横断面（木口）・接線断面（板目）・放射断面（柾目）の3方向を薄く剥ぎ取りスライドグラスの上に並べ、ガムクロラールで封入し永久プレパラートを作成した。そしてこれらの材組織を光学顕微鏡を用いて観察し同定を行った。加工面を考慮し3方向は採取できなかった試料もある。作成したプレパラートはパレオ・ラボに保管してある。

3．結果

同定結果を表にまとめ、以下に同定材組織を分類順に記載する。

スギ　Cryptomeria japonica D.Don　スギ科　第87図　1-2（52-84　箸）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材部の量は多く仮道管の壁は極めて厚い。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。分野壁孔は大きく、孔口が水平に大きく開いたスギ型で1分野に主に2個ある。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の谷間を好む常緑高木である。日本海側では縄文時代には低地にもスギ林が成立していたことが知られている。材はやや軽軟で加工は容易である。

ヒノキ属　Chamaecyparis　ヒノキ科　第87図　3（50-107　木簡）

当試料は肉眼観察で針葉樹材であることがわかり、墨書きがあった点や加工痕への配慮から放射断面（柾目）のみを採取した。分野壁孔はやや小さく外形は丸い、1分野に2～3個並び、型は壁が痩せて不明瞭であるが一部でヒノキ型が観察された。ヒノキまたはサワラと思われるが分野壁孔が充分観察できないのでヒノキ属としておく。

ヒノキ属は温帯に分布し、本州の福島県以南・四国・九州の山中のやや乾燥した尾根や岩上に生育するヒノキと、ヒノキより分布域は狭く東北南部から中部地方の沢沿いの岩上に生育するサワラがある。材質は耐朽性・切削性・割裂性にすぐれる。

アスナロ　Thujopsis dolabrata sieb. et Zucc.　ヒノキ科　第87図　4-6（64-259　上水道継手2）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量は多く、樹脂細胞は晩材部に散在または接線状に分布する。分野壁孔は小さく、1分野に主に3個ある。放射組織はほとんどが5細胞高前後と低い。

アスナロは日本特産の１属１種で、本州・四国・九州の温帯の山中に生育する常緑高木である。材質は良く建築材として有用であるがヒノキよりやや劣る。

ブナ属　Fagus　ブナ科　第87図　7-9（82-4　椀）

丸みをおびた小型の管孔が密在し除々に径を減じてゆき、晩材では極めて小型となり分布数も減る散孔材である。道管の壁孔は交互状～対列状で孔口はレンズ状で水平に大きく開く部分もある。穿孔は単穿孔と階段数が10～20本の階段状のものがある。放射組織は異性、１～３細胞幅のものと幅が広く背の高い広放射組織があり、上下端に方形細胞が見られ、道管との壁孔は大きなレンズ状である。

ブナ属は温帯の極相林の代表種で大木となる落葉樹である。北海道南部以南の肥沃な山地に群生するブナと、本州以南のおもに太平洋側に分布しブナより低地から生育しているイヌブナの２種がある。果実は食用となり、材も建築材から漆器まで用途が広い。

モクレン属　Magnolia　モクレン属　第88図　10-12（63-246　下駄）

小型の管孔が単独または２～数個が複合し散在し、晩材部でやや径を減じる散孔材である。道管の壁孔は惰円形で交互状～階段状に配列し、穿孔は主に単一であるが階段穿孔も見られ、内腔には水平や弧状のチロースがある。放射組織は異性、１～２細胞幅、上下端に方形細胞があり、道管との壁孔は大きく階段状または対列状に整然と配列している。

モクレン属は暖帯または温帯に分布する落葉性の高木または小高木である。北海道以南の山地に生育するホオノキ・コブシ、本州と九州に生育するタムシバ、関東北部以西に生育するオオヤマレンゲ、中部地方西南部に生育するシデコブシがある。材質は、やや軽軟で割裂性は大であり割れや狂いが少なく加工しやすい材である。

トチノキ　Aesculus turbinata Blume　トチノキ科　第88図　13-14（49-42　椀）

当試料は完形に近い漆器椀であり、破損した部分から接線・放射断面は取れたが横断面は取れなかった。道管の壁孔は交互状に接合し、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は単列同性で層階状に配列し、道管と放射組織の壁孔はやや大きく円形で交互状に密在する。以上の特徴からトチノキであると同定できた。

トチノキは北海道以南の温帯の谷間に生育する落葉高木である。種子はアク抜きが必要だが食用となり、材は軽軟で緻密で加工し易く、材面は絹系光沢がある。木理は不規則で耐久性は低く狂いがでやすい。

４．まとめ

樹種同定を行った６試料は福井城跡から出土した中・近世の遺物である。

下駄は差歯下駄で、本体と歯の材質はともにモクレン属であった。近代ではキリ下駄やほおば下駄ということばが下駄の代名詞のように使われ、キリやホオノキが使われていることを示している。しかし今までに発掘された下駄材質にはホオノキを含むモクレン属やキリの出土数は以外と少ない。発掘され樹種が調べられた下駄材は、針葉樹ではマツ属・スギ・ヒノキ属、広葉樹ではケヤキ・クリ・トネリコ属などが多い（パリノ・サーヴェイ㈱　1988、鈴木・能城 1990、小日置 1995、松葉 1997a、松葉 1997b）。これらの資料はおもに江戸城下町の発掘資料なので、当地城の調査例が増え下駄材使用傾向が

明らかになってゆくことは、地域性や近代の下駄文化を知る上で意義がある。

漆器椀はトチノキとブナ属であり、この２種は近代では全国的に最もよく使われている材である。２種とも材の乾燥は難しく狂いやすいが、材質はやわらかで加工しやすいうえ大径木になるので大量入手が容易である。近世には大量生産に適した材としてよく使われてきたことが当遺跡発掘の試料からも示された。

スギは板状に加工容易であり自然植生でも当地域に豊富に生育している樹種であるが、墨書のある木簡はヒノキ属であった。スギではなくヒノキ属が強く選択され使用されたのではないだろうか。

上水道継手２は竹樋を通していたくり抜きがあり中心部に近いアスナロの心材であった。水路関連の遺構では保存性・耐水性が高いヒノキ・トガサワラ・コウヤマキ・マツ属などの針葉樹材が使用されることが知られており、アスナロも同様材質であることから使用されたと思われる。

引用文献

小日置晴展　1995　飯田町遺跡出土の木製品等について　「飯田町遺跡」p383-470　飯田町遺跡調査会。

鈴木三男・能城修一　1990　木製品の樹種　「都立白鴎高校内埋蔵文化財発掘調査報告書」p208-216　都立白鴎高校遺跡調査会。

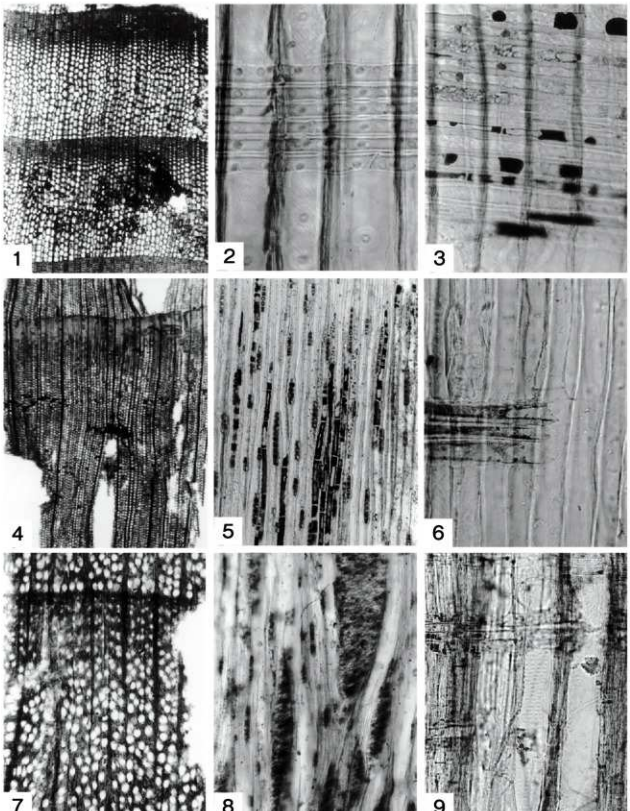
パリノ・サーヴェイ㈱　1988　木製品の樹種同定　「東京都千代田区紀尾井町遺跡報告」　p524-534　千代田区紀尾井町遺跡調査会。

松葉 礼子　1997a　溜池遺跡出土木製品の樹種同定　「溜池遺跡　第Ⅱ分冊」 p1-30　地下鉄７号線溜池・駒込間遺跡調査会。

松葉礼子　1997b　江東橋二丁目遺跡出土木製品の樹種同定　「東京都墨田区江東橋二丁目遺跡」 p331-338　雇用促進事業団墨田区江東橋二丁目遺跡調査団。

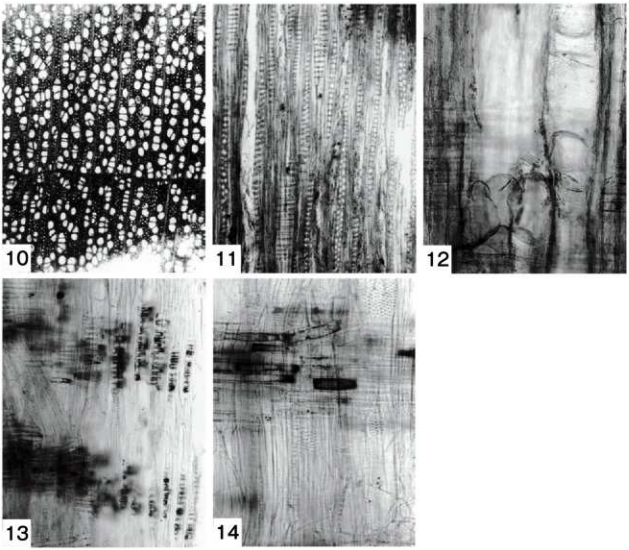
第 27 表　福井城跡出土木製品の樹種

実測図番号	遺物名	樹種	時代	出土遺構	断面写真番号
第49図　42	漆塗　椀	トチノキ	19世紀中葉	遺構28	第88図　13-14
第52図　84	著	スギ	17世紀中葉	遺構2	第87図　1-2
第54図　107	木簡	ヒノキ属	17世紀後半	遺構179	第87図　3
第63図　246	下駄(本体)	モクレン属	近世		第88図　10-12
	下駄(差歯)	モクレン属			
第64図　259	上水道継手	アスナロ	19世紀	継手2	第87図　4-6
第82図　4	漆塗　椀	ブナ属	16世紀末	遺構540	第87図　7-9



1-3：スギ(実測番号52-84　箸，1．横断面，2．放射断面）　3：ヒノキ属(実測番号54-107　木簡，3．放射断面）
4-6：アスナロ(実測番号64-259　櫛手2，4．横断面，5．接線断面，6．放射断面）
7-9：ブナ属(実測番号82-4　椀，7．横断面，8．接線断面，9．放射断面）
bar：1・4・7は0.5mm，5・8は0.2mm，2・3・6は0.05mm，9は0.1mm

第87図　福井城跡出土木製品の樹種（1）



10-11：モクレン属（実測番号63-246　下肌本体，10．横断面，11．接線断面，12．放射断面）
13-14：トチノキ（実測番号49-42　輪，13．接線断面，14．放射断面）
bar：10は0.5mm，11・13は0.2mm，12・14は0.1mm

第 88 図　福井城跡出土木製品の樹種（２）

（1）遠景（西より）

（2）全景

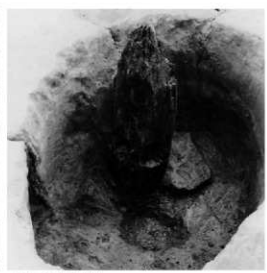
（1）屋敷B　柱穴群（北より）

（2）屋敷C　全景

（1）柱穴遺構 50

（2）柱穴遺構 45

（3）柱穴遺構 53


（4）柱穴遺構 15

（5）柱穴遺構 17

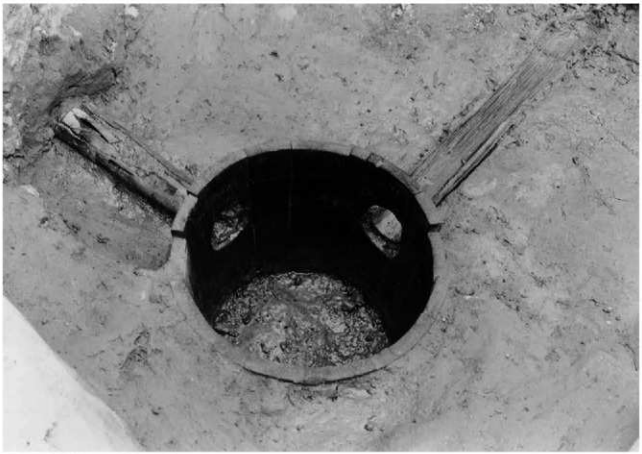
（6）柱穴遺構 10

（1）池状遺構 232 導水部（西より）

（2）池状遺構 232（南より）

（1）上水道施設遺構 304（北より）

（2）上水道施設井戸遺構 301（東より）



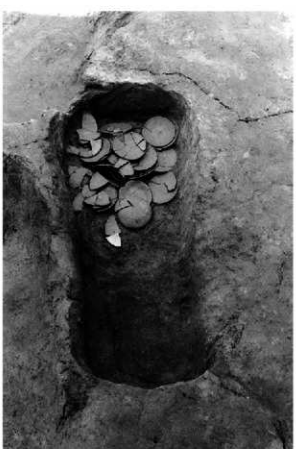
（1）上水道施設溜桝遺構 303（南西より）

（2）木樋遺構 306（南より）

（1）上水道施設竹管継手（部分）

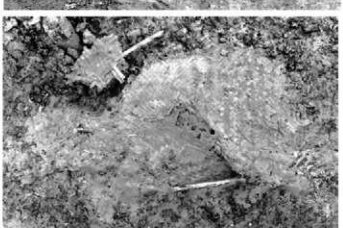
（2）上水道施設井戸遺構 205（北東より）

（1）土坑遺構 92（北西より）



（2）土坑遺構 133

（3）中世遺構 540 漆器出土状況

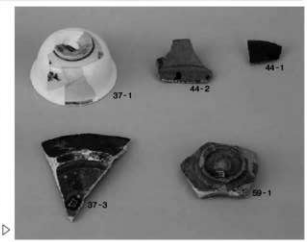


（4）中世遺構 540 編籠出土状況

△遺構29

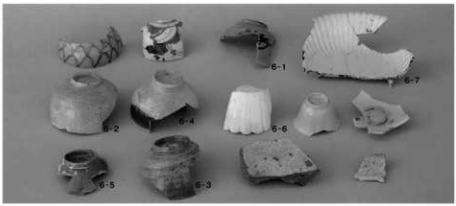
△遺構29

△遺構30



遺構37・44・59▷

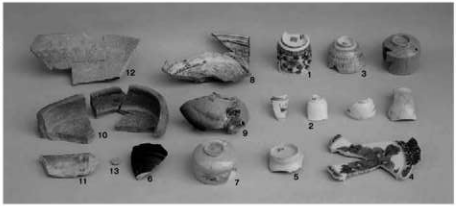
△遺構6



△遺構28

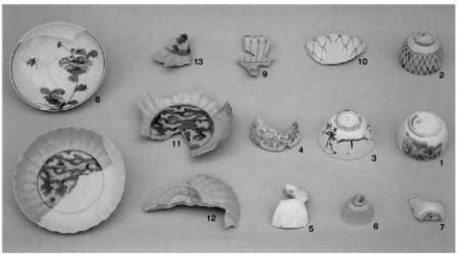
△遺構28

△遺構62



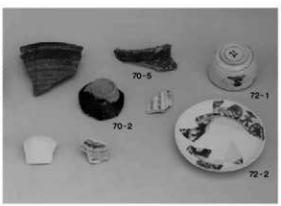
△遺構73

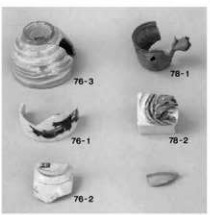
△△遺構82

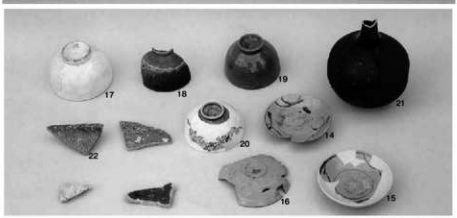


△遺構65

△遺構70・72・76・78







図版第十一　近世陶磁器三

△94・95・96

△95

△95

△96・99

△86・93

△86

△89・91

△ 第巻112

△ 第巻116

△ 第巻116

△ 第巻100・101・109

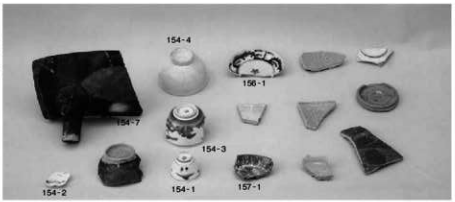
△ 第巻110

△ 第巻112

図版第十二　近世陶磁器四

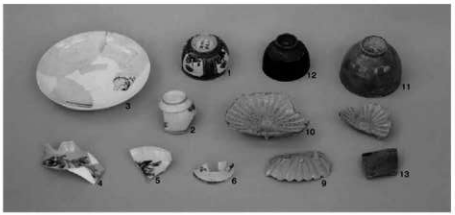
△遺構122

△遺構154・156

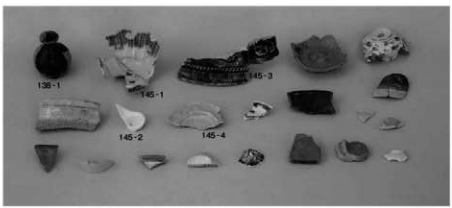


△遺構127・129

△遺構179



△遺構145

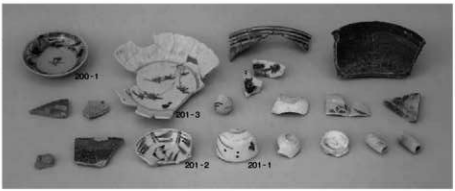


△遺構182

図版第十三　近世陶磁器五

△遺構187

△遺構200・201



△遺構225

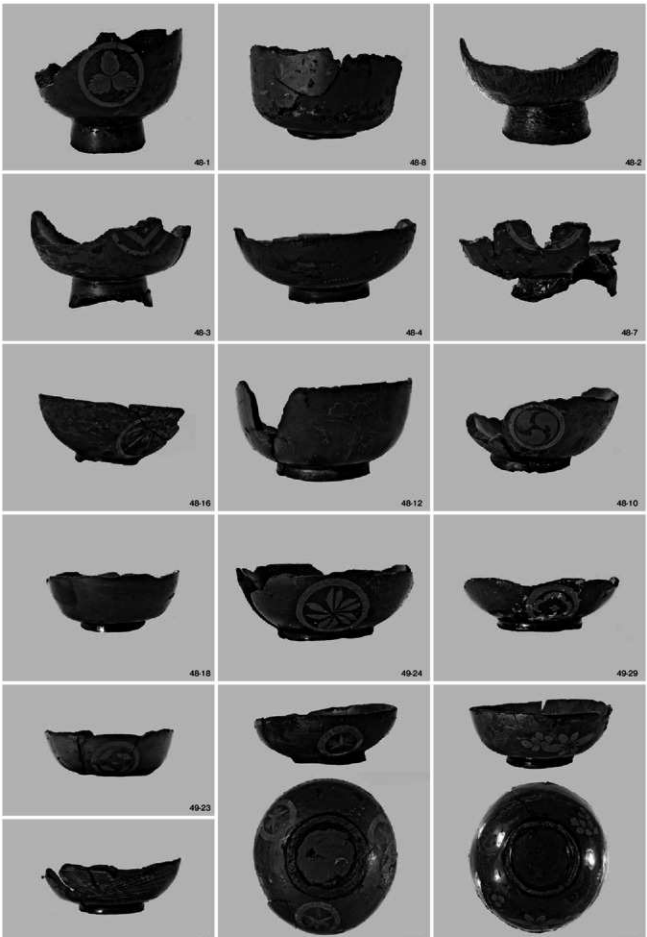
△遺構230

△遺構232

△遺構232・233・234・242

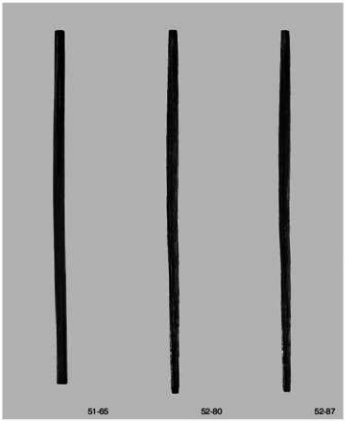
△遺構302

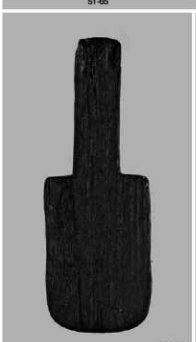
図版第十五　近世木製品一　漆器



図版第十六　近世木製品二　漆器

図版第十七　近世木製品三





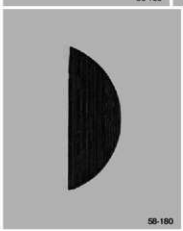
図版第十八　近世木製品四

56-151

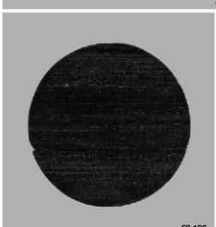
56-158

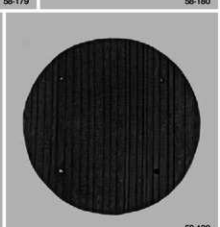
56-154

58-179


58-180

57-178


58-186


58-189

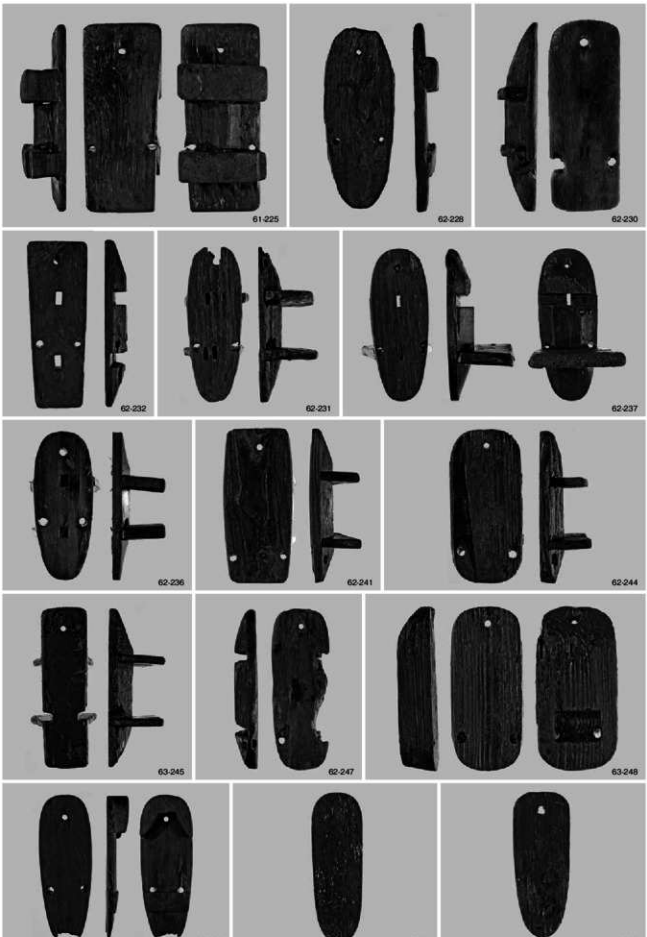
57-175

57-171

59-195

57-170

図版第十九　近世木製品五　下駄



図版第二十　近世木製品六

60-199

60-200

60-201

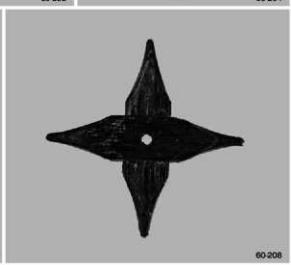
60-202

60-203

60-204

60-205

60-207

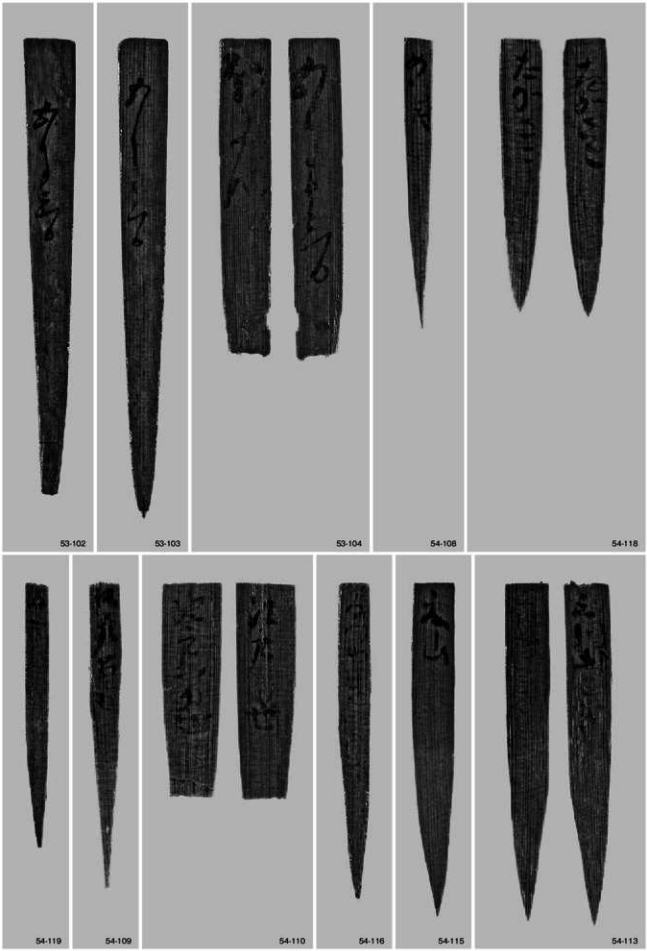

60-208

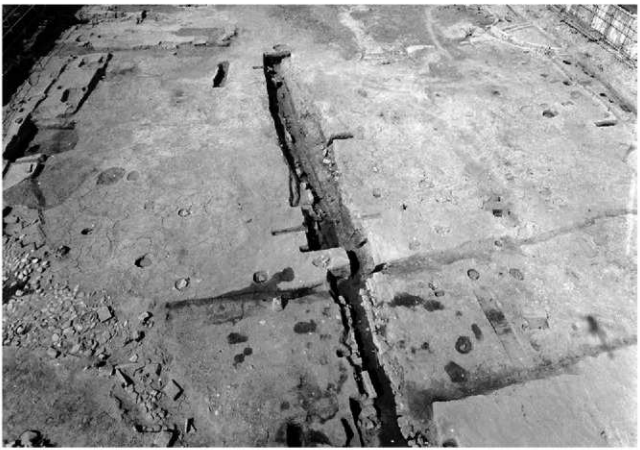
60-198

60-206

60-211

図版第二十一　近世木製品七　木簡





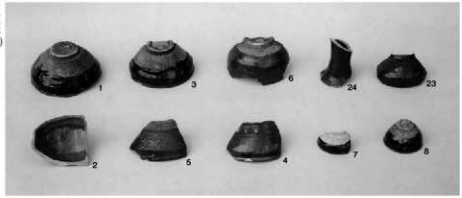
（1）溝遺構540　全景（南より）

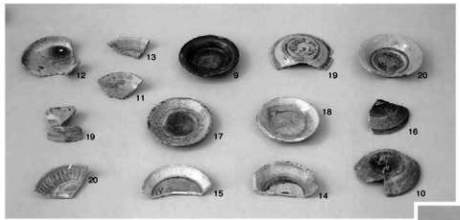
（2）土坑群（西より）

（1）溝遺構540　石積部（南より）

（2）舗装道路（東より）

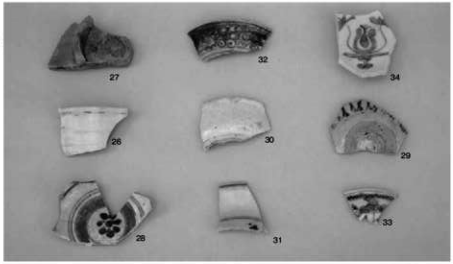
△遺構540

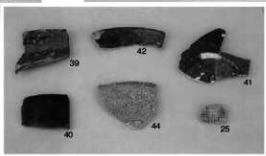




△遺構502・517・518・524

△遺構540





△遺構540

図版第二十五　中世木製品一　漆器

82-2

82-4

82-1

82-5

82-6

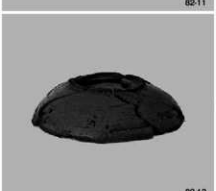
82-3

82-10

82-11

82-12

82-15


82-13

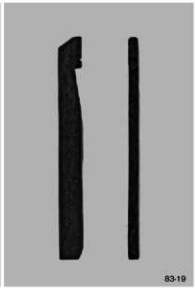
82-16

図版第二十六　中世木製品二

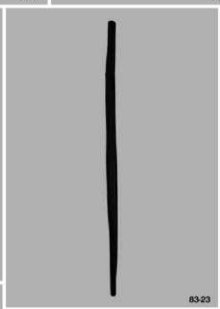
83-18

83-21

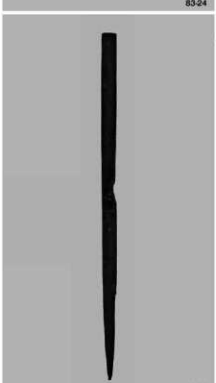
83-20

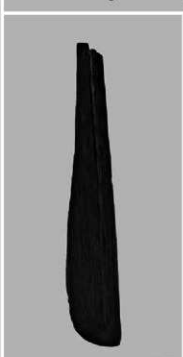

83-19

83-24


83-23

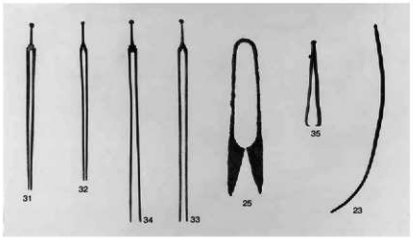
83-28

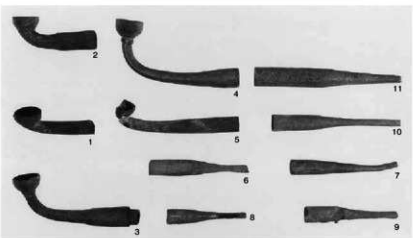

83-25

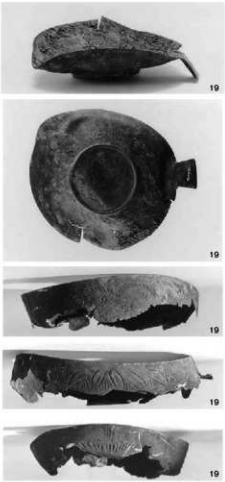

83-27

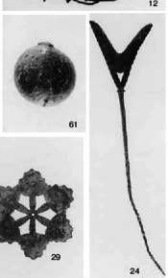
83-29

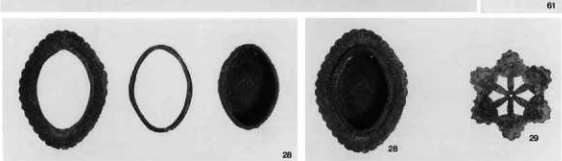
図版第二十七　中・近世金属製品





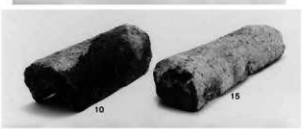


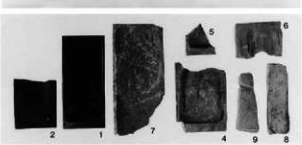




中・近世金属製品

図版第二十八　中・近世石製品





中・近世石製品

報告書抄録

ふりがな	ふくいじょうあと
書名	福井城跡
副書名	国際交流会館建設工事に伴う調査
巻次	
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第３６集
編著者名	河村健史 本多達哉
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所在地	〒910-2152　福井県福井市安波賀町4－10　℡0776－41－3644
発行年月日	2008年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ふくいじょう 福井城	ふくいけんふくいし 福井県福井市 ほうえい　ちょうめ 宝永３丁目	18201	01141	36度 3分 52秒	136度 13分 42秒	19940603～ 19940906	2,295	福井県国際交流会館建設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福井城	城跡 （武家屋敷）	中世	石敷道路　1条 水路　2条 その他柱穴、土坑	瀬戸美濃製陶器 越前焼 磁器 五輪塔 墓石 漆塗椀	福井城跡（1601）以前の北庄城期（1575～1600）の遺構・遺物を検出 17世紀後半のゴミ廃棄土坑より陶磁器・木製品などが一括出土 19世紀の上水道施設を検出
		江戸	池　1 井戸　1基 竹製水道管14条 導水路　2条 溝　15条 その他柱穴、土坑　多数	陶磁器 土師質土器 瓦 石製品 木製品 金属製品	

この報告は、本来ならば平成８年度に刊行する予定でしたが、諸般の事情により遅延し、今日に至り、関係各位にはご迷惑をおかけしました。深くおわび申し上げます。

福井県埋蔵文化財調査報告　第36集

福　井　城　跡

― 国際交流会館建設に伴う発掘調査 ―

平成20年3月21日　印刷
平成20年3月28日　発行

発行　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒910-2152　福井市安波賀町4-10
印刷　創文堂印刷株式会社